

# 川柳塔

平成二年七月十五日 印刷  
平成二年八月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通巻七五九号



日川協加盟

No. 759

八月号

# 「川柳塔」碑参拝と 同人総会・本社句会

## 集 合

10月6日(上) 午後1時 高野山大霊園前  
 「川柳塔」碑前で台詞ならびに法要の後、  
 夕食時まで山内見学

## 交通便

高野山へは南海高野線・難波発、特急1時  
 間16分(急行1時間40分)、ケーブル山上  
 駅からバス奥の院前下車

## 宿 泊

普賢院(1泊2食・7000円)  
 10月7日(日) 午後1時開場・2時開会  
 大阪市立労働会館(大阪市中央区森ノ宮)  
 (JR環状線・地下鉄中央線森ノ宮駅下車)

## 会 場

同日午後3時〜6時、同会場で開催  
 「仮り」「余生」「当分」「二緒」「いのち」

## 兼 題

8月31日までに川柳塔社事務所または川島  
 諷云児(〒569 高槻市宮田町3-8-  
 8 電0726-96-2765)へ

## 備 考

10月6日午前9時50分発の特急券を予約してあ  
 りますので、希望者はお申し込みください。

川 柳 塔 社

# 川柳塔わかやま

## 創立二十周年記念川柳大会

と き 9月9日(日) 午前10時開場

と ころ 和歌山県農協会館(JR和歌山駅前)

## 兼 題

「足 跡」 橘 高 薫 風 選  
 「いたわる」 大 矢 十 郎 選

「腕」 中 田 たつお 選

「選 ぶ」 小 出 智 子 選

「帯」 森 中 恵 美 子 選

「書 く」 田 中 好 啓 選

「希 望」 黒 川 紫 香 選

「は たち」 野 村 太 茂 津 選

(8月10日締切・所定のハガキ使用)

## 事 前 投 句

句 会 費 1500円(記念品・大会誌・昼食呈)

懇 親 会 3500円(午後6時終了予定)

出 句 数 各題共2句ずつ(欠席投句拝辞)

宿 泊 ご 希 望 の 方 は、8月10日までにご連絡ください。  
 連 絡 先 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津  
 電 話 ・〇七三四一三一三七七三

主 催 川 柳 塔 わ か や ま 吟 社

# 塩加減

西尾 栞

昔、我が社の同人に、福井野迷路というお医者さんが居られた。海軍軍医少将の時、東郷平八郎元帥の脈をとったという話を聞かされたことがある。

或る日、「栞さん、顔色を見ると血圧が高いようだが、塩分を控えると九十歳まで保証するよ」と話されたことがある（先生は昭和四十九年七月六日、八十三歳で没くなられた）。天下を統一して都に入った織田信長が、都一番の調理人に料理を作らせたと、大層不機嫌であった。それと察した調理人は暫く猶子を願い、次にあらためて出した料理には信長も大満足で、さすがは都一番の腕前だとほめあげた。接待した者が調理人に「何か秘伝でもあるのか」と訊ねたところ、調理人は「最初は都風に塩味をうすくしたが、気に入

らなかったで、今度は我々庶民と同じく、塩味を濃くしたまでです」と答えた。この話は時の権力者信長も、元をただせばただの成り上りものと揶揄したところに面白さがあるのだが、同時に塩のさじ加減が如何に微妙かという喩えにもなる。

川柳にも、塩味の効いた句とうす味の都風の句がある。中尾藻介さん、小出智子さんの句は全く都風で、後から味の出てくる何とも言えぬ風味がある。最近、それを真似るのではなく、うす味風の句が皆さんから好かれるのを知って、塩分控え目の句が出てきたことは洵によろこばしい。

我々の普段の生活も、放埒な塩分の濃い生活を送るのと、心がけによってうす味にするのとは、人間の値打が全然違ってくる。そこに人生の妙味がある。善いことを常に心がけるといふ、人生の塩加減を忘れないように努めたいものである。

老いてなおやさしき人よ塩加減

女房のうす味に慣れ爪楊枝

栞

座右の句

八十になつたら恋をしてみよう

(薫風)

私の句

吊り橋でふたりは落ちてみたくなる

内田結実

# 川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 塩加減……………

西尾 栞……………(1)

好々婆……………

小出 智子……………(2)

川柳塔(同人吟)……………

西尾 栞選……………(4)

自選集……………

東野 大八……………(32)

■川柳太平記(147) 川柳の群像 若本多久志……………

東野 大八……………(36)

■連載 柳籠裏三篇研究(四丁)……………

阿達 義雄……………(38)

越後の豆川柳と美濃の狂俳……………

阿達 義雄……………(40)

水煙抄……………

黒川 紫香選……………(44)

秀句鑑賞

同人吟……………

田口 虹汀……………(43)

水煙抄……………

森田 熊生……………(65)

句評リレー 吉川寿美・中原諷人・野田素身郎・金井文秋……………

(72)

## 好々婆

### 小出智子



私には十歳と十一歳になる女の児の孫がおります。孫たちとは、日頃、手紙のやりとりをしたり、プレゼントをしたり、また、春・夏・冬の学校の

休みには、私共の家へ泊まりにきたりして、私なりに孫とのコミュニケーションを続けてきました。ところが今年の春休みには、どうした訳か何の音沙汰もありません。一沫の淋しさも手伝って五月の連休に入ったとき、電話をかけてみました。

丁度、上の子が出ましたので私は探るよう「もう、おばあちゃんの家には魅力がないの？」と軽い口調で聞きますと、「うん、十分魅力あるのよ。けど、お父さんがおばあちゃんに無理をさせてはいかんと言うの」との返事に気を好くし、それならとるので早速迎えに行きました。三日間ほど一緒にお喋りしたり、出かけたりにして過ごしましたが、これでは親馬鹿でなくて婆馬鹿ですね。

折に触れて昔日の幼い日の面影を思い出します。それは子供が孫にオーパーラップして

銀河系……………	河内天笑選……………	(76)
■女性コーナー 茴香の花……………	八木千代選……………	(74)
■ひみこざろん「山・海」……………	嘉数兆代賀・松原寿子……………	(73)
初歩教室「掬う」……………	辻 白溪子……………	(82)
「清い」……………	山本玉恵選……………	(80)
一路集「立つ」……………	信本博子選……………	(80)
「平和」……………	塩満 敏選……………	(81)
全日本川柳宮城大会に参加して……………	西田柳宏子……………	(84)
柳界展望……………	本社七月句会……………	(85)
各地柳壇(佳句地十選/小林妻子)……………	八月各地句会案内……………	(92)
■編集後記……………		(104)

座右の句

笑わせて泣かせて今日の日が沈む

(本蔭棒)

私の句

シナリオは神様が書く朝の靴

芳 鉄 心



「孫ほど可愛いものはない」となるのでしよう。可愛がるのも度が過ぎたり、干渉し過ぎたりするとかい結果は生れませぬ。とありま「祖母(ばば)育ちは「百文安い」とありますから。孫も日進月歩、どんどん成長していきます。老いの道を行く私達も、よい話し相手になれるように勉強していかなければと思っております。

ところで老女にとつて好ましからざる言葉を少し挙げてみましょう。まず筆頭は「鬼婆」。「鬼爺」とは言わず反対に「好々爺」と讃辞されています。「好々婆」は辞書にものっていません。「舌切り雀」の老婆は残忍な悪役。「花咲爺」では老爺が優しい善玉の役。他に「山んば」という怪力の鬼女。古い西洋にも「魔女」の名がありました。トランプゲームに「ばば抜き」。一時はやった結婚条件のフリーズに「家付き、カー付き、婆抜き」。

これら従来の既成言語は拭うべくもありませんが、これからの広域老人社会の中で、孫といわず若い人達とも交遊をはぐくみ理解を深めながら、これらを死語にして新しい老人像をつくりあげていきたい。そして、昨日から今日、明日へと、ただ足を引きすつていく老後生活を抜け出し、経験豊富な老人の知恵と若い人達の新しい知識を交換して、健全な老人社会を美しく彩っていきたく願っております。



西尾 葉選

松江市 柳 楽 鶴 丸

様づけで呼び出されるパチンコ店

大好物ですオニオン味噌スープ

漫画を食べながらコーヒー飲んでる

鯛も鯖も凶鑑で知ってます

柳の下にどじょうを養殖しようかな

また嘘をついているなどのど仏

鳥取県 新 家 完 司

梨つつくカラスよ街へ行きなさい

美しい客におつりを間違える

来た道が見えるところまでひと休み

化粧した妻がなかなか帰らない

少し狂うとみんなやさしくしてくれる

つぶれそうな会社の社長いと元氣

豊中市 安 藤 寿美子

紫陽花や心変りは誰にでも

感慨に微妙な違いある夫婦

単純な妻であつかいよいと言う

お芝居の書割めいて花菖蒲

蟻地獄働き蟻を待っている

ひと雫義理の涙をしぼり出す

恋一途何仕出かすか分らぬ目

ご主人があつたのですか婦長さん

病人が思いもよらぬことを言う

心境は利休ねずみの空の色

蚊帳吊って時計が逆に回り出し

町内に数匹不良の猫がいる

松原市 岩 本 笑 子

一つ消え二つ消え不知火の旅終える

そうだそうだビールの軽い軽い嘘

妻も子もホテルの神秘さを信じ

淡淡と歩く地下足袋似合う夫

はねつるべ幸福だったなあ雲よ

握り飯この歯応えは日本人

米子市 小西雄々

青竹を踏む音 父の日を迎え

遍歴を隠すピエロの薄い眉

気休めにお灸も一つすえておく

スリッパを嫌う与作の足の裏

休むのが嫌いで困る影法師

一揆の血吸った土地にももぐら住む

和歌山市 西山幸

まだ笑い話が書けぬ日記帖

真直ぐに歩きたいので靴を選ぶ

時々は礫が飛んでくる電話

十人十色黒白つける難しさ

額縁の中で相槌ばかり打つ

愛という字の字余りは糾すまい

竹原市 小島蘭幸

皇太子殿下に山がよく似合う

臉を閉じて観音様は描くように

死んでしまったあなたに勝ったことがない

句碑ひとつ四季の美しさのなかに

郵便屋さんの笑顔と書留と

わたくしの匂いが消えた陽の匂い

大阪市 西出楓楽

強がりを書いて弱みを見せている

三男は指定席には座らない

子には背中見せる自信はありませんか

だんだんに家具の一部になる夫婦

熱いお茶飲んで暑さに立ち向う

片目のときはとても謙虚でいたダルマ

松原市 玉置重人

例えばの話ホンネをのぞかせる

以下同文黒子のままで生きてます

お散歩から帰り犬の足洗う

無器用な財布でカード入れがない

マンションのひとり暮らしへ来るベント

真珠婚 時効をひとつ抱いている

米子市 林瑞枝

キャンバスに森の対話を塗り込める

新しい朝を産みたい味噌を播る

紙ヒコキが私の頭上低く飛ぶ

鉄を打つ響きに慣れて月の街

母逝きて横のつながり深くする

毒のある言葉も消化できる耳

倉敷市 小野克枝

授かった命見事に舞う花火

空気のように冷たく温く母が居る

蟻の穴覗いて辛抱まだ足りぬ

抱き上げてやろう資格を持たぬ大

葬列のうしろは愉快な仲間達

島根県 堀江正朗

ひとときの幸かも花の香にひたり

やる気出す指を知ってる爪の伸び

そんなとき笑いなはれとああ寛美

やったなの瞬間お皿割れる音

白杖の勘狂わずに踏む一步

子も妻も僕に合わせるタイミン

伊丹市 榎谷寿馬

呆けまいぞ惚けまいぞとて着る作務衣

芍薬が二輪 年金の庭に咲く

海越えて来たる蕎麦とは考えず

調整が出来る机で育ててる

カーネーション一つと満員バスで揺れ

老醜へ今朝も元気なコマージュ

堺市 中川滋雀

沛然と降るひとときの潔し

簡単に答が出るから悩みぬく

だんまりを決めた背中が悔いてくる

何考えてきたのかトイレから笑顔

なりゆきに任すと軽い靴の音

岡山市 嘉数兆代賀

余生など知らずくらしの雑草を抜く

我輩も竹だ竹ノ子皮を脱ぐ

亡母の足跡踏んでは母に近くなる

二人三脚 今日も流れていく河口

一瞬のきらめき雨滴掌に受ける

米子市 林荒介

数え唄誓う料白の口移し

地は未明 花も芒も仮の宿

今日もまた馬車が出てゆく花の坂

饒舌な街だ鴉がよく笑う

山が動く曇天に顔は崩さじ

西条市 片上明水

振り出しに戻ってシャツは白を着る

手応えの無い矢わき見をせずに飛ぶ

針の山越えた人なら任せよう

人さまに甘えが過ぎる寺の鳩

靴下の臭いきのうもきょうも雨

島根県 小砂白汀

ほととぎす二声三声空を覆う

荷が軽くなったところから呆けはじめ

園芸の手入れを聴いて気が重い

機上からビルの墓標が都市砂漠

貧弱な詩篇遺さぬことにする

島根県 堀江芳子

嬉しそう金魚は夏を泳がない

貴婦人のごと朝露に茄子の艶

子を寝せた安堵のように夫の顔

身の程に光る螢に教えられ

都合いい時もあります生返事

島根県 榎原 秀子

青梅が太る私はグイエツト

風邪三日見ぬ間にのびた豆の蔓

花終えた鉢にお札の施肥をする

禁煙デーですよにそうか知らん顔

衣替えした日にきいたほととぎす

東大阪市 森下 愛論

新世界窓越し将棋助けてやり

血圧の上がる話は内緒です

気弱さを隠す仮面の自己主張

飽食の果てビタミンだホルモンだ

孤独が好きだはつきりと負け惜しみ

奈良市 宮口 笛生

毎日をするこたないのもしんどいね

六月の雨 六月の観光バス

梅雨晴間曲ったキユウリ取ってくる

安い米作る田植機雨に濡れ

豊年を誰も望まぬ田を植える

松江市 恒松 叮紅

料理本から嫁姑もめてくる

自動振込 対話が消えてゆく世相

無謀運転戦火に散った同い年

悪知恵が先行をする金余り

栄転が裏目となったスキャンダル

柳井市 弘津 柳慶

独身の会から一人仲間割れ

母のエゴ幼心をきずつけて

風向きのままに流され平社員

小遣いが記念切手に化けて行き

モナリザの笑顔へウインクして終い

大阪市 江城 修史

母の日の重さよ父の日の軽さ

父の日の父より与える何もなし

駄馬生きて端役で終る人生か

やがて逝く旅なら今を限りなく

訣れても逢うても老いにある愁い

仙台市 川村 映輝

農民の恥部 不様な休耕田

白内障手術しばらく振りて妻と会い

独身主義などと親を泣かせてる

週休二日下水工事も休んでる

学業より背の低さを気にしてる

竹原市 森井 菁居

セールスは愉し出会いがまた愉し

わびしさは貌には出さぬカンナの朱

可能性信じ五十路の靴磨く

矢印を旅人信するほかはなし

ふるさとに居座り甘えごころ持つ

笠岡市 松本 忠三

知る人ぞ知る控え目に控え目に

気取らずに言うてくれればいいものを

口車知らんふりして乗ってやり

儲かっていますか聞いてどうする気

目の黒いうちはと妥協の余地がない

堺市 高橋 千万子

この度の栄転終着駅の匂い

夕飯が終って顔がみなゆるむ

ストローにおそい氷のとけ具合

親友といわれ悪友かしこまる

にくしみの果てを絆として折る

下関市 石川 侃流洞

脳味噌が減って湯舟に骨が浮く

スッポンの効き目男もかまびすし

辛せを一家で掬う鍋の湯気

星屑の海が無限の詩を育て

もう策は尽きた茶漬でも食うか

松江市 舟木 与根一

新居にも枕にも慣れ蛙聴く

縁談も無いが田圃も手放せず

鉢植への味は野菜と言いません

選挙には息吹き返す消費税

ポリープの説明に目をそらすなよ

倉敷市 稲田 豊作

金貨一枚仲間に見せる優越感

預貯金を残し逝くのが惜しくなり

八十路尚安閑としておれぬ性

ほどほどになさいと老齡笑われる

笑い過ぎですよと入歯が注意する

今治市 矢野 佳雲

人間になれるチャンスを猿は待ち

優しいのが好きと男の牙を抜き

明日死ぬわけでないから吸う煙草

口出しはしないときめている同居

巡り巡って親に戻った子の躰

京都市 都倉 求芽

浮いている雲とは見せぬ雲の峰

絵の中のひとりとなって橋に佇つ

翔ぶ女 明日の夢を使い捨て

保険屋も銀行も数字に尻敷かれ

五月の風 三枝子を焼いたうす煙

廿日市市 林野 甦光

心配したり安心したり娘が二人

さなぶりも終え星空へ手を伸ばす

相応しい言葉を探す駅の混み

パート募集あなたの魅力求めます

少し煽って返信軽く書いてやろ

今治市 越智 一水

家留守にしている花は咲いてくれ

自分の言葉持って暮らしを豊かにし

言葉のおしゃれ上手で顔をカバーする

後ろ姿 心に刻んで祈るもの  
老夫婦 団扇の風へ語らない

奈良市 天正千梢

塩焼けば紫の煙 業平忌

吾妻富士登りし足をなでてやり

みちのくの温き出合いを惜しみつつ

借り物の文化かカタカナ多くなり

星吊りの如き夜更けのクレーン車

名古屋市 越村枯梢

辞書をひくやっぱりふたありは夫婦

方円の器に媚びるろくでなし

こそ泥で捕っているお人好し

目欠け鼻欠け私も地藏になりました

誤算かな俺は今朝まだ生きています

倉吉市 奥谷弘朗

出る杭の打たれるコツが解りかけ

練り上げて出した思案がこれかいや

大山に野鳥楽しむ会がある

何もかも神のお告げと妻信じ

瞳を閉じて砂丘太鼓に酔っている

豊中市 田中正坊

直立不動ぼくの八月十五日

あの日から四十五年 日本忌

六十八うでたてふせを二十回

無印がこわくてバツジつけている

まごむすめきやろる

この子がほしいと園長さんという

尼崎市 春城 武庫坊

八月の風に昭和の匂いする

国民皆兵 女悲しい歴史持ち

好ききらいあつて人間幅が出来

戦友会に出席して

戦争の絆が運ぶ重い脚

招魂祭 軍歌はいまも風化せず

鳥取県 土橋 螢

死ぬまでに体重少しずつ減らそう

姑さんが帯を結んでくれはった

誉めかたがとでも上手なおじいさん

メンバーチェンジ還暦の背番号

精がつく薬を買ってのんでいる

八尾市 宮西弥生

切り札をもって白を黒にする

白旗を振ったあとにある笑い

息ぬきの森で息ぬく暴走車

初恋の出会いも別れも森だった

屋根に石おいて詩人雨という

八尾市 内海 幸生

花博の花には無罪を言い渡す

水道の水呑み金魚昇天し

先約があるのに義姉の一周忌

義理堅い人から深夜電話の礼  
きりぎりす蟻に説教しているよ

八尾市 宮崎 シマ子

みかんの花の咲く道は母の道

お犬様抱いてお局 市場籠

いつもいつも祖母と子猫は丸くいる

歯応えがあるぞ息子の反抗期

大ボラを吹くと肩身がせまくなる

八尾市 鷺見 章

焼け跡に出火お詫びと仮店舗

月満ちる日へ胎動のリズム感

お賽銭世界の平和まで祈り

手土産を提げて実家へ泣きに来る

コミック誌サナトリウムに未だ癒えず

米子市 石垣 花子

バアチャンは打出の小槌振ってくれ

ライバルへ差しのべる手を持ち合せ

それぞれ野心は見せぬ森の木々

終章の幕ききりと下ろしたい

春の絵も見ぬまま走り去った人

米子市 政岡 日枝子

神経が太くて鳥になりそこね

一枚の旗さえ持たず生きてきた

紫陽花の街でうつむくことはない

一族の頭が迷路から抜けた

痛い痛いと言いかかえて生きている

米子市 青戸 田鶴

卯の花が咲いて旅立つ日が近い

けやき並木歩くと満ちてくるものが

どくだみを摘んで明日の糧にする

青いけし一目見ようと長い列

楚々として花の化身の青いけし

米子市 野坂 なみ

持ち時間山を登ってゆくんだよ

眼を閉じて見えないものを見つめよう

青信号急いで渡る癖がある

紫陽花は雨 あの人逢いにくる

さよならの幕は喜劇で下ろしたい

米子市 沢田 千春

絵日記のお日様いつも笑ってる

旅先の友と竹輪の丸かじり

笑い話つんだ舟なら迎えよう

頬杖の雨とあそんで久しぶり

やすらぎをくれる緑と手をつなぐ

米子市 茂理 高代

わらじ編む苦しい橋を渡るため

哀しみは表に出さぬ白牡丹

人ヨカレ普通でヨカレ雨の私語

浮草は渚で遊びほつとする

お辞儀する芸は知ってるお人好し

和歌山市 堀端三男

和歌山市 垂井千寿子

寿司桶の裏に嘉永の文字が見え  
男だったら条件出せぬこともある

留守番電話に入れとく程の用でなし

おもちゃ箱の隅で灰皿あくびする

カルピスをむかしふたりで飲んだ駅

和歌山市 牛尾緑良

ふたつずつ幸せがあるティールーム

風化せぬうちに一文したためる

平成に慣れたと思う住民課

ペレストロイカ国も家庭も川柳も  
年輪を重ねて夫婦似てしまう

和歌山市 福本英子

あの時の怖さ今年も生きて夏  
上を見て下見て義理の熨斗袋

手の届く位置に並べる罪な宝石

極楽か地獄か点滴だけが知り

韓国機の遅れを誰も驚かぬ

羽曳野市 塩満敏

木曾路(四句)

藤村もワープロきつと習うだろ

馬刺しをあてに地酒のうまいこと

タラ コゴミ木曾の珍味で呑む地酒

御岳の勇姿にカメラご満悦

よく見ればGパンにもあるお洒落

叩かれず育った毬はよく飛ばぬ  
陳列の品で哀史も学んで来

娘の家で心を広く広くする

こんな時亡父の拳を懐かしむ

造園の美から無くなる蟬の声

和歌山市 松原寿子

あったかい真心だから噛み砕く

鳩時計ゆめの逢瀬を強く打つ

未練ひとつレモン噛ってみたとても

さくらんぼ まどかな愛に揺れている  
受け皿の白さへ嘘はかくせない

大阪市 河井庸佑

自己主張納める時期を心得る

自省せよバイオリズムが言っている

存在を知らせるだけにする主張

それぞれの役目を知っている薬  
苦勞しに行く栄転と腹くくる

大阪市 北勝美

花咲いて花を褒め合う門簾

宙を踏む段差へ老いの膝がしら

人命も自然のままに春落葉

横断歩道変る信号にある誤算

一滴を絞り切っている玉露

鳥取県 松下 たつみ

窓際の机は音のせぬように  
舌打ちをするお役所へ頭さげ  
先に面はずしてしまふ癖がつき  
図々しい方が頼りにされている  
薪背負う敵がわたしの前にいる

松原市 小池 しげお

しゃアしゃアと妻の受話器に感心し  
プランター キュウリが拗ねてなっている  
お近くにお越しの節と言うたはず  
残酷な文字書かされたボールペン  
後任におつちよこちよいがやってくる

寝屋川市 江口 度

一周忌 水蓮咲いてるあの火鉢  
花びらもお膳に載せてグルメとか  
鼻がやってくる 煙草を消しておく  
耳がやってくる 古いレコード出しておく  
眼が寄ってくる 阿呆のまねしとく

大阪市 本間 満津子

繕いもの雨に心もしつとりと  
胸に手を当てたくらいで答え出ず  
説得力古い梅酒の口あたり  
見ないから欲しがらなただけのこと  
暗算は苦手ふくらむ小銭入れ

守口市 野呂 右近

句作する意欲病に勝てそうだが  
良心と自問自答の未決める  
目立たなく生きて静かな余生なり  
今日何日三度目妻を怒らせる  
妻が持つ母性愛に支えられ

唐津市 田口 虹汀

何所で習ろたか さんさ時雨は妻の声  
この約手 裏の重石が効いている  
日の丸の旗にもあつた裏表  
隠し芸羽織の裏が女房役  
裏門も油断はできぬ犬がいる

唐津市 久保 正敏

平成や季語に逆らううかれ猫  
寡婦の胸ときに娼婦が鐘を打つ  
とどめ刺す言葉で返り血を浴びる  
カクテルの罨を女は知って飲み  
アバンチュール人妻だつて処女だつて

有田市 松井 かなめ

嫁に不足世代の相違で片づける  
死ぬ薬あつて長寿の薬ない  
自家製のキャベツを刻む幸せか  
病葉を腐葉土にして日が暮れる  
満ち足りたとは思われないが感謝しよう

姫路市 大原 葉香

自画像が時々浮気して困る

指五本握れば拳という強さ  
宝くじそう甘くない人の列

渡り鳥 去年の池が見当らぬ  
食いしばる歯は入歯ですこわれそう

大阪市 藤田 頂留子

驚かんうすうす知って居たんやな  
すべらせたひと言呷えて眠れない

絆創膏と正露丸幸せな薬はこ  
バーゲンのチームに優勝してほしい

紙コップ資源愛護のやり玉に

宇部市 平田 実男

孫が見ているから信号無視できず  
はかどった仕事へ進む腹時計

酸性雨とも知らないで鯉は跳ね  
弁当の蓋から食べて満ち足りる

押しピンを逆さにしたい日の殺意

西宮市 門谷 たず子

疑ってみてもわたしの年齢である  
父に似た声で電話をかけてくる

自分史の節目を妻と共に越え  
てっせんが亡母のコートの色で咲く

思い出を大事に積んで余生とや

堺市 藤井 一二三

伯父 灰原清一郎氏の米寿を祝う(一句)

八十八の年輪光る梅雨晴間

生きるのに疲れ阿呆の面を買う

甥姪のなさけが父の日に届き

若葉から青葉と老いを励まされ

留守宅の淋しきものに柿の花

松原市 佐藤 奏月

嫁ぐ娘の分も漬け込む梅辣菲

母性愛 闘争心をまるだしに

かすみ草 青い殺意を抱いている

登記簿に血縁深く刻まれり

被害妄想ですと躲される

藤井寺市 吉岡 美房

梅雨空を猫と見上げている孤独

ひらがなのような男が多すぎる

孫自慢同窓会も齢をとり

故郷のなさけと出逢うクラス会

しゃべるだけ喋ると家が気にかかり

高知県 赤川 菊野

回想の視野から消えぬ飢えた皿

ひとりでもしっかり主婦をやつてます

寡婦という旗を下ろそか置いとこか

も一人の私に放浪癖がある

明暗を運ぶ夜汽車の後尾灯

ポプラの芽が出てポプラだとわかる

冷房の故障で涼しい風と会う

尼崎市 春城 年代

いまはもう積み重ねだと神の声  
花博のうわさは方々から入る  
過去形が日増しにふえるではないか

西宮市 林 はつ 絵

奢る掌へ一円玉の自己主張  
クレジット往きはよいよいカードあり  
音無しの術でジョーカーやってくる  
人生のここは素直に雨やどり  
幸運がカードの裏で待っている

岸和田市 福 浦 勝 晴

泥酔が星のしずくで醒めてくる  
鈴虫を優雅に飼うて二号邸  
満員車けらけら笑うオバタリアン  
白秋の雨は絵になる城が島  
旦那さんはジュース嫁は人大ジョッキ

大阪市 神夏磯 典 子

紫陽花の疲れを癒やす小糠雨  
葬列で話の種を拾うてくる  
薬にも毒にもならず隠居部屋  
日の長さ日の短さも風車  
母の皺ひとつひとつにある節目

美禰市 安平次 弘 道

言葉尻をつかみ大局見失い  
真ん中の席で憶病風に会う  
尺取虫 森の緑を疑わず

千羽目の鶴が切り札抱いていた  
スベアキー愛の行方は保証せず

神戸市 仲 どんたく

先生は呑みすぎはったと診察し  
隈取りでしゃしゃり出て来た気の弱さ  
大の字に寝て限界をたしかめる  
啓蟄に出て来た虫に椅子が無い  
縄暖簾 程良い距離のまわり道

松山市 谷 真 風

生け花が姿見ている掛け鏡  
水中花赤く咲いても燃えはせぬ  
一筋の柳の道がある余生  
生きていいのでしょいか閻魔さま  
番茶でも温もりのある志野茶碗

高槻市 川 島 諷云児

人肌のぬくもりほしい紙人形  
輝いていたあの頃のループタイ  
許す気であるのに遮断機おりたまま  
フライドを捨てると飛べる水たまり  
七転び八起きへ神も味方する

羽曳野市 榎 本 吐 来

還 曆(四句)

子自慢を領いて聞くちゃんちゃんこ  
人情の話に弱いちゃんちゃんこ  
酒飲めばまだまだ若いちちゃんちゃんこ

採め抜いた祝儀袋の地味な文字  
終日の本音を交わす縄のれん

西宮市 奥田 みつ子

聞かされた愚痴がわたしの愚痴になる  
スタンドに蛾 悪い知らせかもしれぬ  
逢うてきた余韻をさます雨宿り

怒り心頭 殺しのテレビでも見るか  
うがいして香水つけて待つ電話

羽曳野市 吉川 寿美

絹こしの言葉をきいている疲れ

いくばくの思いを溜めるおろしがね

企みが崩れた今朝の目玉焼

フライパン女の手品始まりぬ

堪忍袋繕う母の木綿針

大和高田市 岸本 豊平次

文珠さん授けた知恵はみな同じ

羨んだりしんどかろうと玉の輿

一応は手紙に書いて長電話

目が変わればすんなり見付かる探し物

内ポケットにまた入れておく衣替え

京都市 松川 芳子

カルチャーで少し余生の錯落し

玉手箱昔むかしの子の便り

車間距離 男が取っている平和

ペンキ塗らたてペンチも恋の邪魔をする

逆立ちをすると乳房が若返る

倉吉市 渡辺 独歩

余生など言っではおれぬ日程表

天皇のお田植すがた昭和見る

お地藏を頼るほかなし交通禍

白い歯がこぼれ女に喪があける

目で撫でることでセクハラ触れないか

奈良県 長谷川 春蘭

何色か吾が子の未来 虹の橋

妻きざむ夏大根の白き音

ゴキブリめ夫への不満向けて打つ

衣替えて悲しきことは想うまじ

好きだったままで触れずに鬼あざみ

寝屋川市 岸野 あやめ

安定剤のんで寝るのも楽しみか

旅の終り六甲山脈昏れなすむ

切り札をちよつと虫干ししています

恩借の昔忘れぬ花手桶

いそがしい坊様バイク ヘルメット

岡山市 矢内 寿恵子

あすなろの夢で積木を積みつづけ

悲劇喜劇を拾い集める詩の森

主義主張もたないペンが署名する

石橋を叩いて問いが多くなる

一〇〇%の嘘も笑顔でできてやる

藤井寺市 福元みのる

こうなると医者の妻さへ百度石

御祈禱に三段階と値が違ひ

無人駅だけに口惜しい雨宿り

惜しい人ほど早く死ぬわと言われたり

日系に正直勤勉生きて居り

和歌山市 内田結実

天秤の妻が軽くて恐くなる

幸せに濡れて居ります花菖蒲

七人の敵 男とは限らない

選るだけは選って赤札まで待とう

川柳と添い遂げますとやっと言う

倉吉市 野中御前

寡婦の意地涙の川を泳ぎ切る

花嫁は今日一日のピエロです

全開の窓で待ってる青い鳥

芸なしの女の小指すぐ燃える

ドーランを落せばピエロ座長です

熊本市 永田俊子

年来の仇が握手してる本気かな

皇国の興廃も死語五月二十七日

全身で尺取虫が練るプラン

フェリー余波 水の情けが岸叩く

グルメ族最後は母の味を恋う

広島県 藤解静風

水を得た魚みたいに元気です

うすうすは知っていましたがレモンティー

保険屋がにこにこ顔でやってくる

騙されてあげますどうせ解ること

値上りの空地で猫が恋をする

香川県 松村迷観子

もの足りぬ嗜好は贅沢かも知れぬ

国道が裏通となるテープ切る

中流という門標が高すぎる

角帯の丁稚 大阪城を築きあげ

遠近の眼鏡現実見失う

岡山県 荻野鮫虎狼

充電が少うし過ぎた縄のれん

はした金妻の財布が待ち構え

足跡を残そう宿の下駄が鳴る

無策の日 宇宙の事でも考える

碁仇と一緒に浸る湯の温み

大阪市 渡部さと美

義経号見ならいなさい事故ばかり

父ちゃんの実家は海あり夏と決め

しとやかなおばはんめざす花菖蒲

恥ずかしい空きカン拾ろて万歩計

守口市 羽原静歩

老人がウロウロしている花博よ

演歌よし老いの背中をなでてくれ

腰のあるうどんへ集まる自家用車  
仲人をイエス イエスと園長さん

大田市 藤田 軒太楼

好調を支える肩が凝ってくる

電話してくるから好意脈があり

確信のないいらだちに巻き込まれ

暮らし向き語る父子の酒まずし

箕面市 坪田 紅葉

花博も人さわがせな泊り客

モーニング一人でお茶をミニトマト

駅前のマンション全部灯がともる

ぼたん画く心が通う雨の午後

島根県 西村 早苗

きつかけを聞かれてみても好きだけ

気から来た病だ注射だけで済み

夏だけを臨時目玉のバス走る

遠回りひとり歩いて考える

高石市 浅野 房子

南無阿弥陀仏拝んでる間に過ぎた厄

対岸の火事で火の粉が降ってくる

肥満猫 真夏の午後と丸く寝る

カラオケのリズムでゆれるイヤリング

大阪市 大塚 節子

胸ポケット苦しい想いを知っている

降り立てば故郷の匂いが身をつつむ

泣き笑いアホの寛美が止め柝うつ  
山の宿 味噌汁の香と朝湯する

宝塚市 丸山 よし津

自販機よ車も喋る昼下り

4Bの情けで丸い絵が描ける

注意して言い返された腹の虫

部屋住みの次男 外車を乗り回す

大阪市 津守 柳伸

盲腸の跡姦しい露天風呂

安定剤はなせぬ美女の一人部屋

さわやかな五月訃報の西 東

メロン半分届けてくれる核家族

岡山市 井上 柳五郎

ナイターもない味気なさ雨の音

五月晴 歩数をのばす万歩計

おとなりの仔犬へ近所ぬくい目が

水清き校歌の川はいまへドロ

倉吉市 渡辺 菩句

沖の船 夜は銀河へ行くのだらう

クレオパトラの名が気に入ってメロン買う

禿頭にお見事ですなてなことを言う

土地ころがしの土地で働く蟻の列

寝屋川市 平松 かすみ

赤ちゃんの真珠の涙には弱い

栄養は足りぬが好きなサケ茶づけ

目標は百歳らしいうちの姑  
三十年積立 一坪まだ買えず

西宮市 秋元 てる

教師でもやるかと教師の父の前

新築の留守番深呼吸して座り

並べては崩すカードも回復期

トランプは減法強い離婚癖

寢屋川市 稲葉 冬葉

昨年より二日早目に蛙鳴く

幼少の頃の写真は器量よし

君が代も日の丸もない労働者

友達の友達が来て嘘を告げ

貝塚市 行天 千代

やさしさが本音言わせる破目になり

夜も更けてやっと車の音が減る

遠まわりして紫陽花の道を行く

衣替え着物きる人減って行く

岸和田市 高須賀 金太

領収書 和尚は切ったことがない

アンデスの織物 風は乾いてる

蓮の花咲かせる泥のエネルギー

美しい夜明けだ鶏も鳴いている

十和田市 斉藤 岳

負けるのもたまに薬という味方

食べられる花の講習楽しみで

都市計画 種屋は古いまま動き  
山菜を貰うていますお山様

富田林市 松本 今日子

現実には晴れやかならず胸の内

投げだした足に見事な座りグコ

うっかりと投げると返ってこない珠

五月晴れ姑の死に水取っている

高知市 北川 竹萌

織り姫の手元で艶な伊予絊

亡弟とあう日に出した金鶏章

冷蔵庫一日のメニュー妻の旅

朝刊を片手にめがね捜す妻

町田市 竹内 紫鏑

若さ良し午後も記録を更新す

クラス会三角ベースの仲が寄る

この坂を糖分撰らぬ祖父の下駄

白髪仲間と半ライス取る

神戸市 山口 美穂

紫陽花は雨に唄って色を変え

少し紅つけてスーパードまで走り

恋のいたみは青春の日の宝

老いの兆か欲しいものが減ってくる

尼崎市 奥山 美智子

お隣と幸せごっこしてしまっ  
そばにいる鬼がさがしにきてくれぬ

女三人笑い袋が弾けそゝ  
あげまんのうまい指図に踊らされ

寝屋川市 柴田英壬子

施餓鬼にも故人の好きならなきずし

キザだけど香水贈る手段から

番号札同じ色でない不安

まどろこい取引きはない地価高騰

東大阪市 崎山美子

あてもなく鳩を見ている老いの背な

猫と住む女は過去を語らない

許されてゆるして絆太くなる

底辺に住んでピンチになれてくる

八尾市 山下美津留

丸腰で正しい道を説きに行く

ネクタイをしつかり結び使者に立つ

迫力が消えたか女寄りつかず

点と線きびしく画く絵に出合う

大阪市 黒田真砂

言い訳はきかぬ女の泣き黒子

てのひらの中にこっそり別の顔

夫婦の絆暖め合つて古希の坂

ブランドを買つてちよっぴり自己安堵

岸和田市 清野こう

趣味多忙友と約束まとまらぬ

バイク免許孫もやっぱり取ると言う

晴れて良し雨に又よし花菖蒲  
今日を境にすっぱりと切る未練

岡山県 小林妻子

外来語少うし偉く見えませすか

歳月に勝てず豪邸床が落ち

当分は百姓鎧着せられる

旅続く私に降りる駅がない

唐津市 山口高明

分校の窓から馬が覗き込み

革命のカストロ髭も霜が降り

石段に仏の貌で老いふたり

御鼻肩が負けて食事をせぬ息子

島根県 榎みどり

山菜を摘むさわやかな山の風

つまずいた石に一会の夢がさめ

コトコトと五月の香りふきが煮え

孫の記録一駒嬉しい日記閉ず(郡陸で孫二位入賞)

弘前市 真喜内實

両陛下吾が家のりんご食べた夢

ばあさんも今日は早乙女赤たすき

息子より早う朝起きもう出来ぬ

孫と二人三脚昼寝しています

唐津市 仁部四郎

双方で道を譲つた墓まいり  
放課後の宝は友の噂です

追い風が吹くまで辞書を枕にし  
久濶を青い話の同じ齡

羽曳野市 田中透太

空席を埋める切符を買いに行く

アルバムに女ざかりの母が居る

結論は出ぬがそろそろ酒にする

救急車 遺言状を書いてない

京都市 山本規不風

受取人は娘で終身掛けさされ

回り道で逢う朝の散歩計

カタログが綺麗 電話でゴミを買う

ぼろくそに言うた人から意見聞く

呉市 横田英詩

誰を呼ぶ山彦なのか風のにり

父が遅いと母がワインを出して飲む

規則通りに齡とってます誕生日

ノーサンキュー魂胆のある好意なら

玉野市 小谷仙山

手入れせぬ庭は小鳥のお気に入り

塩 砂糖加減してます老いの食

冗談にしても良い事悪いこと

老夫婦小ビンで妻の誕生日

唐津市 浜本義美

東欧の地図塗替えが抄らず

玄海暮色まだ眠らない濤の白

桜島たまにや噴火を休まぬか  
唄い継ぐ一揆の件 盆口説

唐津市 筒井朴竜

忘れぬ夜警証しの打刻計

巡視終え茶柱の立つ茶を吸る

朝刊へ眼鏡が曇るお味噌汁

地上げ屋も来ない過疎なり平和郷

唐津市 浜本ちよ

喋ってる横顔阿呆に見えてくる

目鼻だち想像たのし紙人形

悪口はお止し品位が落ちるだけ

少年の度胸促す夏の雲

米子市 田中亜弥

男結び一生とけないよう結ぶ

水枯れの鉢も言い分あるだろう

あの人は言葉たくみで大嫌い

大きい家で父と母とが小さく住む

米子市 寺沢みど里

眼の埃とれて笑いが止まらない

からくりにしても帽子が鳩を産む

どんぐりの母娘へ丸い風が吹く

初恋にばったり逢った寺の門

米子市 白根ふみ

ささやかな奢り 末ひろがりて句

郷土史をたぐる思わぬ高ぶりが

鶯の小節がさえる梅雨どきに  
一人居り辻褃合わすことに馴れ

米子市 光井玲子

こんな時亡父の一喝欲しくなる  
青紫蘇に心を添えて差し上げる  
不整脈 亡母の持病を思い出す  
またあした明日と甘えてばかりいる

米子市 小村てい子

綿すげの幻想を追うめがね換え  
紫のそこだけ匂う粋な女  
不美人でよい心美人に精を出す  
遮断機の向うに好きな風が吹く

米子市 金山夕子

ライバルのくすぐる急所覚えとこ  
魅力ある声を背中に聞く話  
友人はわたしの中の一部分  
今日の顔厳しくチェックしておこう

米子市 川上より子

じゅんさいの味がほのかによめ出した  
胸奥の小さな珠が錆びぬよに  
五線音符とどうにか遊べるようになる  
ほめられたやる気の鍬を持ち直す

鳥取市 両川洋々

赤字でもレールはしっぱなど振らぬ  
影法師俺の涙を知ってるか

農政の明日が読めないタネを蒔く  
一夫一婦の掟をあわや忘れかけ

鳥取県 林露杖

鳴砂の浜に埋めたローマンス  
文鎮の役 父の日の父寡黙  
筒袖の祖母の形見の浜緋  
CTを出て同病と語り合い

鳥取県 土橋はるお

二次会へ尻尾を振ってついてゆく  
果し場の渚に誰も居なかった  
ハイハイと若葉マークに送られる  
馬鹿な影が靴を片方さげている

和歌山市 若宮武雄

ひたすらに咲いて実らぬ花ざくろ  
青葉風立てば古葉の落ちる折り  
大魚には大魚らしい泳ぎ方  
輝いたとたんが最期シャボン玉

和歌山市 内芝登志代

酒好きの庭に育った茗荷の芽  
肉まんのような母さん頼りです  
先ず眼鏡かけて働く顔となる  
訃報読む先ず年齢と病名を

和歌山市 細川稚代

雨三日太り過ぎてる茄子胡瓜  
走り梅雨どうにか根つく菊の苗

灰皿があの日ドラマ秘めている  
白紙一枚 挑戦状という恐さ

和歌山県 天満 三千代

反省は靴の紐からしめ直す  
悪口へかけてやりたいホッチキス  
棟上げの槌は税など恐れない  
噂する口がだんだん大きなる

和歌山市 桜井 千秀

幼少のみぎりは湧えていた頭脳  
緊張の真只中を蠅が飛ぶ  
シジミ売りの少年がいる時代劇  
老犬の鈍さをいと悲しとも

和歌山市 木本 朱夏

新緑の匂い逢いたいひとがいる  
春嵐あまい企みしてしまふ  
潔く髪切つてからの物思い  
印鑑で変る程度の運ならば

和歌山市 福井 桂香

悪いとこ良いとこいっぱいある仲間  
ただ愚痴をたつぷり聞いた聴診器  
おしろいを塗って弁解する烏  
ユタからの手紙私の手の中に

和歌山市 山川 克子

ストレスが取れぬ目覚めの悪い朝  
満天の星ふるさどで深呼吸

じゃじゃ馬も都会の水に洗われて  
茄子の馬かばちやおばけに過疎の夏

和歌山市 山田 高夫

限り無い夢は円周率の中  
人見知りするではないぞ蝸牛  
這えば立て歩むと臍を嚙り出し  
脳みそが片寄ったから天才児

和歌山市 青枝 鉄治

左遷地のうまい地酒に迎えられ  
結び目が緩み転がり出た本音  
手相見の見立て程にはせぬ出世  
民のこと思う余裕のないバッジ

海南市 三宅 保州

鍵束に入れない鍵がひとつある  
家出したつもりで途中下車をする  
寝た振りをしている亀に隙がない  
五線譜はどうあれ母の童歌

和歌山市 田中 輝子

読書する子を満点とおもう親  
個性大事わたしが大事なローギヤ  
闘争心捨てると澄んでくる水位  
懸命な策でしたねと外野席

出雲市 吉岡 きみえ

散るさだめ花も一度は浮名たつ  
いい時季に逢いたい手紙書いている

顔ふたつもつて女将の片えくぼ  
ピアガーデン ジャンボサイズの娘をつれて

出雲市 園山 多賀子

紫陽花の彩にこだわるある予感

影法師独り歩きをして困る

偶然のドラマ窓枠の中に見る

腕時計 指輪も少しゆるくなる

出雲市 小玉 満江

惜しまれて線路をたたむ大社駅

高額へ三%がしゃしゃり出る

花の島みんな優しい人ばかり

説得に行つて説得されて来る

出雲市 久谷 まこと

足早に猫通りすぎ童唄

妻の忌に蔦が大きく輪を描く

幼な子の妬心もありて泣き止まず

米ばなれ知らずに育つ青田風

出雲市 石倉 芙佐子

仮の世もつきせぬことを木槿咲く

此所へ来て波立つはずもない胸に

別々の道を辿つたとしても

現世は母と妻との操たて

出雲市 園山 良子

カッコーが天性嘆く五月晴れ

全巻を揃えて手垢つけぬ本

五月晴れ夫を畑から帰さない  
紀子さんスマイル平民という親しさよ

島根県 石田 清泉

七細工八貧乏趣味が一つ増え

入院へがんだかいようだ他人ごと

二〇%老境の列に入る

老妻も捨ててはおらぬ紅をひく

島根県 松本文子

東奔西走わたしいろいろありまして

二階からころがるように笑い声

ママゴトに飽きてラーメン食べへ出る

ピフテキを食べなくなつたまでのこと

島根県 小田川 智重子

どの河でいのちの洗濯しましよるか

大根の花と一輪のカーネーション

口紅の濃いのが歳をとつている

どさくさの中で一円根を下ろし

大阪市 吐田 公一

叩き大工の釘を曲げてる節の意地

老いらくの恋実る頃梅実り

麦秋や夕日に長い影法師

年金の日課となつた孫の守り

大阪府 坂口 公子

再会へ言葉にならぬ叩き合い

手をかけたあじさい雨に泣かせます

百までは生きてられそう青い空  
メス入りの夫 煙草に逃げられる

大阪市 富上光代

許す気になるまで自問自答する  
何所でどう縁があるやら人の世は  
女形から真の女を教えられ  
あれからの積る話は墓とする

大阪市 井上白峰

老いてなお視野を広げるパスポート  
舞扇かざせば伸びる老いの腰  
二度の職 過去には触れずお茶を汲む  
壁に耳 障子に目あり兎小屋

大阪市 塩田新一郎

宇宙飛行士こんどは地球が黒かった  
露天風呂ご覧なさいと浮く乳房  
稲光 螺鈿の蝶が甦り  
小糠雨シヨバン流れる飾り窓

大阪市 北山悟郎

怒気抜かれ素直にされる御神前  
領分を超えてはならぬ宮仕え  
盃に涙が混じる祝い酒  
義足に歩け歩けと無理な医師

岡山県 川端柳子

しあわせは足早だった影のこし  
ひとつ一つ拾うてむかし果てしなく

高峰三枝子逝く

真紅のバラ大輪のままそのままに  
湖畔の宿 当分服喪霧晴れぬ

岡山県 岩道博友

老いの愚痴そつと反旗を秘めていた  
柔らかい会話 洗脳から生まれ  
痛み分け何の返事もなく別れ  
休肝日時計が進まぬまま眠る

岡山県 千原理瑛

さい果てにひとり旅立つ相聞歌  
いくつかの節目結び目ほどきつつ女  
熱帯魚水槽で一匹誕生す  
梅漬けの季節となりて亡母偲ぶ

岡山県 山本玉恵

あざやかな裏切り蟻の不心得  
幾とせの想いに花の物狂い  
針箱のなげきや老いの白内障  
母の地図に足跡のない橋がある

岡山県 花田たけ志

垢ぬけは土に返ってする積り  
娑婆からの見送り妻にしてほしい  
告白の前にめぐらすお膳立て  
原野商法 藁をつかませ二次被害

岸和田市 古野ひで

片隅でひっそり息づく幸もある

流れには沿って流れに生きてます  
月末に明日のお櫛買っておく  
もう逢う日ないけどやっぱり好きな人

岸和田市 島崎 富士子

口車乗せられそうで電話切る

少女期のあこがれ湖畔の宿も消え

退職の次の日早くも物忘れ

あれこれと予定は予定のままで過ぎ

岸和田市 原 さよ子

月参りして安心を貰ってくる

地球儀のここが日系大統領(ヘル)

遠い昔に思いをはせる紅の花

旅をする笑顔が揃うエアポート

岸和田市 岩佐 ダン吉

廃屋に紫陽花ひとり主張する

流し素麺少し幸せだと思っ

核廃絶のニュースまつてる地球です

ネクタイもどうやら二日酔いである

姫路市 丁坪 サワ子

母の敷くレールに合わぬ子の電車

三浪でや々と家業を継いでくれ

一寸だけ遅れて着にされている

手の中を見られて出せぬ変化球

姫路市 中塚 遊峰

母の日にわざと服買う娘なき老母

息子が側にただそれだけの安堵感  
思い出がきれいになって行く恐さ  
果てるまで愚かな品位守りたい

豊中市 上田 登志実

大穴を埋めるに別の穴を掘る

生活につながる汗は美しい

さわやかな新風を吸う夜明け道

悪因が悪果を呼んで杖をつく

豊中市 辻川 慶子

あ うん の言葉で足りる老夫婦

水玉のリボンに替えて犬も夏

麻上布さらり着こなす肌ざわり

日傘手に鍵かけてゆくポストまで

豊中市 吉田 あずき

萬若葉茂って家は代替り

バラソルは女の年を明かさな

幸福の見本のように傘五本

ホフマンの詩にハイドンの曲ドイツ国歌です

河内長野市 井上 喜醉

旅先の好運占う流れ星

再会のつるのる思いが溜息に

酒販機の灯りが消えて夜が更け

泥に舞う可憐な姿 花菖蒲

七尾市 松高 秀峰

函館の百万ドルの灯がゆれる

車間距離上手にとつて嫁姑  
父の日に水玉模様よく売れる  
旅先で楽しい人に巡り会う

和泉市 岡井やすお

繁栄をすれば東も西もない  
寝て一畳起きて半畳なら土地余る  
逆玉のねらいは社長病院長  
往復の車内漫画で息を抜き

羽曳野市 佐野白水

藤の木古墳展

石棺に一万数千の謎を詰め  
木簡の一つもあればと学者の声

花の万博

壁一つで熱帯の花 南極の花  
酸性雨知らぬパピリオンの中の花

黒石市 相馬一花

酌婦来るまでは宴会通夜のよう  
見舞客よりは元気な患者です  
割り込みの美女にニッコリ笑顔見せ  
モナリザが津軽にも住むネオン街

西宮市 西口いわゑ

会者定離 沙羅の花びら尚白し  
そのうちに三途の川もカード制  
雨やどりコーヒー店も席がなし  
仏像を拝しなごみを頂きぬ

富田林市 片岡智恵子

跳ね返る石は相手に投げた石  
火消し壺あしたは炎える夢を持ち  
人間ドック裁かれて知る安堵感  
天真爛漫笑いとばして古女房

広島県 田村新造

中天の月へ踊りの輪もふくれ  
栄転のかたちでうまく放り出され  
保険証持って三日の旅に出る  
地酒売る店を探したひとり旅

静岡市 渥美弧秀

鍵っ子の幸福祈る寡婦の意地  
アポロ以後踊る兎の影も消え  
恙ない日を妻と居て忘れ勝ち  
七十路は明け易く暮れ易く

静岡県 藪田猷彦

想い出の橋で会つてる筒井筒  
大看板見えて下車駅近くなる  
受話器置き夏座布団を用意する  
雲ゆきがころころ変る永田町

堺市 柿花紀美子

里帰り生家の太い梁の下  
空想をこわした夫の大きな声  
善人のつもりの私に鬼がいる  
妊った娘と長電話梅雨に入り

弘前市 小寺花峯

同権を振りかざす茶が苦くなる

母さんの声が飛んでる赤蜻蛉

平凡のお湯につかつて欠伸する

笑って笑ってわらって泣いた玩具箱

竹原市 信本博子

語らいの歩もゆつくりと月の浜

ゆつくりと倉で寝かした古酒の味

ゆつくりと古都の歴史にふれる旅

長距離も今夜ゆつくり鬼の留守

羽咋市 三宅ろ亭

旧盆は浴衣団扇で墓詣で

幾張りの蚊帳それぞれを寝かしつけ

床柱背に落第の金満家

しんにゆうをかけると話面白く

倉敷市 田辺灸六

老夫婦 楷書のような日を送る

うからやから五十遠忌は歌となり

同窓会古希にかざした自画自賛

去るものは追わぬ路傍の石でよい

吹田市 栗谷春子

ホームステイ五月の風と入れかわり

散歩道ひとり行くから桐も散る

ハンガーのもつれはがゆい梅雨の空

ふるさとのガードレールは悲しいナ

川西市 松本ただし

時効きた鱗はがして衣替え

餅の絵を毎日変えて急がない

ヘルメット持って花博見にゆこう

嘘のない尻尾で野良犬ついてくる

芦屋市 上田佳秋

亡父に似た羅漢と逢いにひとり旅

反骨の亡父が忘れた帽子掛け

竹の花咲く頃少女脱皮する

釣り談義望み捨てない車椅子

伊丹市 山崎君子

雨晴れて爆音しきり友を待つ

ファッションショー年はいくつと聞かれても

初恋の師の手をひいて京の町

あといくつ母の日あるだろ母のしわ

守口市 結城君子

朝蜘蛛の幸運逃げ足の速さ

ホラー映画が大好きという蜘蛛の列

こんな姿で益虫という自尊心

死んだふりもしますと蜘蛛の演技力

箕面市 椎江清芳

吉相印 始末書に押す身の不運

ビニールの傘は似合わぬ舞妓さん

今日も無事夕日がビルに落ちてゆく

通り雨三味の音聞く軒を借り

和泉市 西岡洛醉

単純な女で可愛く今日を生き  
胃袋にたっぷり詰めてきて寝るか  
雑学の靴こぼれた夢ひとつ

大阪市 寺井東雲

小企業人手不足で店じまい  
肥満体常時ベルトを持ち上げる  
青田刈激しくなった企業戦

出雲市 板垣夢醉

宿題はまだかと急かす蟬トンボ  
八月の脳裏へ原爆雲が湧く  
虎にして檻から放つ縄のれん

岸和田市 芳地狸村

一輪を投げ入れ和む水鉢  
ガレージを持ってぬお人が車もち  
週日はとうさん抜ける晩ご飯

岡山県 二宗吟平

見ず知らず懇意になった旅の友  
島を背に二人で撮って冷かされ  
湯上りの苦労話によい寝息

福岡県 横地正好

はい捨ての日銭心に閑がない  
ゲートボールお寺詣りが減ってくる  
ピルの陰 地蔵新たな布を被る

河内長野市 植村喜代

済んだことなぞと済ませぬ今度こそ  
ウインドー吾が背が丸くとし写り  
アカシアの木の下ランドセル背負い

十和田市 阿部進

ほめられて嫁が仮面をはずせない  
聞き上手相槌打ってホラ吹かせ  
新婚にやっとな馴染んだフライパン

和歌山県 寺田裕美

鬼瓦に似ているなどと言わん  
嫌われにゆく念入りに化粧して  
消えてから尾灯が胸に燃えうつる

大阪府 板東倫子

折り節で微妙に変わる人生観  
単細胞だから若いと見てくれる  
刹那主義 地球のことは憂えない

大阪府 富岡温子

グルメ旅やっぱり我が家の味を恋う  
大声の割には小さい企みで  
占の凶を母には隠しとく

大阪府 中西兼治郎

履き慣れた靴退職後もはきつづけ  
いい齢をしてと浅はか叱られる  
健康な首を定年制が切り

岡山県 池田半仙

遅くなる孫私と反比例

古老舗お客の方が離れない  
今日天気ゲートボールで楽しめる

西宮市 瀬尾 六郎太

瀬戸路旅(二句)

このあたり潮騒たより牛窓の  
俯瞰するだけにとどめた瀬戸大橋  
逆転にまた逆転甲子園

出雲市 竹治 ちかし

何時の日か子を信じてる紙の餅  
信号が緑ばかりじゃない世間  
故里の秘密の森が枯れてくる

弘前市 村田 善保

ああ一生根性という自閉症  
石庭が訴えている静と動  
向かい風受けて男が上る坂

寝屋川市 堀江 光子

目だたない糸で破れた夢を縫う  
言い訳をしては自分を甘やかす  
土と化するなら花咲かすその土に

島根県 藤原 鈴江

時折りは若さに戻す夏しぐれ  
商魂が私を育ててくれた過去  
じわじわと白信蝕む風に会う

島根県 北川 民子

こんな時バタリアンの力こぶ

金持ちの国で患者が溢れてる  
一家言聞かされ戴くバラの鉢

大阪市 松尾 柳右子

沖繩かハワイ島なら泳ぎましょ  
淀川でシジミが採れたどうしよう  
あきらめたり応援したりタイガース

高槻市 竹内 花代子

交通費嵩みますがと遠い友  
アルバムへ話がはずんでいる長居  
おすそ分け階上階下行き来する

茨木市 堀良 江

田植して来たガラスの手を返し  
枝ごとの枇杷巫女さんの鈴のよう  
ワレモヨカレわたしも祈ることにする

出雲市 金村 青湖

罪重しノテウの国がまだ怒り  
姉様人形 男嫌いの顔を画く  
こだわりは見せぬ女将の二重あご

豊中市 一瀬 福一

失せ物が春に出て来た掘こたつ  
帰る気にさせた冷たい言葉尻  
温室は花の生理を狂わせる

大阪市 松永 すすむ

菜の花の葉も塩づけの春の味  
春の野にミサイルに似たつくしんぼ

孫が来てそらおそろしい事を言う

吹田市 茂 見 よ志子

謎かけて言った返事に拍子抜け

生き抜いた顔は説得力をもち

昇進の電話子離れ遠く聞き

鳥取県 羽津川 公 乃

巢の中に金の卵が一つある

鍵っ子の紐から母の鈴がなる

健康を道連れにした好い笑顔

鳥取県 さえき や え

経済大国わたしは花の園を持つ

この花だけは盗るなと神に掌を合わす

花しようぶ おまえ千両役者だな

鳥取県 津 村 八重子

来年も生かしてほしい鶴を折る

東雲にうれし再起の杖を振る

人間らしく生きる手づなを引いている

出雲市 小白金 房 子

慣習と生きる我が家の古時計

新道ができて古里ちかくなり

牛の糞 秋への期待の土づくり

大阪市 町 田 達 子

濃く淡く大奥絵巻か菖蒲園

公園でしろつめ草の香に浸り

宇野千代の魅力天寿を終えるまで

大阪市 山 田 妙 子

雪どけのベルリンの壁のあたたかき

列つくりプラハの春はまだ遠し

夜十時日が落ちかけてほっとする

吹田市 井 上 照 子

後悔の頻り衝動買いの宝石

CMを信じる姑の神経痛

断酒した夫のおやつを選っている

米子市 木 村 富美子

わら屋根を語り継ぐ子が帰らない

老父の爪切つて親孝行を一つ積む

お日さまに利口な花でおじぎする

守口市 森 川 まさお

仏壇の看板がある無人駅

船着場 半端な時間に二人くる

夏帽子 遠い目で見る日本海

奈良市 米 田 恭 昌

浅はかな自分を嗤っている鏡

古希近くマイク持つ手に青春を知り

花音痴でも花博は行くと云う

鳥取市 小 谷 美つ千

秋の野へ紋白蝶を解き放つ

雨雨雨パステルカラーに溶けてゆく

忙しくて恋する暇はありません

本音吐くまではくすぐり続けよう  
鳥取県 江原 とみお

尻もちをついた形で家にいる  
旗じるし持たないままに走ってきた

大阪府 神保拓生

葉桜に初恋の日を巻き戻し  
混浴へ勇んでみても老いばかり  
監督といえど気になる自己過信

静岡県 安本晃授

年金をちやちな義理にも狙われる  
有終の美を確かめる葉包紙

大阪市 榊本落児

花売りの言葉で花と語り合う  
ビー玉の弾みは昔のままである  
男には子供に還る時がある

生ビール今日は阪神勝っている  
和歌山県 岩崎瑞穂

行き詰り奥の手をもつゆとり  
言い訳へ友を巻き込む罪重り  
写経する仏心何時も無を求め

和歌山県 西口忠雄

カレンダ―の丸の数には妻に負け  
転職する度胸あんたにありますか  
一円玉可愛がられて歌になり

インテリが田毎の月を恋しがり  
まだ三つ幼小 大雨や風  
鳥根県 松本 はるみ

くすぐってセールスマンが判押させ  
鳥取市 谷口次男  
島を買う前に絵画で相場問う

強がりはやそう平和を乱すから  
岡山県 松本元江  
トンボすいすいもう川底に戻れない

鳥取県 乾喜与志  
間食をしたいできない病みあがり  
八十の手習いたのし惚け知らず

松江市 竹内すみこ  
生返事して言い訳を聞いている  
間違いのつづきの枝に花が咲く

岸和田市 三輪通彦  
言いたいが妻が言うなど目で押え  
若い頃鬼と言われた笑い皺

岡山県 直原七面山  
平凡を信条として生きて来て  
枯木に花を咲かす気恋に突っ走る

### お札

昨年、発行いたしました句文集『むらさき』  
は、お蔭様にて手許の分もすべて完了しまし  
た。厚くお札申し上げます。  
黒川 紫香

# 自選集

藤村 女

ほおずきが真赤にうれてる無人駅  
道徳心嘆く山岳パトロール  
空気の快感 山を又愛す  
大和路の野仏うずめる曼珠沙華  
あだし野の仏は人を恋う姿

金井 文 秋

満ち足りはせぬが生かされ生きている  
残り火を聖火の種火抱くように  
取り分け悪くないが全身がたがたで  
老後設計さて私ならいくつまで  
希少価値ないが明治の生れです

久家 代 仕 男

賑やかに咲いてのどかな花時計  
フマキラーも蚊遣りも要らぬ仁王さま  
湖のむかしを語る水すまし  
突かれてもむきにならないトコロ天  
星空が好きでガラスの屋根を葺く

野村 太 茂 津

狂えたらさぞ楽しかる間いつめて  
阿る街う詔う言葉嫌い抜く  
ボランティアー蟻は一生ボランティアー  
窓追うたホーム見送りもう一度  
影武者が似合う男で矢は持たぬ

有 働 芳 仙

落葉踏むと馬鹿馬鹿馬鹿と聞こえ  
口説かれて少し自信がついた顔  
嫁姑気味悪い程仲がよし  
目に砂が入りましたと泣いている  
寝てる間もお金が入るいい身分

藤 井 明 朗

多忙の口ぐせ楽しい趣味がある  
気ままに言える上位に嫁がいる  
花散つてから商店街に策がなし  
縁談へ邪魔が入っていた合点  
国民の不満底流にあり消費税

本田恵二朗

潤滑油とも楽隠居とも言われ  
乾杯が笑顔の渦を巻き上げる  
遠来を迎える握手血が通う  
また逢う日約す歌声張り上げる  
転んでもただで起きない技を持ち

松川杜的

鈴虫を四季に鳴かせて京の寺  
余生安泰妻が横に居てくれる  
七福神紅一点が居る賑やかさ  
瓢々と莫山の書に魅せられる  
散髪に行く日の朝も髭は剃り

岩本雀踊子

現実生きてるめし屋のめし茶碗  
本心と違う言葉で飾っとく  
もらい泣き出来る仕合せ知っている  
物忘れ上手でピエロの化粧する  
沿線に住んで近道知っている

水粉千翁

孤に咲いてそれでも花の物語  
はかなさを言わぬ重さで牡丹散る  
箸置いて目を閉じるとき我を知る  
その色に語れば花の歌となり  
孤島巖然として富嶽を知る

児島与呂志

騒音も素通りさせて夏の風  
風鈴をはずして寝ると決める風  
悔いの無いその日の汗を拭く  
朝顔をしみじみこんなに咲き誇り  
なんきんの実無しの花のつつましさ

野田素身郎

嫁姑姉よく寝てる昼下り  
六十路越え尿の出方もわるくなる  
喫煙所隅へ隅へと追いやられ  
ゆっくりとしか歩けない後遺症  
隙間が多い給料前の冷蔵庫

遠山可住

雲を読む父に狂いのないあした  
失望はせん未来図は神が画く  
背のびして友を失うツケが来る  
ほどほどというつき合いの難しさ  
人さまさま思いさまさま梅まつり

小林由多香

七転びまでは神様手を貸さぬ  
流れ作業ルーズが一人いて狂う  
数学の時間になると眠くなる  
ストレスが溜まれば浜の風にあう  
新人の無欲に恐いものがない

八木千代

人形の眉もしずかに忘れられる  
竹人形 直立不動して泣くか  
心変わりへ人形泣かぬもう笑わぬ  
人形の肺 突然に波を打つ  
前とおぼしき方へ人形足を出す

工藤甲吉

ジャパンマネーに驚くゴッホ ルノアール  
美味いコメ美味くないコメ罰当たり  
死んだ方がいいなと思う紙オムツ  
よく生きたもので保険に満期くる  
無職でもやはり朝昼晩を食い

月原宵明

爪かんでちっばけなこと考える  
赤いポスト郷愁そそのる雨の街  
子を産まぬ女になった座りだこ  
始発フェリー着いてドラマの幕があき  
止り木の隅 弱虫の泣くところ

大矢十郎

待合いのテレビが写す女優の死  
地獄極楽来た途を尋ねなば  
口ずさむ唱歌へ浮ぶ師のタクト  
お据分け捨てて高級分譲地  
口喧嘩そこまでにした孫が来て

波多野五楽庵

哲学の道で静かな風に逢う  
みな同じ石で拾いに来てくれぬ  
いつかまた飢餓の碑が建つ日の驕り  
生流転 旅の情けが消えやらず  
桜桃忌 津軽娘は泣きやすし

辻白溪子

自転車が邪魔して銀行入れない  
いつからか入れて貰えぬ子供部屋  
郵便に紛れ督促状が着く  
炊事する仲間は保養の顔見知り  
延長戦ビールを追加するナイター

正本水客

野沢温泉  
むかし泊った宿はみどりの中にある  
麻釜(おがま)の湯気が木立の緑巻いてゆく  
コブシの白が夜の廊下を明るくす  
山菜料理の一品ずつにある心  
廊下に部屋に野の花が心和ませる

阿萬萬的

糖尿気味 妻がいろいろ気をつかい  
手のシミを見せ合っている老夫婦  
総入歯になった話はたかが知れ  
古稀過ぎた反省小雨の夜に似て  
日々好日平凡過ぎます老夫婦

西田柳宏子

バランスが悪いとむごい花鏡  
先輩の足 口ほどに動かない  
傷口をいたわり合うた夫婦坂  
聞いてから聞かなよかつたとも言えず  
添うてからあれこれ嫌なところが増え

小出智子

オンボロの自転車だけど頼り甲斐  
教えられたように斜めに傘を差す  
言うなれば松葉ぼたんの強さほど  
船酔いをしたのはわたし一人だけ  
レインシューズを買ったら雨が好きになる

黒川紫香

花博に行つたと遠くから便り  
玄関を拭いてるとここに客が来る  
今年また貰うた朝顔咲きははじめ  
面会謝絶の札にどきつとさせられる  
侵入をしたばっかりに蚊の寿命

高杉鬼遊

辞書買って梅雨の晴れ間の空を見る  
あげまんが平気でほくの影を踏み  
秀才と同じ空気を吸って生き  
棺桶の中から影が逃げてゆく  
なにほどのこの世と思う根なし草

河内天笑

若う見られて全身で照れてはる  
墓まいりぎょうさん懺悔してしまい  
人前に晒すと傷は治りよい  
カミナリが妬いているので離れよう  
手話はいまエツチな話しています

▼前号本欄訂正▲ 七月号の「自選集」欄(36  
P)上段の阿萬萬的氏の句は河内天笑氏の句で、  
同下段の河内天笑氏の句は辻白浜子氏の句でした  
ので訂正いたします。印刷所の製版ミスによるも  
のですので、ご諒承をお願いいたします。

第14回 茗人忌川柳大会

とき 8月26日(日)午前10時  
ところ 鳥取市富安 鳥取工業福祉  
会館「鴻南閣」  
(鳥取駅南口徒歩5分)

お 話 美房氏  
兼 題 「鍵」 吉岡天笑選  
「指」 河内三男選  
「泡」 河内月子選  
「壁」 小林妻子選  
「鏡」 小八木千代選  
「甘い」 小林由多香選  
「蛙」 福代天雀選  
(各題2句、席題なし)

会 費 3,500円(作品集・懇親会・  
昼食含む)

投句料 1,000円(作品集呈)  
8月15日締切

〒680 鳥取市相生町3丁目204(森田熊生方)

うみなり川柳会

## 若本多久志

東野 大八

使用したからだ、副官が語っている。

多久志の名を頭に思い浮かべるたびに、筆者はこの人から貰った『左利き人生』というポケット版をいつも思い浮かべる。

二、三度、この故人と顔を合せたことがあり、一度は一時閑余の車中のことであつたが、謹厳誠実をそのまま人間に仕立てあげたようなその物堅いお人柄には、生れつき自堕落で饒舌雑言をコトとする当方は、大いに閉口頓首したのである。思はず破顔一笑したことがあり、先方が左利き、当方が右利きのせいだろう。

ところが川雑に出た「雅号ぶっちゃけ話」を眼にして、思はず破顔一笑したことだ。

「昭和13、14年ごろ、川柳の手ほどきをして貰っていた安川久留美氏がやってきて、俺が雅号をつけてやろう」ということになり、当時、私が定期貨物自動車会社の重役だった関係で「トラック」即ち「登良久」と命名され、「俺の一字も入っている」と悦に入つて一緒に飲みに出た思い出もある。

その後、昭和26年から大阪に来てタクシース社を創立、二十八年には路郎先生の不朽洞会の末席に加えて頂き、「多久志」と改めるとともに俳人が俳号と称しているのにならぬ、「柳号多久志」と称して表札にも名刺にも本

「左利き人間の人権を宣言して友の会を創り、活動を開始して以来、テレビ、ラジオへの出演や全国各地の新聞にもその運動が紹介されているが、『左』について二、三書いてみよう。まず日本神話に出てくる神々の誕生は、いつも左が先で右が後になっている。

伊邪那岐の大神が左の眼を洗うと天照大神が、右の眼を洗うと月読の命がお生れになったことに初まり、古代から近代初期まであつた太政官制では、太政大臣に続いて左大臣、右大臣の序列がある。

ではいつの時代から右尊左卑が初まったのかといえどもまづらかではないが、古事記や日本書記が完成した頃、中国から渡来した漢文が、当時のインテリに普及して『右縦書き』

仮名まじりが国語の表現方法となり、右優先の思想が芽生えたのではなからうか。

とにかく地球全人類の二割は左利きとして生れてきており、根強い迷信に支配された中近東、東南アジア（日本を含む）を除いては、左利き人間は性能的に優秀なのだという考え方ももって育てられているから、帝王として或いは政治家として傑出した人物が多いし、芸術の世界でも枚挙に暇なしの天才がいる。

人間の問題に戻すと、老年期に入るとよく脳卒中で半身不随になる人が多いが、この場合、言語障害を併発しないのは左利きだ。

日本が米軍に占領された折、ピストル自殺を図つて失敗し、生き恥をさらした東条英機は、左利きで馴れない右利き用のピストルを

名の横にこれを表して今日に至っている」

多久志 一本名若本真彦、明治35年6月15日広島県生れ。

川柳との縁は、金沢の『百万石』(安川久留美主宰)に大正14年から投句。久留美主幹から手ほどきをうけ、昭和22年名古屋で開かれたすげ笠川柳社主催の全国川柳大会に出席。久留美の紹介で路郎・紋太・三太郎と会い、路郎選の「初対面」が奇しき因縁となった。

その折、金沢近くの小松市出身の清水白柳とも初対面、こうしたことから多久志は川柳一筋に歩むことになる。

「麻生路郎先生が御逝去される直前の十二月(昭39)、今だから言えることだが、我々六、七人の門下生を集め、

「川柳雑誌は路郎と共に亡ぶべきものであり、それは私の健康がこの仕事を許さなくなつた時、又死を迎えた時である」と

と高邁な理想と、固い御決意を語られた時、われわれはそれぞれ、その後の対策についての考えを申し上げてみた訳であった。

然し、先生はそれに就いて、良いとも悪いともお指図はなく、ただその道が如何に苦しいものであるかということをしみじみとお説きになったのであった。(中略)思えば

このとき、我々門下の胸中、既に『川柳塔』誌発刊の固い決意が生れたといつても過言ではないのである。(句集『続・老いの坂』)

多久志は、路郎語録「川柳は人間陶冶の詩が金科玉条であり、そのままそれがこの人のかけがえのない、人生訓」でもあった。川柳塔副理事長で尽粹し、中島生々庵主幹を助け、昭和57年8月16日死去した。享年80、法名・帰真院釈泰成。

「麻生路郎先生を心から敬慕し、川柳を片時も忘れず、情熱と執念をもって多年の間、作句指導に療養管理を忘れず、病魔と戦い、一生懸命だった。ほんとうに頭の下る思いです。白内障をその上患われているにも拘らず、最近の塔誌に川柳塔選を発表せられた多久志さん。」

数年前、あなたから「揭示訓」並びに「続揭示訓」を頂きました。あなたが尼崎日産自動車会社の会長の時、社員諸氏への人生指針として執筆、頒布刊行されました。それは貴方の熱意と誠心の輝やかしいもので私は今も座右の書として手離さず、教えられています(川村好郎・悼文)

「死去する半月前ごろ)看護婦さんに、『近く西宮北口の会があり、柳話をしなければ

ならないので、ちょっと稽古したいからこゝを貸して欲しい。それから人を集めて下さい』看護婦も笑いながら『どうぞここでやって下さい』と立ち去ったまま、暫くメモらしきものを片手に付けて待っていても、誰も来ないなア。そのあげく、廊下の各部屋の名札をみると苗字と雅号が結びつき、たとえ西田とある名札に『柳宏子さん…多久志です』と入っていく。各部屋の名前はほとんど柳人に結びつき片端から入っていく。(中略)薫風氏の話によると西宮北口句会をととても気にかけて、出題は好きな「絆」にするとか、川柳塔の推薦句の選出や、目次下の執筆依頼などに対しては、二度も三度も同じことをくり返して手紙や電話の問合せがくる。私達柳人としてこの「川柳に対する一途な思い」を単に老人呆けといえるだろうか(西田柳宏子悼文)

句集『親ごころ子心』(愛児雄作に捧ぐ・昭3)、『句集『老いの坂』(昭42)、『随想集』(凡愚のたわごと) (昭47)、『訓言集』(人づくり) (昭54)、『句集』(続・老いの坂) (昭54)

袈裟脱げば毛脛の凡夫なり 多久志  
ワツハツハ終つて命終らんか 〃  
重荷おろして人生は何んだつた 〃

▼次回は「垂井 葵水」

# 柳籠裏三篇研究 (四丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮

大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

## 60 四ツ手から釣を取ったてむすこげび

岩田 四ツ手は、やれ何のかのと言って酒手  
をねだるのだが、また、逆にうんと酒手をは  
ずんで急がせるのが粋でもある。それを「息  
子」は、釣りを取ったので下卑たというので  
あろう。

西原 贊。酒手をはずまないばかりか、釣り  
銭までとるとは粋で通の息子のすることには  
あらし。

七久保 初登楼の息子で酒手などのチップを  
出すことも知らずに、また吉原に行って散財  
しようとする程の男が、四ツ手の駕かきから

わずかな釣り銭をとった事がいかにも下品に  
見えるとの意味でしょう。

もてた事四ツ手と話すはしたなき 二九  
鈴木 七久保氏説がよい。吉原行きの四ツ手  
である。

岡田 贊。

## 61 茶もせぬが和尚囲いを持つて居ル

岩田 「囲い」について、主題句では二つの  
意味をもたせている。一つは妾、他の一つは  
茶寮の囲いで屏風などで二区画を囲うこと。

句意は、別に茶の湯の心得もないのに、和  
尚が「囲い」を持つているとは、これ如何に

というのである。

なお、川柳に詠まれる「囲い」は、和尚の  
囲い者が多い。

西原 贊。茶の心得もないのに……ではなく、

茶もたてないくせに、であらう。囲い一坊主  
は古川柳の不文律で、多数の句から帰納した  
結果である。

七久保 茶もせぬは、茶の湯などするような  
風雅な坊主ではないとの意であらう。茶と囲  
いの縁語仕立ての句です。

鈴木 礎稿に七久保氏説を加えたい。

岡田 同。

## 62 さあ半六と団十郎の次第

岩田 初代団十郎が、元禄十七年(宝永元)  
二月十九日、市村座にて「移徒十二段」上演  
中、二番目と三番目の中入に楽屋で生嶋半六  
(杉山半六改め)に殺された事件があった。

この事件を瓦版にして読売が売り歩いたで  
あらうという句。

佐藤 贊。

市川と杉山紙代が四文

四文は瓦版の値段のようである。

鈴木 贊。

岡田 当時の号外売り、即ち「お咄し、お咄

し」と呼びながら走って売って歩いた瓦版の代金は四文でした。

63 あれ鳥めと追ふふりて一ツもぎ

岩田「あれ鳥めが」と鳥を追うふりで、柿をいだと言うのであろうか。

西原「賛、礎稿のとおり。」

大野「賛、成り物であれば、何にでも通用すると思ふ。」

佐藤「礎稿で言っている「柿」と見るべきであらう。」

闇の夜になかぬ鳥に柿がへり 安八天

鈴木「礎稿のとおり。」

岡田「同。」

64 をかしさはすが、き斗り上手也

岩田「すががき」は、吉原の張見世にだけ残る、唄のない三味線の繁弦である。だからこれだけ巧くてもなんにもならない。それを「をかしさは」と言つたもの。

西原「すががきはばかり上手、あとは下手。その下手の内容を考えると、さらに可笑しい。」

佐藤「賛、何時も売れ残つて、すががきはかり弾いているから、上手なのである。」

鈴木「賛。」

岡田「賛、スガガキは初めは歌があつたが、この当時はシャリラシャリラと弾くばかり。」

65 新出合茶屋は笑ツて客が来す

岩田「『出合茶屋』は今でいう「つれこみ」であり、川柳に詠まれるものは、池の端が多い。商売柄派手なものではなく、細かい所に神経が行き届かねばならない。笑つたりして客に不快感を与えては商売にならない。」

ここは、新しくできた出合茶屋だけに商売慣れず、笑つてばかりいて客が来ない、というのであろうか。

西原「賛、愛想笑いもあろう。すると逆に客がかんぐるのである。」

佐藤「賛、客の部屋からの痴話やよがり声が聞こえてくるので、思わず笑いたくなるのであるが、笑つてしまつては客が来なくなる。」

八木「アンバランスなアベックが来るので、新商売の慣れない茶屋の主人が、従業員か、思わず失笑してしまつたので、客の入りが悪くなつた。」

店ものものは、客となるだけ視線を合わさないようにするのが商売の作法、礼儀である。七久保「デートしなれない新しいカッブル」という意味が新出合にかけてあるので。茶屋

の前で入ろうとしても他人の視線が気になつて、もじもじしている。現在でも山の手線の大久保駅周辺や他のサカサクラゲのマークの宿あたりでよく見掛ける図

鈴木「八木氏説に賛。客が来ても無愛想でよい商売。」

岡田「同。」

66 和漢の大雪玄徳最明寺

岩田「玄徳は、蜀漢の昭烈帝、『通俗三國志』に「玄徳、風雪に孔明を訪ふ」の条があり、最明寺は鉢の木で有名な北条時頼。

ここは、玄徳と最明寺を大雪という共通点を持つことのみで取り合せた、所詮「吹寄」的面白み。

西原「賛、共に武将であり、共に忠臣を得た。」

鈴木「賛、つまらぬ句。」

岡田「同、また同感。」

柴田英壬子さんから

句集発刊を記念して

金一封拝受いたしました

川柳塔社

# 越後の豆川柳と美濃の狂俳

阿 達 義 雄

「武玉川」の短句の多くは、俳諧の附合から抜かれたものであって、最初から七七の句として作られたものではなかったが、これはこれで、一句立てとしても意味がわかり、人々の鑑賞にも値したものであった。

しかし、この七七の短句は、ついに独立句とは成り得ず、俳諧武玉川調の名で愛誦されてきただけであった。

では、この七七の武玉川調より短い詩型が日本、否、世界に存在したであろうか。

昭和二十四年、私が「江戸川柳貨幣文化」を出して『新潟日報』の川柳選者になつてから間もないころであった。

柏崎市の松田政秀氏から「これは一体、何というものでしょうか」と、七七の武玉川調

よりも短い七五形式の句が送られてきた。まず、その二、三の例を示してみると、

○堅すぎて身がかたまらぬ

○わび言ふ頼み後にゐる

○下戸の知らない水貰ふ

というようなものであり、これらには次のように題が示されているものもあつた。

万年新造

○とうは立つても蝶はくる

独り寝

○おかかにかたきとられた

棒鼻吐気

○え、雨だのう金がふる

右のように課題までもあるところから考えると、これは冠附ではない。

冠附ならば、川柳評万句合にも見え、例えば宝曆八年九月五日開・冠付の「けた、まし」という五文字の題に対し、

○かたきをとつて来た娘

○清涼殿へ入りかわり

○雨戸が裾を引くわえ

などの七五の句がつけられているものの、この七五だけでは、いずれも句意を成さず、冠句の「けたたまし」に附けられて、

○けたたまし仇を取つて来た娘

として、初めて一句立ての句となつてゐる。

したがつて、もし、これらの附けられた七五だけで句意を成すものがあり、それが冠句抜きで作られ、七五で独立した句になつたとすれば、七七の短句よりも短い七五の句になるはずである。

しかし、七七の短句ですら、独立句として実際に作られたのではなかったから、七五だけの独立句があつたとするならば、おそらく世界においても最短の詩と言われよう。

この七五の最短句を、松田氏は豆川柳と仮称されたが、確かにこれは豆川柳ともいふべきものであろう。

この豆川柳は、袋反古（はく）の紙に四、五百も書かれ、選者が選をして朱筆まで加えてあつた

というから、これは誰かが、ふと慰みに作ってみたのではなく、これらを作った一つの団体があったのであろう。

発見の場所は、高田(上越市)だと言われているから、あるいは江戸末期に高田藩の武士などが江戸から招来したか、または前句附から一句立ての川柳が生まれたように、冠附の七五の附句を独立させて、一句立てとして作るような同好者の集団ができていたものであろう。この豆川柳が江戸の事情によく通じた者によって作られたものであることは、

(1)千住の馬を甥がつれ

(2)二百の恋でねむたがる

などのような句によっても知られる。

すなわち(1)の千住の馬は、千住辺の茶屋などからついて来た附馬であり、二百の恋は二百文の飯盛との一夜の遊び代であって、いずれも川柳においても好題目とされていたものである。

また、「万年新造」とか、

〇どう考へても二歩たらぬ

右の句の二歩などという語は、江戸時代の言葉であり、特に

〇何の話にも江戸がつく

右の句で、江戸話に得意になっているのを

見ると、最近、江戸から帰った者のことを言っているようである。

次に川柳的な狙いの句を挙げてみると、

〇二度来ん茶代忘れとく

〇こんな返礼氣が痛む

〇山陽はめる仲間くる

などで、「山陽はめる」は頼山陽筆のまがい物で欺すことであらう。

特に私が驚いたのは、上越の豆川柳の中に武玉川調の「雷様が恋の仲人」という傑作句によく似た、次のような句のあることであつた。

〇出雲の風が灯消す

これは風が吹いてきて灯を消して、二人を接近しやすくし、ついにめでたく結ばれるようにしてくれたので、結果から考えて「出雲の風」と言つたもので、なかなか巧妙な句である。

なお、男女関係を詠んだ句には、

(1)りん気は不器量に免じとる

(2)ほんとの兄でございませ

(3)するする繻子とける

(1)は不器量の女の嫉妬、(2)は旦那に対する妾の弁解、(3)はまさに繻子の帯の解けかかっている年増女の姿態を、それぞれ詠んだものであり、いずれも、痴情に関する句を考えら

小西雄々句集「松露」

## 発行記念川柳大会

とき 9月24日(休) 午前10時開場

同 11時半締切

ところ 米吾ステーションビル6F

(JR米子駅前)

お話

兼題と選者(各題2句) 投句拝辞

「吉 報」 西尾 栞選

「多 才」 久家代仕男選

「一 宴」 渡辺 恒松選

「ギリギリ」 両川 洋々選

「勝 算」 奥谷 弘朗選

「夢」 八木 千代選

「讓 る」 但見石花菜選

「ハンドル」 土橋 螢選

大会費 三五〇〇円(句集・作品集等)

大会と懇親会 五〇〇〇円

〇宿泊希望者は8月末までに小西雄々へ

(皆生温泉まつかせ荘 六〇〇〇円)

主催 松露川柳会

れる。

○位牌にすまぬ業染まる

右の句などは、川柳的に表現すれば、「石塔の赤い信女が又孕み」となりそうなところである。

○男波にふんどし濡さるる

などの句も、単に女が波打ち際に戯れているのではなく、波打ち際は波打ち際でも、恋の波打ち際であろう。

ちなみに、江戸語としての「ふんどし」は、

女の湯文字のことも言った。

○すねて急かされて鼻毛よむ

○そこ放しやんせ冷えるぞえ

なども男女の痴態を詠んだ句である。

高崎藤村の小説「親爺」の内容と同じようなことを短詩形に表現して、人生の皮肉、女の貞操に対する懷疑を詠んだものに、

○大勢の親で一人産む

というのが見られる。

子供のことを詠んだ句は、

○がんぜのう来て乳さぐる

○連れ子が玩具並べとる

などのような哀れな句もある。

その他の豆川柳を一括して示すと、

○白魚の骨抜いて食ふ

○眉毛がとれておみそれる

○拝金宗で地所ふやす

○二君に仕へぬかくこ

○ふんどしへ札くるんどる

などの句があり、最後の句に札(さつ)とあるところを見ると、明治に入ってからの句とも考えられる。これも江戸川柳の末流の一つとして、世に埋没してしまうことを恐れて筆に留めた次第である。

前句附が前句題の七七を脱落して、独立体の川柳となったと同じ道をたどり、冠附もその冠句題の五文字を脱却して、その附句の七五が最短句の豆川柳として、雪の高田に榊原高尾のように埋もれて、世に忘れられていたのに興味を感じられる。

ところが、昭和四十九年九月九日の「朝日新聞」を見ていたところ、その頃、岐阜県の加茂地方にも、豆川柳が盛んに作られていることを知った。もともと、この地方では「狂俳」と称していたということであった。ただ、これはまだ冠附の痕跡を残しているもので、「五文字までの題目に、中七、下五、または中五、下七をつけて、一句を仕立てる」とあるから、題目の五文字と照らし合わせて鑑賞するものようである。

この狂俳の句例を見ると、「狂乱物価」の題に「国会議事堂ゆれている」手にとった品戻しとる」などという句が作られ、「ボール」の題に「母が水着で若返る」とつけられ、また、「忍び足」の題で、「遅刻の廊下、長過ぎる」などであるので、これは一種の冠附である。

要するに、江戸末期に上越地方に行われた豆川柳は、依然として世界の最短詩型であることに変わりなく、美濃加茂地方に行われていた狂俳というのは、冠附がやや近代的になったものであり、冠附は江戸時代はもちろんのこと、明治時代でも各地に盛んに行われていたものであるが、豆川柳は上越地方の高田辺にだけ行われ、全く独自のものであった。

## 夜市川柳募集

題

選者

締切

第3回「脱ぐ」

林 荒介

8月末

第4回「許す」

新家 完司

9月末

第5回「叫ぶ」

田頭 良子

10月末

第6回「拾う」

高杉 鬼遊

11月末

第7回「女」

住田英比古

12月末

投句先

〒593

堺市堀上緑町2-9-2

河内天笑方

堺川柳会

同人吟

# 秀句鑑賞

—前月号から

田口虹汀

同人になった日から今日の日が何時か来るとは覚悟していたが、同人吟の秀句鑑賞は一寸重荷だ。栗先生から作者の顔を知らぬと選はやりにくいとお聞きしたことを思い出した。本当に噛みこなすか、入念に噛むことにした。祈ることはかりて老母の背が曲る

嘉数 兆代賀

一生を子のため、家のためと献身的な愛情が姿となって顯れた。せめて湯上りには母の喜ぶ腰など揉んであげたい。若くして母を亡くした僕には見過ごしできぬ句

米びつに五升位はいつもある

西村 早苗

外食外食と家庭を留守にして上つ調子に明け暮れる平成の今日、作者のよつな主婦がまだいるということは、日本もまだまだ心強い。しんがりを書くかこしい足を撫で

小野 克枝

殿りの難しさは、今も昔も変わらないと思つ。

行軍の後尾について落伍のないよう、前に残り後になり、グループに支障なきように……。心身ともにたくたになつたかしこい足を労わる。かしこい足を撫でるのがいいと思つ。芋虫のことに触れぬ蝶の羽根

林 瑞枝

人間の心理を描いて妙。女性ならではの眼力に敬服。

水落ちて来るから水車休めない

石川 侃流洞

人間誰もが週に一度くらいは休みたい。だが休めない水が落ちて来る。人生とはかくの如きものだと教えられる句

絵に描いた餅がふくらむまで待とう

小西 雄々

これでは喧嘩にならぬ。昔小咄に聞いたことがある。京都のお方は電車の中で足を踏まれていても、下りるまでにはのけて頂くだろうと……。小西さんはこれ以上である。一度お会いしたい。

安住の地の雑草が抜きにくく

宮西 弥生

二、三回読んでいる中に歯の痛みが止まるような和やかな心地よい句。人の子を誘拐して金にしようとする人達に嘔吐して飲ませたい。体温の伝わるペンで母へ書く

林 はつ絵

齡をとつたせいか、こんな句を読ませて頂くと、作者のペンの温もりが唐津の地まで伝

わってきて目頭が熱くなる。

程々という程々のむずかしく

宮口 笛生

程々という言葉には五十年この方、職人として悩まされて来た体験上、見逃せなかつたどの程度で仕上げているのか、いやな言葉だ。来年の厄を今年で済ます怪我

山本 規不風

お坊さんか、規不風さんでないと言まぬ悟りの句。

安らかな寝息に解けるわだかまり

松川 芳子

昼間の恐ろしい程の剣幕は何所へやら、安心し切つた寝息に、言いたいことも言わずに辛抱した甲斐があつたと春の雪のようにこたわりも解けて行く。人間忍の一字は尊い。転動へニツクネームがついてきた

仁部 四郎

良きにつけ悪しきにつけ、ニツクネームは避けられぬ宿命である。剃刀のように切れる仁部先生には、教頭時代のニツクネームが校長室までついて来たか、微笑ましい風景。罪のない海を野心が埋めていく

小林 妻子

庶民の代表たる政治家が決めた案でも、国民が双手を挙げて喜ぶ事業などはない。また一つ、あの美しい海の色が削られて行く。死ぬときも金で序列をつけられる

高須賀 金太

# 水煙抄

黒川紫香選

鳥取市 萩原美雪

雨 雨 別れ一層つらくなる

恋のうわさされて意識をしまし  
男の夢と女の夢がかみ合わぬ  
恋は魔法どんな彩にも染めかえる  
男と女 不可解だから面白い

尼崎市 新井朋子

ただじつと風が吹くのを待っている

野良犬にもなれずシッポを抱いて寝る  
試験終了毎回おんなじこと思う

振り返ってばかりだあれもいないのに  
気にしないで下さい今のは独り言

吹田市 山本希久子

まだ慣れぬ職場の椅子に浅くかけ

ダイエット中を忘れる旅の膳  
花博に人人人を見る疲れ

本当のほんとなんです癌じゃない

急流に浮かんだ葉にもすがる蟻

浜田市 中尾まゆみ

草笛を都会の渦へ届けよう

人波に咲いて見たくて夢を追う  
それは愛 千の響きを両の手に  
一通の便りと余韻ながれ着く  
譜を抱いてわたしの明日を切り開く

名古屋市 藤井高子

児が指せば北斗の星も夢を持つ

満天にちち星は星柳友の星  
遠まわりして人情の風に逢う

ぬるま湯で事後報告を丸のみに  
我がこととなれば目つきも変りだす

尼崎市 児玉歌子

地平線 夢を預けてばかりいる  
突き止めた部屋で煮え湯を飲まされる

重い腰上げて平和の使者になる

絵に描いた条件落し穴に会う  
少し椅子ずらして金を借りている

佐賀県 寺 中 三枝子

ソフトな妻でいたいな少し翔んでみる

フォークダンス夫と青春してみよう

規格外の物差し持っている夫

馴れ染めを語る今夜の白ワイン

星降る夜翔びたいのは俺さとキミ

静岡県 柳 沢 た ま

筆握り思い出せない字が一つ

浄土とはどの辺ですか会えますか

一生のドラマは日記に書いてある

他人には分からぬ亡夫の手の温み

童歌うたうと曾孫すぐ眠り

広島市 流 奈美子

心地よい説法聞いて船をこぐ

のんき眼鏡を掛けすぎました二重顎

陽燦々若い帽子の躍動美

石亭の石の装い虚偽めいて

無為無策やっぱり眠ることにする

静岡県 沢 田 き ん

約束へ笑顔で覗く三面鏡

出かかった言葉のみ込む朝の膳

全快へ笑顔が戻る薄化粧

寂しさをただ便箋へ書き綴る

流されて流れて丸く生きる石

今治市 野 村 京 子

騒ぐ血がまだある種火抱いて春

坂下る女に消えて行くエコー

いい返事聞きたい花の切手貼る

人目忍ぶ絆の鍵を一つ持ち

夏帽子もろて地蔵が目を細め

八尾市 高 杉 千 歩

口下手な女が辛い傘の中

幻を追えば仏に逢えるかも

六十路の夢に底ぬけの青い空

三日坊主に又だまされて帆を降ろす

お洒落して行く当てもない夏帽子

富田林市 池 森 子

やわらかいみどりへ心透きとおる

夫には一步譲っている女神

再婚の話も聞いた藤娘

押しても引いても動かないのに泣きぼくろ

何度も手を洗う無意識の中の罪

熊本県 大 川 幸 子

寂しいのだからかダイヤル回す指

蹴られても石は素直な顔してる

どうしても聞き捨て出来ぬイヤリング

受け皿に一寸甘えていませんか

車内車外広告眺め汽車の旅

熊本市 宇野昭代

速花火 久しく母に会ってない

梅雨晴れ間工事は五時に引き上げる

深夜タクシー親切すぎてちと不安

父の日の飯場へ届くプレゼント

少しいびつな鍋が姑のお気に入り

摂津市 木下道子

ラストシーンの余韻に灯りはゆっくりと

玉ねぎを干す弥次喜多の荷のように

木の芽味噌夫婦相和し摺り上る

銀行はお八つの時間と戸を閉める

トイレットペーパーほどけるように命減る

尼崎市 新井泰子

エプロンで何とか母の顔になる

エアメール重い話題はのけておく

あどけない笑顔疲れが溶けてゆく

気がつけば一緒に住んでた青い鳥

うちの児が最高と思う乳児室

兵庫県 森脇和子

ほどほどに妬いて妬かれて仲が良い

偶然の出会いで夢を追いかける

悠々と生きて二人のティータム

騙されていよう七坂越えるまで

羽曳野市 芦田絢子

年金で外面だけは優雅なり

順番が来たから握手しておこう

袋小路はやさしい風が吹き溜る

空白のページに無為の年齢重ね

雲の私語聞けば旅して見たくなる

岡山市 富坂志重

そろばんをはじけば愛が消えてゆく

夫逝きて私と話す置時計

コッソリと目かくしの手の温かさ

栄転を少しねたんでする握手

手も足もどうにか付いて来た米寿

藤井寺市 高田美代子

まん丸い月だな喧嘩などできぬ

少女きらきらやがて恋する恋に泣く

風鈴が浴衣着ませんかと誘う

蕎麦枕に替えると母の声がする

意地悪がしたくて裏に回っとく

堺市 桜沢あかり

思い出し笑いをしてる小引出し

裏口に話のわかる鬼がいる

賛成に傾いてくるまわしのみ

大き目の財布で義理を一つ欠き

土つきの大根さげて叔父がくる  
久留米市 鶴久 百万両  
海峡をまたぐと亡母の灯が見える

神さまにもらった顔と諦める

酔うほどに虫歯の奴が暴れだす

蝶になろう花のところが読めるなら

夾竹桃咲くとエデンへ帰ろかな

馴れ合いの傘がゆれてる梅雨の道

青春も過去アルバムに取ってある

亡父の癖供養の席に出て笑い

一円玉安定多数で欠伸する

飾る気がなくてチャンス逃がしてる

窓ガラス隔てて手話が温かい

カルテ見る医者の気になる独り言

陸橋を斜めに老母と手をつなぐ

洗濯の度に巢立った子を憶う

町工場汚れ軍手を釜で煮る

入梅へあじさいおしやれな彩を着る

新しい土地になじめぬ散歩道

転居して大阪の風なつかしむ

風の音聞きたくなくて取る受話器

孫に会う日待つ故郷の数えうた

行き止まりですと地図には書いてない

マジシャンが出した鳩みなおとなしい

大阪市 上田柳影

尼崎市 的場十四郎

尼崎市 尾宮弘治

加古川市 吐田純子

紫陽花の雫は涙かも知れぬ  
おぎなりのお別れだけにより淋し

堺市 楊井二南

間違えた靴災難で許される

ジェスチャーを入れ災難を怖がらせ

隙の無い勝負掛声だけで済み

減らず口叩いて閑な証拠見せ

五分前まだ揃わないもどかしさ  
尼崎市 森安夢之助

おみくじは大吉なのに掏摸にあい

方言を袋に詰めて京の旅

港の灯船が入ると赤く燃ゆ

西宮市 菊池トミエ

竹の子はさらりと脱いでいい節目

ポケットベル鳴ってコーヒーマずくなり

子の部屋はさわらないでと追い出され

いっせいに咲いた花にもある序列

堺市 神原文

ようこそと迎えてくれたリラの花

下戸寄ってグラスばかりを褒めている

水割りもいけますなどと京育ち

脇役にまわるとぐつと自力出る

出雲市 金森知恵子

反論は一夜寝てからすることに  
プランター溢れる思い届かない

野の百合も鳥も明日を煩わぬ  
いい話聞かせ涙をこぼされる

出雲市 岸 桂子

今日一日も仕合せでした仏さま

水面に誤解ばかりが浮いている

ブランコが揺れてみどりが目にしみる  
泣いて笑って又一つ歳をとる

和歌山市 田中みね

立て板に水あなたが妻でない救い

教養が邪魔して雑魚を寄せ付けず

中傷に打ち勝て母の鈴が鳴る  
人にやさしく席を譲って断られ

鳥取県 西浦小鹿

どうしても左へ曲がる僕の足

ゴキブリに部屋の四隅をとられてる

頼杖をつくと孫まで真似をする

ふるさとに童謡の芽がのびている

姫路市 松本一郎

満月と夜勤へ急ぐペダル踏み

転宅も十度目となる走馬灯

とうさんの好きな鯖ずし旅土産

限りある時間に無駄が多すぎる

酒田市 永澤裕子

桃源の山里人も空も澄み

煩惱を捨てて貼り継ぐ千円札

手抜きする術は持たない几帳面  
自己顕示つよくていつも砂を踏み

尼崎市 山田保蔵

猿まわし池の堤防でヒルにする

外科内科眼科も診ます島の医者

連休は働くよりも疲れます  
人さまの前で話せぬ過去がある

尼崎市 野瀬昌子

運命練きれぎれにのび苦勞人

だんだんに荷は軽くして老いの坂

だんだんと母に似たなと思いだす  
金箔で寿と書いてくる招待状

尼崎市 木下義嗣

裏町で艶歌を流す人に逢い

化粧して鏡にてれる孫娘

袋小路人情の厚い人が住み

古写真見では思わずひとり言

尼崎市 住谷石舟

天職と思つた椅子が軋みだす

ふるりに飾る錦は子が二人

消しゴムで消えるラッキーマーならいらぬ  
ビニールのコートの妻が若く見え

河内長野市 大西文次

四人目でやっと望みの鯉のぼり

愛情で洗う洗濯よく落ちる

順序不同お偉い順に苦勞する  
結納が決つてからのよい話

出雲市 原 章 峰

崖淵覗いてストレスが落ちた  
天国に一番近い寺の屋根  
立ち枯れの松と僕とは同い年  
お疲れさま私へ崩れる波頭

松江市 佐野木 み え

傘の雫落してバスの人となる  
香水を一滴はずむ夏日差  
都会の子蟬を土産に持ち帰る  
店頭に青梅が出て落着かず

和歌山市 山 口 三 千 子

溺愛をしすぎて脱皮まだ出来ず  
保護色に染まって自分見失う  
深呼吸して玄関のチャイム押す  
四分六の妥協わたしに運がない

尼崎市 鈴 木 良 征

少しエッチな話を聞いているベンチ  
自分より年寄りばかりの遍路笠  
土壇場で挑発的な薄化粧  
人生はたった一度の出会いから

東予市 小 山 悠 泉

お隣の朝顔うちの垣で咲き  
見習いのバイトの方が良く動き

まだ燃えるもの有り父が髪を染め  
良い事だけ聞ける補聴器欲しくなる

広島市 中 村 要

命中の悪い火縄銃持っている  
ああ痛い自分の影を踏んじやった  
三年目やめ暮しも艶がでる  
ピンタぐらい恐くて女房と暮せるか

羽曳野市 福 田 満 洲

意地の芽をママ摘まないで摘まないで  
後任がなくずると引っ張られ  
釣竿に傾くうちは大丈夫  
不器用をあばく切手の歪みよう

静岡市 小 木 久 子

学校を休んでも塾休まない  
目覚しと戦っている朝の床  
帯きりり締めて女は決意する  
青春を振りかえる時浮かぶ顔

鳥取市 美 田 旋 風

美人画に見とれて妻にこづかれる  
お喋りが過ぎて上げ足つい取られ  
サスペンス終りがちよつと物足らぬ  
本当のことを話して叱られた

宇部市 中 村 三 良

円周率に浴け込むような酔い心地  
フィクションの中で回って独楽は病み

切り返す言葉覚えぬうち別れ  
雑音を耳にするから目が霞み

八尾市 榎山 隆

屋上が旨いジョッキの候となり  
当番で町内会の顔ができ

送料に代えぬ故郷の土の味  
美しく年かさねたいわが終章

香川県 木村 明人

露天風呂月にオツパイ覗かれる

噴水に緑映して涼しそう

正論を控えて今日も恙なし

きらいではないのかやっぱりついて来る

貝塚市 池田 寿美子

それなりに挑戦してみる夏帽子

廃線にみどりの風は物語る

ブランドより中味しっかり詰めておく

城跡だけロマン溢れる風の彩

寝屋川市 井上 すみれ

アドリアの笑いもう無い寛美逝く

越し方の女二人の運不運

朝市の老婆の素顔美しい

亡き夫に見せる仏間の衣替え

岐阜市 渡辺 杏村

年金はあてにしないで踏むペダル

ジュースより谷間の水がノドに合う

花火する孫の額に天花粉  
一本のビールで酔って孫と寝る

吹田市 西岡 豊

足痛が明日の天気をよくあてる

見つめれば見詰め返してぬくい風

天高く夢を抱いて行く任地

後進に道を譲れと何ぬかす

新潟県 高野 不二

父の日を自分で祝う破目になる

ワープロは変な漢字を知っている

七日分の薬七日に呑み切れず

年金へ切りかえ出来ぬ交際費

和歌山市 堀畑 清子

君の手のカード知りたい恋ゲーム

整った針目続いている暮し

新しい絆が増える披露宴

最前線で私守ってくれる人

熊本県 高野 宵草

風紋を画くまで砂がはねまわり

信号のウインクで急ぐ足もつれ

禁酒したら冷める友情だったのか

童心を還すお焦げのあるご飯

尼崎市 佐野 六浦

地藏盆赤い前掛け着せてある

恐い話解凍せずにしまい込み

同窓会想い出のある青い恋  
ぐるぐるにもつれて回る洗濯機

尼崎市 明 壁 敏 之

飾りばえしないが鏡ばかり見る

寡婦独り坊さん説教長くなる

茶漬食う箸の音まで父に似る

長話大事なことを聞き忘れ

尼崎市 中 澤 向 西

花博に安全帽がほしくなる

振り向けば別れの駅に手が見える

並んでもこのパピリオン見ておこう

気が付けばいつも歩いた慣れた道

静岡市 宇 佐 美 寿 美

ペコニヤの赫いいのちに息を呑む

忘れない亡母のことばに道がある

着飾ってみても消えない胸の傷

年ですとささやく赤いイヤリング

鳥取県 石 谷 美 恵 子

新人の切れ味垣間見た焦り

姿勢よい人で相談したくなる

かんにん袋紐がときどき切れたがる

やり場ない怒りピカピカ鍋磨く

三木市 岡 本 蛮 拙

賢くもないのに馬鹿にもなりきれず

見送ってホツともするが淋しさも

平成も二年半ばで書き馴れる  
OBが汚す社内誌川柳欄

寝屋川市 北 岡 波 留 吉

無為徒食避けて長寿に感謝する

ためらわず人前で妻褒めますか

更年期とあきらめて聞く妻の愚痴

満願へ仏といっしょ遍路笠

米子市 足 立 由 美 子

息とめて人形の目を描いている

眼球を洗いきれいな物を見る

時刻表も仲間に入れて旅に出る

堺市 山 本 半 銭

御先祖も不器用だった修理痕

女房をさん付けで呼ぶ気の弱り

うしろから黙ってぐいぐい押し来る

鳥根県 高 野 律 子

欲のない地蔵の好きな童唄

善玉が勝って枕を高くする

赤い爪虹を追っては帰らない

米子市 新 正 子

せみ取りが好きでひまわりよそ見する

欲求不満赤い車に決めました

プランだけ立てて休みの日がくれる

和歌山市 森 茜

頼まれて咲いているのじゃありません

買い控えしてもいらぬものが増え  
よくしゃべるお人の耳はうるさかろう

京都市 小林英子

遠巻きに注目されている噂

面影を拭い切れない海の蒼

花博の昼たこ焼と生ビール

富田林市 大澤三四子

穴のぞくほどでもないが興味あり

晴れやかな門出に蝶が一つ舞い

愛の玉投げ損ってまだ独り

岡山市 森下正子

バックミラーの景色見事な古里だ

婆ちゃんの睡で撫でればなおる傷

極楽へ行きたく法話聴いて居る

熊本市 黒田緑

情熱のおもむくままの乱れ打ち

一線を引くペン先は物言わず

皿割って老いは深まりゆくばかり

豊中市 田中道胤

やせたのと違うか嫌なことを言う

棒グラフ情け容赦はしてくれぬ

網棚に残して帰るスポーツ紙

大阪市 今西静子

なつかしい方言をきく夜が更ける

洗濯もの干すにも女見栄を張り

しあわせのまん中旅を誘われる

鳥取県 西川和子

悠悠自適ビデオカメラに夢中です

五十段登って村の歴史知る

嫁った娘が稲の出来など気にしだし

弘前市 肥後和香子

一年中エイプリルフールの我が暦

カルメンとなるには暑さに弱すぎて

寝顔だけ美しいなんてどうしましょう

鳥取県 太田幸枝

店員の笑顔を買って来るつもり

青春の夢が続々消えて逝く

突き放すことも薬として娘

高槻市 芦田静江

共に絵を画いた友逝く風の中

定年に威厳なくなるシテとワキ

寡婦の生きざま歎くささに慣れてくる

鳥取県 乾隆風

ライバルに一步譲って風を待つ

ジュニアの瞳が立小便を見てしまふ

リハビリで首吊りをする五十肩

八尾市 向井しづ子

残してよお田植まつり田毎月

ひと足をあとかから行きたい洗濯機

水足りて咲かぬ花ありくたびれる

島根県 菅田 かつ子

忙しかった忙しかったと膳につき

白髪になってもたんぼぼすましてる

思ひ出をたどればどれにも亡母がいる

岡山県 江口 有一朗

わたくしのメニューで生きてゆく余生

息切れをせぬよう己の歩幅決め

きれいだが無駄も包んで包装紙

藤井寺市 菊地 繁 男

一步二歩遅遅ではあるが千里行く

仏飯を拝して頂く齡になり

町内で有名人と住む誇り

和歌山市 北山 好笑

夜店見て金魚抄いをしてみたく

民宿の浴衣案外似合ってる

水打って郵便受をのぞいてみる

尼崎市 吉永 伊三郎

七階に住んで回りの庭楽し

ルーブタイ退職記念にくれた女

靴を脱ぐ義理は聞かない臍月

鳥取市 松本 伊都子

スーパードで一時凌ぎの汗が引く

窓磨く心の憂さが晴れるまで

孫の絵はおしゃれなママとチューリップ

寝屋川市 河合 時 弘

夢のある方の引出しだけ開ける

夢のように扉が開く孫誕生

汗の滴る音を心で聴いている

熊本市 北川 一進

三人も寄れば何んとか出るも知恵

スプーンがカレー待ってる子沢山

筆を持つ事から習う習字塾

熊本県 岩切 康子

接点が決らぬままに電話切れ

自損事故犬にたてつく未成年

幸せとばかり思つて居りましょう

兵庫県 酒井 靖子

年金の幅で笑いの音をたて

忍一字追いかけてごっこの中にある

打つ釘が女と見たか曲りかけ

砂川市 大橋 政良

プライドを捨てたら拍手してやろう

尻もちの跡に居座ることにする

そしられる言葉補聴器などいらぬ

今治市 渡辺 南奉

似合ったら困るダイヤを指して見る

重い重い鎖で世帯主と書く

平凡なドラマみそ汁から開ける

枚方市 森本 節子

今日の子定こまごま組んで朝の床

遅ればせ嫌いな牛乳のんでいる  
降る雨が与えてくれる安息日

佐賀市 古川 一徳

神に祈るときも仮面はつけたまま  
美しく老いよと傘寿へ無理を言う

子に仕事譲り財布は譲らない

鳥取市 岩原 喬水

人生譜活字に残す古稀迎え

孫が来て裏話までつい喋り

古稀祝う今日の白髪が美しい

京都市 渡辺 圭坊

早く着き長逗留の梅雨の雲

紫陽花と女は雨に艶を出し

絵一枚一二五億の富める国

神戸市 岩田 信義

頂上に登れば消えてしまふ虹

嫁き遅れの娘が赤い服を着る

心棒を換えて水車が回り出す

豊中市 三宅 つえ子

朝の公園噂も早い市場籠

予定表作って遊ぶ齡となり

病む友の植えたヒマワリ花開く

静岡市 浅子 まつゑ

小さくても花は笑顔を絶やさない

ゆっくりと湯舟にひたる終い風呂

肩書きの自慢ばかりで嫌われる

鳥取県 美浦 美代子

青葉風受ければファイト湧いてくる  
むなしさが積もりポケット重くなる  
伸び縮みやさしく強い母の紐

大阪市 家村 高雄

眩しそう背広姿の初出社

看護婦に冗談言えて退院す

省エネのポスターのある日本国

旭川市 朝倉 大柏

父の独楽回り切っても止まれない

後のない位置でやたらに競わない

無人駅降りて訛りの風に会い

米子市 中井 ゆき

影法師はなれてほしい時もある

思慕の風おさまらぬまま朝になる

川下りして大阪が好きになる

鳥取市 前田 一枝

待つ人の来ぬ席残しそつと出る

はぐれ鳥バスの乗り場に待って居る

父の日の亡父に手向けたコップ酒

泉佐野市 真崎 浪速子

茶柱に今日を占う朝を出る

目が冴えて眠れぬ耳にある噂

叩かれて売れるバナナが知る運命

鳥取県 中村 幸代

水泡がひとつ熱帯魚のなみだ

枇杷ひとつふたつ転げてガラス皿

一通の便り書くため旅に出る

青森県 波 ただお

父のない子にも父の日やって来る

空青し俺の心も澄んで来る

潮風がカーテン押して部屋に入る

堺市 井上 たかし

身内より先ず御近所と核家族

二枚舌一寸使うて丸く生き

台所芋が芽を出す妻は風邪

大阪市 小糸 昭子

野球帽かぶせて孫の顔丸し

糞虫のぶらり人生それもよし

苦労したしたと言う程顔に出ず

和歌山市 谷口 信子

わび さびを知らず利久の饅頭たべ

原稿のいらぬ話がよく続き

どくだみも薬と見れば美しい

川西市 野村 静雄

男はずるいやけ酒を飲んで寝る

そっぽ向く仕草に女熟れている

空襲の話で通る月明り

出雲市 伊藤 寿美

古里は笥をかえず山がある

ひとり言いう過疎バスに乗り合せ

羽根布団もらい米寿の夏の汗

鳥取県 上田 俊路

言葉にはならず涙で訴える

真相を知りすぎたので語れない

まわり道しながら二人結ばれる

田辺市 染道 佳明

近頃のドリンクとやらを飲んでいる

銀行とスナック同じ笑顔だな

大掃除息子が彼女連れてくる

青森県 福士 トキ

熟れるのを子供のように待っている

切株に腰をおろして夕日見る

眠れない夜中を孫の寝言聞く

広島市 名和 喜一郎

とりあえず電話ですますほどの義理

バーゲンへ入った妻を待つ本屋

凶星とはいえぬがはっとさせられる

鳥取県 中藤 俊子

よく曲る自家菜園の胡瓜茄子

歯が痛み隣の寝息腹が立ち

猫のため玄関少し開けに起き

大阪市 亀井 円女

いらいらを亡母にぶつけて軽うなり

信じ過ぎ火傷しながらこりもせず  
お委せてポックリ寺へは行きませぬ

岡山県 土居 ひでの

女にして置くには惜しい度胸秘め

鬼のような父で人格者と他人は言う

女に生れて女の倅せひとり占め

唐津市 福島 紀一

あじさいが今年も同じ位置に咲き

狭い庭あじさい大きな輪を作り

手をやればかぼちゃの蔓も素直なり

鳥取市 武田 帆雀

魅せられて菊十年の手際よき

花芽から曲るきゆうりの不仕合せ

弔問が苦手で頭ばかり下げ

川西市 田中 善俊

文鳥も留守番と知り巢に入る

スケッチもそこそこ喋る友と居る

画友だが紫陽花寺で喋るだけ

兵庫県 奥野 テル

肩の荷がおりて夫婦の灯を囲む

帯きりり明治の母を持つ誇り

寿司食べる満八十の誕生日

鳥取県 西原 艶子

念を入れおしゃれたのに見てくれず

ペアウオッチ別れのときも刻んでる

タイムリミット時計は遠慮なく刻む

岡山県 後安 ふさえ

いつの間か孫が上位の筆の塾

仲人を慌てて頼む岩田帯

人情のかけらも持たぬインタビュー

寝屋川市 宮崎 菜月

オバタリアン伝達能力だけ優れ

お土産は現金がいいと言う次男

全身を消毒したい日もあって

姫路市 福本 好花

寡婦なりの寄附金出しておつき合い

新入生みたいに並んだねぎ坊主

子育ての秘訣聞きたい野良猫に

吹田市 廣屋 利通

言い返す言葉に耐えた丸い背な

目で合図妻は黙って目で答え

貫禄が明日に延ばせぬ他人ごと

広島県 森川 抜智

四ツ葉のクローバー見つけたおばあさん

またあした来んしゃいよと女医やさし

検査の結果はお酒の飲みすぎだった

鳥取市 谷口 侑里

鳴る浜が運動会の輪を広げ

産声に十月十日の苦勞消え

夕顔が咲いてときめく夜となり

条件がつくと話も複雑に

鳴門市 八木芳水

定年の欲ふるさとの土地を買う  
街の灯が遊び心をそそのかす

島根県 加本義良

七十路いい負け方を心得る  
小さな気まま年金の枠の中

静岡市 永倉柳華

花博が待ってたようないい出逢い  
花束を頂き涙出て困る

姫路市 谷清柳

新曲を覚えカラオケ好きになる

時刻表と地図を見くらべ夢旅行

日雇いの雨は酒盛りあみだくじ  
にわか雨座り直した縄のれん

八尾市 片上英一

眼鏡ごし鄙びた町の古本屋  
カラオケと酒で埋めている余白

守口市 森川春子

遠来の客ともかくも花博へ  
菖蒲園写生見ていておそくなり

お土産を持たないブザーはゆるくおす

鳥取県 黒田くに子

気短も男らしいと惚れている  
公約を誓う饒舌聞きあきた

ふと聞いたうわさがやがて胃にたまる  
大阪狭山市 桜井莊次

度忘れの顔がなつかしそうに  
饒舌な雀が群れてくる噂  
尻ぬぐいばかりしている親の脛

出雲市 森山健歩

行政が悪いわると努力せず  
粗飯でなどと豪華なメニューなり

お粗末な事だと自信作見せる  
静岡市 中西雅

置物をギヤマンに替えて夏を呼ぶ  
甘い風苺ハウスの店じまい

女生徒の衿つっぱった衣替え  
岡山県 福原悦子

山菜の露を煮込んで亡母の味  
草笛を吹いて少女の日に戻る

絵羽織に亡母の追憶温め合  
静岡市 増田扶美

飾りない言葉がつなぐ山の宿  
夏服の身軽くなって忘れもの

目の保養だけですまない無駄を買う  
箕面市 中嶋民子

五分五分にしてから水に流します

五分五分にしてから水に流します

五分五分にしてから水に流します

五分五分にしてから水に流します

敷かれてますなどと男の処世術

仕舞風呂激しいものが消えてゆく

藤井寺市

武部 敦子

五月晴ふとん干すより花博へ

毒舌をはいて胃薬のんでいる

土壇場でへそくり出して祖母達者

藤井寺市

中島 志洋

父の汗知らずに遊ぶ七光り

楽々と肩書が付く七光り

こつこつとバイトで貯めて空の旅

十和田市

阿部 喜久江

大の字に孫が寝て居る兎小屋

息抜きに妻とでかける小さい旅

長い髪恋に破れて切り捨てる

枚方市

中山 おさむ

大過ない現役を退き顧問職

ママさんの趣味へ乾杯しておこう

旅馴れた切符が仲間連れてくる

今治市

和田 宏

カラオケのドアを開けるとはしけ出し

一と晩の野心を見抜く宿の下駄

決算期熱いコーヒーばかり飲む

枚方市

山崎 彩子

麦わらを焼く煙にバス包围され

許されよ絵筆持つ間の家事手抜き

満ち足りて洗濯物も高く干す

丹念に繕う足袋の温かし

手ぶらで寄り泊って土産まで貰い

牛売った日の晩酌はほろ苦い

岡山県

杉本 伊久栄

思案して吹かす煙草の輪の行方

たとえばの話我が身を責められる

合格を祈って千羽の鶴を折り

唐津市

野田 旭恒

二番風呂呂肌によく乗るシャボン玉

エピソードなど語り合う一周忌

リハビリの杖に縋って一歩二歩

和歌山市 前田 美子

本音しか言えない父の回り道

いつの間に息子の意見聞いている

水やりにこたえてくれる花盛り 静岡市 三浦 つね

今日だけはゆっくりしたい誕生日

ストレスを吸ってくれるバラの花

火傷せぬ程度に孫の世話をやき

唐津市 野崎 ハル

食えぬ人あるに他国の人が何故

種まけば厭な雨でも心待ち

ひも持てばゴム風船の立ち上る

よく学びよく遊んだら寝る間ない  
インテリが崩れて開く書店です  
花博で妻気前よく金を出す

よく学びよく遊んだら寝る間ない

豊中市 滝北博史

生真面目が過ぎたひとりが笑わない  
公園の広さに孫をもて余し

広島市 森田文

満月へ祖母は正座をして拝む  
あらぬこと悪女になつて言いふらし

静岡市 片平静代

見え隠れする話には耳を立て  
おしゃれた妻と出かける今日は晴れ

米子市 小塩智加恵

貧乏になつても仲の好い夫婦  
野良猫と駆け落ちをしたうちの猫

大阪市 山北三三三

預金帳の数字たのしむ老いの坂  
方円の水の流れて世を渡り

岡山県 中嶋千恵子

トランプのように貯つた診察券  
運向くと不協和音となる隣

藤井寺市 楠昭子

弁当も美味しいと言ふ五月晴れ  
葉よりよく効く孫の笑顔かな

大阪市 乾哲静

雑巾もしゃべればたんと意見ある  
人生はでこぼこ道が多すぎる

鳥取県 伊吹富恵

見なれない雑草 外国かも知れぬ  
天気がいいと畠へ出なければ

鳥根県 今川三津子

喧嘩にもならぬ夫と三十年  
初孫にいくつも虹をかけてみる

富田林市 楠美子

紫陽花が一雨ごとに味を出し  
三叉路で夏の気配を肌を受け

鳥根県 松本聖子

どこがどう変つたのかと時刻表  
仏像へ語りかけるも孤独性

橿原市 西本保夫

捕まっただきっかけ金の使いすぎ  
社則にない副業で儲けてる

河内長野市 岡崎実

一言が火種をいつもつけている  
石なげて心の波紋大きくす

鳥取県 浜田民子

珍しく約束時間に來たら雨  
髪切ると皆好奇心で理由問う

守口市 福本勝美

病院で家号呼ばれた初対面  
水たまり石の地肌はすき通り  
泉佐野市 大工 静子

泥んこで遊ぶ子の顔いきいきと  
足腰は立たぬが口はまだ達者  
岡山県 牧野 秀香

風船がいつ気にかかる梅雨晴れ間  
地上げ屋が隣の空地下見する  
鳥取市 西村 黙光

四面楚歌自分の影に語りかけ  
こっちもピンチなのに隣が借りに来る  
鳥取市 森山 豊子

転宅の荷に置薬も持って行き  
土地売って建てたで誰も褒めぬなり  
羽曳野市 麻野 幽玄

修飾語に伏せた本音はわかるまい  
鉢植えのバラ観賞の目に耐える  
岡山県 大石 あすなろ

グーの拳パーに開いて妥協する  
変人の気持変人よく解り  
秦野市 三原 浮木

人なつこい顔につけ入るセールスマン  
ストレスを吐き出している煙草の輪  
唐津市 浜本 治幸

大阪市 川原 章久

倉ざらえ瀬戸物町に夏が来る  
道行の舞台に紙の残り雪  
寝屋川市 豊福 路子

参拝の途中で消えてゆく迷い  
先生に丸もらつてるおばあさん(習字)  
鳥取県 大角 正道

今日もまた泣き笑いた陽が沈む  
否定する言葉がやけに気にかかる  
鳥取県 渡邊 伊津志

夢多く抱く娘は胸がふくらめり  
灯台のレンズ怒濤の景に馴れ  
今治市 幸家 單車

肩書きがとれるとファイトまで捨てる  
風ぐ湖に小石を投げるファイト出す  
鳥取県 近藤 秋星

女の子おんなの声で返事する  
聴診器当てて聞きたい君の胸  
鳥取県 野口 重富

転勤の家にも運ぶ庭木掘る  
着てもらう夢うっとり毛糸編む  
茨木市 藤井 正雄

この寺でお昼とします歩こう会  
薬局で見かけた父さん母の風邪  
鳥取県 武田 照女

考える事に疲れた重い腰

身代をつぶしシナリオ出来上る

八尾市 松本 芙美子

この煮物おいしいねえと夫いう

母の日にもらった小遣いつかえない

芦屋市 根来 敬

糸をひくひと居るらしいごねている

解きはぐす糸口のない気の焦り

島根県 渡部 好栄

かた言の孫が反抗してみせる

苦も楽も抱いて昼寝もしています

鳥取県 中西 智恵子

招かざる客へふるまう夏祭

夕方へ隣と結ぶ蜘蛛の糸

竹原市 古田 比呂子

あじさいが咲くから梅雨も少し好き

命ふつつ暑き日のビール

米子市 小西 五十鈴

邪魔になる振り子時計も捨てがたし

久し振り小さなおしゃれ紅を買う

大阪市 清水 絹子

糊ついた夫のパジャマを平手打ち

桐箆筒のしみはおんなの夢のあと

熊本県 増田 一乗

水しぶき車を避けてちぢこもり

歩く身に年々道は狭くなり

寝屋川市 坂上 高栄

お天とう様今日も平和に暮れました

おばあちゃん九官鳥に返事する

富田林市 浦田 トシエ

母猫が子猫呼んでる五月晴

鉄砲節聞いて憂き世のうさ晴らし

奈良市 井上 大

人込みに酔うてるうちに通り抜け

街に住む田舎育ちの子を案じ

鳥取県 石尾 かつ乃

伝説を池の底から釣りあげる

花の鉢一さげずつの店開き

唐津市 山口 ふさ子

糞度胸男が男に惚れさせる

有休を使いきれずに退職し

富田林市 山原 昭水

織田作が食べたカレーの店に行く

行李から海軍少佐の父の服

愛媛県 藤本のふ夫

飛機内の産気外科医も医者である

かまわんでくれと十五の春秘密

高知市 山崎 一求

桂浜水平線は弧を描く

夜の蝶柳に風と受け流す

初孫に確かに自分も棲んで居る  
泣いても大物ですよと祝い客  
廣島県 岸 田 武

王将の逃げ場ふさいだ歩の手柄  
箕面市 岩 津 ようじ  
役付きのうちにと急かす子の挙式

藤井寺市 田 中 孝 子  
葱刻む朝俵せと思う幸  
借りた傘干して慕情をたたみこむ

羽曳野市 徳 山 みつこ  
満たされて夢は段々小さくなり  
夏帽子とって仁王の口仰ぐ

泉南市 坂 根 流 水  
米ソ会う強いだけでは生きられず  
旅に出て殿様気分一日で

南国市 窪 田 和 広  
脇役を悟って芸が生きてくる  
職安へ行くのに靴を揃えられ

岡山市 後 安 江 山  
感謝しているのに言えない有難う  
病みてなお友のやさしさしみる日々

鳥取県 山 本 正 光  
柄にない言葉上手な手紙書き  
祭り酒今日は他人様気兼ねせず

鳥取県 木 下 芙 葉

地図見ても死出の旅路の道はない  
蹴られてもついて行きますうちの人の  
八尾市 橋 本 信 江

類似点求めて和む嫁の仲  
子を脇に抱えるママのエネルギ―  
鳥取県 中 居 武 士

熟年も朝のおしゃれは欠かさない  
長生きも八十までと予算組み  
鳥取県 田 淵 みつ子

合格の知らせを孫よアリガトウ  
紫陽花の美は雨ごとに人を恋う  
相生市 中 塚 礎 石

一日の時計のねじは妻が巻き  
割り勘の銚子の尻を撫でてみる  
静岡市 大 神 静 枝

五日間を幼なじみと時計草  
負けて勝つ忍の一字に春を編む  
大阪府 尾 崎 黄 紅

粉骨碎身七つの仮面泥だらけ  
自分史のどの頁にも酒のあり  
東大阪府 大 平 太 一 郎

風船も白熱に酔う巨神戦  
初孫に励まされもして長電話  
兵庫県 西 脇 富 美

隣家から笑い声のみ聞えて来

床開き加茂のかもめは北帰中

鳥取県 今本早苗

好きですと短い文で熱くなる

真似できぬ一生だからおもしろい

米子市 服部朗子

朝夕の祈りにこめた願い事

玄関で小粋な花が待ちうける

鳥取県 久野野草

新じゃがのコロッケ老母の口に合い

夜風に軽い財布の気が重い

大阪市 平井露芳

フルムーン謙さん残し一人旅(高峰三枝子さん)

年金のくらしもマル優監視され

唐津市 池田遊女

一度でいいあげまんじやった言われたい

子の姿つらつら見るに親の影

鳥根県 福岡博利

お言葉が強くなりすぎても困り

有線が途中で黙る朝の五時

八尾市 橋本龍典

短夜に遠く近くに音頭さき

盆踊りあつあの方も輪の中で

八戸市 島田昭治

学校田子等いきいきと田植する

仮面つけ上司の機嫌とる男

松江市 原長三

素通りがともうれしい夏の風

ふぐ料理だされて迷う箸の先

大阪市 清水利武

油絵の中の女は誰だろう

土地高騰町に空地が此処彼処

鳥根県 岩田三和

まだ一人見えない山で働く子

ひとり住む柿の木によく日があたる

静岡市 大村正雄

山積の仕事キャリアが物を言い

付焼双聞かれて天狗の鼻が折れ

静岡市 大石たき

京の味送ってくれた嫁やさし

フルムーンこれが最後と空の旅

岡山県 福原辰江

浮き足が誰の説論もうけつけず

いつまでも胸にほのぼの母の唄

大阪市 武田昌三

地下街の迷路いそいそ妻を追う

あの世でも笑い袋を解く寛美

唐津市 入江喜久亭

旅先で孫への土産買い溜める

達筆な祖父が中気で字にならず

大阪城で藤ノ木展を観て

豊中市 額田明吉

五世紀タイムスリップ浪速津の栄

スポットに輝く冠帽古代識る

静岡市 青柳金吾

異常なし心晴々 検診日

旅の妻ガス栓締めてと電話来る

東大阪市 松山隆

砂浜に下駄跡追って昏れかかる

記者達にゴロ寝をせよと休刊日

池田市 林すて

花博を一日歩き疲れ果て

友帰り又も一人のむなしさよ

唐津市 山下剛司

雨あがり目にとび込んだ若葉かな

ゴルフ場ゲームの合間草むしり

大阪市 森崎忠祿

その昔互いに惚れた粗大ごみ

家中を吸い込むように泣く赤子

島根県 兒玉幸子

垣根越しみかんの花の匂う朝

どこからかみどりを縫うてホトトギス

鳥取県 山内芳江

嫁姑名を呼び合つて和を保つ

金積んで重い罪から逃れてる

升酒が決断させて口を割り

花束が泣いて笑つて宴締める

鳥取県 中澤正志

いい女小指はなして箸を持つ

財あるを鼻にかけての絵あさりは

池田市 岡本吉太郎

逆効果教育ママが芽をつぶす

減反の上に借金までつもり

◆ジュニアの部◆

鳥取市 加藤二代

方てい式なんにつかうのこんなもん

先生の顔はホントに百面そう

土笛を造つて今日は古代人

尼崎市 新井晶子

月曜日さんさん寝たのにまだねむい

制服が身について来た二か月目

大阪市 福西範子

川柳塔鹿野みか月結成10周年記念大会

日時 11月11日(日)午前9時開場・11時締切

会場 鹿野町営国民宿舎 山紫荘

兼題 逞しい・野心・姉妹・辻・旅・訛る・劇・

さむらい

(次号に詳細を発表します)

—水煙抄

# 秀句鑑賞

—前月号から

森田熊生

酸性雨ポストは今日も耐えている

中尾 まゆみ

電話一本すれば何でも済んでしまう現在ですが、私たち川柳作家にとつて毎月の投句にも必要なのが郵便である。自然破壊が問題になる酸性雨にも耐えて立っているポスト。秀句を作って投函したいものである。

こんなところにも心を遣って逝つた母

藤井高子

小さなことにもよく気が付くお母さんだったのでしよう。自分もお母さんの年齢になつて、お母さんの小さな心遣いがわかるようになって来た。そんな思いが感じられます。

どの子にも水位合わせる母の池

児玉歌子

欲を言えば切りがありません。出来る子も出来ない子も、素直な子も、反抗期の子も、どんな子供でも愛情いっぱいのお母さんは、子供に合わせて見守っているのです。

ひと色が足りないままに愛を盛る

宮武まつ女

本当の愛情とは、少しもの足りないもの。その足りないものを二人で育てて、すばらしい虹を描くこそが大切なのです。

こみ入った話に酸素薄くなる

流 奈美子

うまくまとまって冷えたビールでも飲める話ばかりならいいのですが、時にはとてどもみ入ってまとまりそうもない話もあつて、話しながら思苦しくなってくることも。お茶でも入れ替えて解決策が出るまで話し合つてみてはどうですか。

ルビーには縁のない指いちご摘む

木下道子

指輪などはめたことのないお母さんの荒れた指だけど、ルビーにもまして真赤に熟れたいちごを摘んでいるお母さんの指は、とつても美しいと思います。

土壇場の運命線を太くする

西浦小鹿

土壇場まで来てはねのける底力は、何にも負けない強い根性でしよう。そんな力を発揮することができたあなたの運命はこれから延びていくことではしよう。

縄電車降りた見つかからぬ

高田美代子

童謡を唄いながら夕焼けの道をいつまでも走っていた縄電車。みんなが運転手で、車掌

で、お客で、私たちの心の中で終着駅のない縄電車は今でも走り続けているのです。

とつときの笑顔で丸く逃げられる

大橋政良

腹を立てていたのに、とつてもうまく逃げられてしまった笑顔。中七に使つた「丸く」が生きていやみのない笑顔に、思わずこちらまで笑ってしまったようです。

他人から見ればいうことない同居

古川一徳

息子夫婦と同居しているんです。他人から見ればとつても併せに見えるのですが、そこは世代の違いもあつて、いろいろ問題があることではしよう。

風の子が広場に居ない塾通い

阿倍喜久江

子供は風の子、少々寒くても、夏の暑さの中でも走り回つて遊んでいたのは昔の詩。塾だ塾だと追われて風の子になれないまま成長させていいのだろうか。

敗者復活再就職の靴磨く

小山悠泉

平凡な下五「靴磨く」ですが、「敗者復活」とうまく表現してこの句が生きました。

これ以上息抜きしたら負けになる

鈴木良征

人間にとつて息抜きは必要です。でも息抜きが過ぎるとマイナスにもなりかねません。その限界を知っている作者は併せてです。

# 句評リレー

四・五・六月号から

吉川 寿美  
中原 諷人  
野田 素身郎  
金井 文秋

続編へ塩少々が効いてくる

松原 寿子

**寿美** 女の一途な愛を詠みあげられる寿子さんの句を楽しく拝見しますが、その恋の続編は甘いばかりでない、男女の機微を詠まれたのでしょうか。塩が効きすぎるといろいろ葛藤も出てくるでしょう。「塩少々」が生きていると思います。

**諷人** 食生活で塩加減の少々を蓄積加算し青春期を次編の壮年期へ。高血圧や脳溢血への恐怖心。しかし、母業を奮進する中での塩少々とくれば父母からの隠し味だと解する。この作品で恋を想するのは冒険。如何か。

**素身郎** 人生の続編か、恋の続編か。いずれにせよ、これからの時の流れの中には、そういう良いことばかりはないという警鐘か。寿美

さんの言われるとおり、「塩少々」が生きている。

**文秋** 三十代は努力の時代、四十代は忍耐の時代と言われている。二十代の甘い愛だけでは生活ができないことが分かって来たのでしよう。隠し味までは、私には感じられませんが…。

**寿美** 私はやはり人生の、男女の機微を詠まれたと思いたいのですが、冒険でしょうか。「隠し味」と表して叱咤激励の意を申してみ

ただで、作者をよく知れば恋と領けるのかも…。「効いてきた」と詠めば、仮定形から過去形ながらも、事実として作者の実感を得られるようになると思っただけが…。

**素身郎** 続編としての作者の川柳に、「塩少々」が効いた句を期待したい。

**文秋** 作者を知れば、愛情の句ととっても不自然ではありません。また、人生の中へ愛

情も組み込まれて行くものだから、塩少々を効かさねばならないこともあるでしょう。時には親から譲り受けた隠し味も生かしましょう。

美しいラベルで一人罫に堕ち

林野 甞 光

**寿美** 原野商法のように美しい商品に警戒しながらズルズルと堕ちてしまった悲惨さを嫌味なく詠んでおられる。川柳に惚れ直しました。

**諷人** 「一人罫に堕ち」とは作者自身であろうが、この作品に人数表現の一人は気になつた。強いて詠むなら「独り」の味を念う。「……で……に……」として堕ちた悔いの説明句に終っていることを惜しみたい。

**素身郎** 「美しいラベル」を女性と解するのは考えすぎか。そのように解釈できたから面白い。私は「一人」と具体的に表現した方が、締った句になると思う。なお「堕ちる」か、「墜ちる」か。また、罫に「墜ちる」というのか、「嵌まる」というのか、一考を要する。

**文秋** 私は女性と解釈したい。後添いを捜している重役級の男性を何人も手玉にとった話が紙上を賑わしたこともあったが、それにして一人と限定した言葉が少し気になる。

**寿美** 私は「……で一人」はまた一人という

意味で詠まれたと取りました。そうであれば「墮ちる」でよいのではないのでしょうか。「独り」にしますと句意が全く違って来ると思います。この句は人間の性のやるせなさを詠んでおられると思いますが、如何でしょうか。

**諷人** ごめんない。「墮ちる」は「墮ちる」の誤記で原句を尊重。そこで本論として寿美さんの言では、また一人にんげんの性から嘆きともなる。女性という解釈は面白い。「……でも」「一人」も拘りは続く。「美しいラベルの罫に嵌められる」如何か。

**素身郎** 私はやはり「一人」としたい。また、「罫に墮ちる」は気になる。

**文秋** 寿美さん評のまた一人の意味は分かりませんが、できるなら諷人さんの例句のように、一人を使わない方がよいと思います。昔からよく川柳に使われる材料なので。

### 下心ないからバラの花を買う

相馬 一花

**寿美** この句からホワイト・ローズを思い浮かべました。何の銜もない生き方をさらりと表現された手法に感じ入っております。

このバラには棘などないのでしょうか。

**諷人** マドンナ旋風の白バラなのだろうか裏腹に政府寄りのバラかも。下心の本音は？兎角、人間らしきもの狡くて怖い怖いものだ。

「……ないから」に続けて名指しされたバラの花、流れ句に通じるため迷惑がっている。

**素身郎** 平易な言葉と言ひ回して、私好みの句。「バラの花」を「白いバラ」とか「赤いバラ」とかにしたらどうか。私は、上の句からして「白いバラ」が良いと思う。

**文秋** バラは色彩によって花言葉が変わるそう。アレセントにする花束なら、色を考えねばならぬが、我が家の卓上を飾るつもりなら、下心もないし、色を考えることもない。あまり考えすぎず、生活の一餉として頂こうと思えます。鑑賞者の目に委ね、それぞれ句意を展開してもらってよいのではないのでしょうか。はじめに言いましたが、素身郎さんのおっしゃるように、私もすぐ白いバラを思い浮かべましたが…。

**諷人** ならば何故バラの花なのか？と尋ねたくなるのだが、拘るほど魅力なき作品と化して行く。好意に納得すれば文秋さんに同感です。卓上を飾る花だからバラを買うのである。そして芳香は放たれる。

**素身郎** 直感的に贈り物にする花束と解しバラの色に固執したが、我が家に飾るものなら、こだわることはしない。

**文秋** 選んだ花がバラで色にこだわらないのなら、バラを買うでよいのだし、花種にこだわらないのなら、花を買うでよいはず。バラの花を買うで三音の無駄使いをしている。

この三音をもっと有効に使えば、グンと透明度の増した句になり、句評者を惑わすこともなかったのに。初歩的なミスが惜しまれる。

### すぐ解ける謎を大事にしまつとく

正本 水客

**寿美** 愛しているならばこそ、大切にしておく男の方の懐の深さを改めて感じました。これを女性に置き代えたら、今時希少価値の女性像が浮かんできます。

**諷人** 人生に謎は多し。黄門様そうおっしゃらず解けた謎・解ける謎はできるだけ早く浅学非才な私たちに教え遺してくださいな。「大事にしまつとく」という大ベテランの言い分を「男の懐の深さ」と解すべきなのか。

**素身郎** 「解ける謎をしまつとく」のは、男の狡さか、処世術か、はたまた意地悪か。手慣れた手法の句。

**文秋** つれ合いの行動などに謎があってもすぐ追及などせず、胸にしまっておくんですよ。その方が平和ですから。この主人公は女性かも知れませんか。

**寿美** ドラマの広がる大先輩の句で、私の視野の狭さを反省させていただきました。素身郎さんの言っておられるように、処世術と受けとるべきでしょうか。

**諷人** 永田町辺りで聞こえそうな「呟き」

とも想わせる。大企業温存の謎？消費税の謎？核兵器持ち込みの謎？これら全てすぐ解ける謎のはずだが：大事にしまつてある。人間の性やはり聞いておきたく候。

**素身郎** 諷人さんの幅広い解釈に敬服。

**文秋** 諷人説、すぐ解ける謎のなぞ解きに感服いたしました。なぜ大事にしまつてくのでしよう。いざという時の攻撃材料とも考えられます。処世術の説も捨てきれません。海千山年の腹の中のように。広いのか、深いのか、それとも狡いのか、私には計れないものがあるようです。

### 私の中のわたしをせめぐ句読点

西人 幸

**寿美** 別の自分をクルルに見つめた自戒の句と受けとめました。浅学の私には読み切れない、もつと深い人間の性を見つめておられるのでしょうか。

**諷人** ころの内輪採めに句読点を打つ葛藤は、人それぞれ異にはするが必ず経験を持つはず。作者は長所の優しさと戦つたのかも知れない。体言止めも説明句となつていないので異議なし。自責の句は実感があり、好ましい。

**素身郎** 「私」と「わたし」で二人の私を表現したのはさすが。諷人さんの言われるよ

うに実感句と思われる。実感句は強い。

**文秋** 思つた事を何でも実行する私の中にものによつては優柔不断な、もう一人のわたしを見つけて自分を責めているのでしょうか。

**寿美** 先輩の異議なしに双手を挙げて賛成句読点という流行語を何の抵抗も感じさせない作句力に脱帽……

**諷人** 「私の中のわたし……」という作風は、記憶不備ながら少々古い感を抱かせた。しかし、誰もが一度は実感する本音として川柳塔のモナリザを聞く句読点は打ちたくない。「御身大切に！」と作者へ祈念して。

**素身郎** 内面的な事象を句にすることは、なかなかむずかしいが、この句の場合「私」と「わたし」で成功していると思う。

**文秋** 「私の中のわたし」に古い感がないではないが、下五の句読点で、すっかり拭い去っている。幸さんらしいいい句だ。

父の書齋にブリキの兵隊さんがいる

石川 侃流洞

**寿美** 昔気質の律儀なお父さまを言つておられるのでしょうか。それともご自身のことでしようか。それにしてもブリキの兵隊さんとは何とうまい言い表わし方だと思ひます。

**諷人** 武骨ながら温かみを持つブリキの玩具に静かなブーム再来。私も少年期に使用

しかし、ブリキの兵隊さん（中八）を比喩とするも父の書齋へ作者は何が言いたいのか。ブリキの兵隊も忙しいほどの流行語……

**素身郎** 「中八」に議論があり、絶対に容認しない人もあるが、私は差し支えないと考えている。先人の句にも、「中八」があり、芭蕉の句にも見受けられる。

**文秋** ブリキ玩具が幅を利かしていた時代の父の姿、おそらくは自分のことでしょう。「中八」は、リズム感さえ悪くなければ字数にこだわることはないと思います。

**寿美** 中八はできるだけ避けなければいけません。一字で句意の深さが変わることもありす……。諷人 しかし、推敲してみると、案外簡単に情性の中八は避けられるようです。父の書齋にブリキ玩具の兵がいる」と詠んだ句意の変化は如何か？素身郎さんは先人の句を例えられますが、蔓延るほどには中八を許してません。昨今なぜか多産です。

**素身郎** 「中八」については、文秋さんのご意見に賛成。もちろん推敲を重ねた上でのことではなければならぬが。

**文秋** 諷人さんの言われる「ブリキ玩具の兵がいる」では、中七になつても言葉に親しみが持てない。中八になつてもブリキの兵隊の方が、父の姿とブリキの兵隊さんがダブつて見えて、父の性格までが浮かび上つてくるように思ふ。



## 海は怖いが好き

嘉 数 兆代賀

たしか六、七歳位の時の記憶だと思えます。母とボンボン船に乗って、岡山から帰っていた時、船が浅瀬に乗り上げたとかで動かなくなりました。船には水がぐんぐん入ってくる。船員さんはいろいろと策を練られたが駄目。夜の海に飛び込んで救助を求めに行かれたとか。ギツチラギツチラ槽の音が聞えてきて、その小さな舟に乗せられました。

外は冷たい風が吹いていました。母はどうにもならぬ時は、腰紐でも私を背負って海に入ろうと思っていたと後で話していました。私は積み重ねてある荷物の上にチヨコンと心細い思いをしていたことを今もはっきり覚えています。大正初期の頃、勿論、タクシーも電話もない夜道をどうして帰ったのか、そんな記憶は全然ありません。

私は海が好きです。淋しい時、哀しい時、

海の大きな心になぐさめられ、励まされてきました。小高い丘に登って「オーイ」と叫べば、海が返事してくれるようです。渚に佇てば海のことばが聞こえてきます。夏休みなどの楽しい思い出、あの頃の真帆片帆の姿は、時代の流れの中に消え、今はヨットが青春を謳歌するように走っています。こんな大自然の息吹きの中に生きつづけている海こそ、私にとって大きな魅力です。

そんな大好きな海なのに、心のどこかで昔の記憶が怖いよ怖いよとささやいて一寸、波が高くても船の旅路には絶対に出ません。心に沁み込んだ想い出は怖いものです。

## 六甲山で父偲ぶ

松 原 寿 子

標高九百三十二メートルの、六甲山の冬はとても厳しかった。

独自の判断で、人生を歩むことに決して自信がある訳ではないが、ある日突然、そうせざるを得ない事態が起きた。一部流される部分もあるが、運命に逆らわず生きて来たよくな気がする。

私の父は、兵庫県警の警察官であった。明治生れの父、昭和初期生れの母、そして私である。他人の眼から見れば、奇妙な家族だったかも知れない。父も母も大変ブライドの高い人であった。一途で口数の少ない父は、私たちを真底愛して大切にしてくれた。毎月の給料日には、父の希望で目いっぱいの手料理で食卓が溢れていた。たばこを吸わない父はミニグラスに一杯程度のナポレオンを口にするのが、何よりの楽しみであった。

外は雪がしきりに降っていた。父と母は、性格の合わない面もあり、不穏な空気が流れ始めた。しかし、古い考え方しかできぬふたりに取って、それ以上の進展はなかった。時は昭和三十二年十二月のことであった。

それ以来、母方の祖母の助言を得ながら、わたし自身の判断と考で、生きてきたのではないかと思う。

遠い昔、父は幼い私の手を曳いて王子動物園や港へ連れて行ってくれた。時折六甲山を訪れ、当時の大自然の中で、自由奔放に家族揃って過ごした日々を掘り起こしては、石頭ではあったが、厳格で曲つた事が大嫌いで、ブライドの高かった亡父を偲ぶ私である。

ひみこさろんは、女性のページです。

## 尚香のむ 八木千代選

道の証の年金を受けている

西宮市 林 はつ絵

この開き直った姿勢のみことさ。目立たずとも全力を尽くして若い日の時間を働いてきた。組織も支えてきた。誇りを失わぬ幅でつらい妥協もしてきた。涙と汗の長い長い道程でもあった。そして今、やっと重い荷を下ろし、年金の証書をしみじみ眺めている作者なのだ。やっかみなど、もつてのほかであらう。

この池に海を教えるのは早い

米子市 川上より子

池は他の水を見ていないから海の偉大さを知らない。その上に自分こそ海ではなからうかと錯覚までしてしまう。それでも当然のことながら、退化してはならぬと緊張し続けているはずだ。今はそれで十分だとおもう。やがて波の振幅が大きくなり、失望をくり返すようになった時、はじめて海の深さ、淋しさ、恐ろしさなどを知ろうとするに違いない。だが、まだ早い。まだ若い。

刃物研ぐ うつつを加速するように

和歌山市 後藤 正子

山降りた足で謝りに行く

米子市 政岡日枝子

目の位置が定まらぬまま逢うている

和歌山市 福本 英子

鏡さえ知らぬ私がいるらしい

尼崎市 新井 朋子

薄くなる目にたくさん花を見ておこう

米子市 金山 夕子

三枚目演じ仲間にしてもらう

和歌山市 木本 朱夏

自縛した縄がいつしかゆるみだす

和歌山市 西山 幸

忙しくて天仰ぐこと忘れてた

藤井寺市 高田美代子

地の挽歌ここから先を視てしまう

和歌山市 松原 寿子

よるこんで まだ踏み台になれるなら

大阪市 鈴木 節子

めくるめく朝日 挨拶しそこなう

和歌山市 森 茜

理解しようとして大怪我をしてしまう

松原市 佐藤 奏月

ブランコにひとりりて乗ってひとりりの音

松江市 竹内すみこ

みぞおちが渴かぬうちに水を汲む

米子市 寺沢みどり

向こう岸を白いパラソルきょうもゆく

尼崎市 春城 年代

夢に立つ人を持たせてばかりいる

寝屋川市 宮崎 菜月

紫陽花の汚れを折って締めくくる

大阪市 田中 弘子

姑の位置で甘えることもある

大阪市 西出 楓楽

わたしの罪がチラチラする日記

和歌山市 堀畑 清子

違和感を肌感じてとしを知る

堺市 高橋千万子

ことごとく彼は喜劇にしてしまう

米子市 足立由美子

片便り 人の都合もあるだろう

鳥取県 西原 艶子

一円玉の存在感に負ける日も

名古屋 藤井 高子

来年も生きると決めた料理メモ

倉吉市 淡路ゆり子

外野ではとてもやさしい反抗期

田辺市 染道 佳明

藪入りの金魚に帰る家がない

米子市 新 正子

風が出てわたしの枕ゆすっている

出雲市 吉岡きみえ

いい話聞いて私の棘をぬく

米子市 青戸 田鶴

後ろ姿わたしも値踏みされている

鳥根県 松本 文子

汚れる都会で月の出を待ちぬ

八尾市 宮西 弥生

マリア像へ絡みついている花いばら

富山市 舟渡 杏花

絵本裏返し少女 大人の貌になる

富田林市 池 森子

スプーンの柄先ではがす自我のこげ  
 対岸につながれている舟一そう  
 初蟬のおもむろに鳴くそれつきり  
 あの人の目に選ばれている驕り  
 愛しくて愚かで私もその一人  
 不揃いのどの子も愛し毒皿  
 素敵な人の掌が冷たくて安堵する  
 地獄にも左団扇の人がいる  
 振り返る人 私も振りかえる  
 赤を着るわたくしことの今日のため  
 一流の友が私を僻ませる  
 頂点の鬼後悔も独り占め  
 カップラーメンの味に頼って鬼の留守  
 六十を過ぎると平凡好きになる  
 ガラス戸を曇らせリラックスして  
 ほうほう螢一夜の夢を忘れかね  
 まだ少し嫉妬が残る風だより  
 慌てまい月が私の味方する  
 隠し味ていどの毒に魅かれます  
 真心の実がわたくしへ流れ着く  
 梅漬ける 嫁が欲しがりますように  
 ひとさじの重湯も母の命綱  
 流れ雲 別れる決意できている  
 人の世はどうあれめぐる花の四季  
 花の私語 母か母かと問い詰める

八尾市 向井しづ子  
 米子市 沢田 千春  
 豊中市 辻川 慶子  
 西宮市 西口いわゑ  
 堺市 鈴木 可愛  
 羽曳野市 吉川 寿美  
 堺市 板野 美子  
 貝塚市 池田寿美子  
 鳥取市 前田 一枝  
 米子市 小村てい子  
 和歌山市 桜井 千秀  
 大阪市 津守 柳伸  
 八尾市 高杉 千歩  
 米子市 林 瑞枝  
 和泉市 中川 楓  
 出雲市 石倉美佐子  
 和歌山市 内芝登志代  
 米子市 茂理 高代  
 吹田市 栗谷 春子  
 米子市 服部 朗子  
 大阪市 本間満津子  
 米子市 木村富美子  
 富田林市 片岡智恵子  
 岡山県 松本 元江  
 大阪市 富上 朝世

火傷する程の男と会うまでは  
 疑われているらしそつとしておこ  
 青梅のひしめき会ってバイタリテイ  
 上があれば峠 越すも戻るも下り坂  
 登り切る時は自分をさらけだす  
 枝先の話の輪から逃げられず  
 きっちり家系を守る高血圧  
 春までは草の根死んだ振りをする  
 爪先の減るせつかちの靴を脱ぐ  
 いたわりの視線うれしくいただこ  
 母の湖に亡父の帽子が浮いている  
 花の苗分けて友達増えていく  
 ペンフレンド逢わねば光る君なのに  
 動きたくない時もある蝸牛  
 マニキュアの黒に悪女を覗かせる  
 食べても食べても野良猫のひもじさ  
 雨上がりポストのお口拭いてから  
 むらさきの心を映す菖蒲園  
 たち葵咲いて麦わら帽子買  
 梔子の白に末路は思うまじ  
 花のある限り命に水が湧く  
 水道を出しっぱなしで憂さ晴らす  
 うれしいな慰めの会とか言つて

投句先

〒683 米子市花園町14-8

八木千代(ハガキに3句)

弘前市 肥後 黄峨  
 和歌山市 田中 輝子  
 米子市 白根 ふみ  
 和歌山市 砂山千枝子  
 米子市 野坂 なみ  
 米子市 小塩智加恵  
 大阪市 山田 妙子  
 米子市 石垣 花子  
 西宮市 奥田みつ子  
 米子市 田中 亜弥  
 西宮市 門谷たず子  
 堺市 山本 半銭  
 姫路市 丁坪サワ子  
 出雲市 園山多賀子  
 竹原市 信本 博子  
 茨木市 堀 良江  
 寝屋川市 平松かすみ  
 米子市 光井 玲子  
 和歌山市 古久保和子  
 大阪市 島村美津子  
 鳥取県 さえきやえ  
 有田市 松井かなめ  
 枚方市 森本 節子

# 銀河系

## 河内天笑選

青森市 工藤 甲吉  
 万緑のしたたる中の白い首  
 遮光器土偶縄文人は微笑まし  
 納税の通知は来ない方がいい  
 大阪市 小出 智子  
 鏡台の位置など変えてみるけれど  
 母と三人コトリともせぬ日曜日  
 テレビから教えてもらおうお献立  
 唐津市 池田 遊女  
 引力に勝てない目尻 乳 お尻  
 水のごと女変われるものですね  
 米子市 八木 千代  
 たかぶって流れが渦となる時間  
 ひと口の水頂いて咲きのびる  
 鳥取県 新家 完司  
 前世はカモメだったか海が好き  
 ともだちの家で昼寝をして帰る  
 堺市 近藤 豊子  
 椽の実が力を溜める梅雨の入り

子が巣立ちゆっくりりまわる洗濯機  
 米子市 政岡 日枝子  
 街を出るととも馬鹿馬鹿しい理由  
 胃ぐすりを飲みせかせかと父は短足  
 和歌山市 田中 輝子  
 痩せた肥えたと他人さま無責任  
 名古屋市 藤井 高子  
 本当の淋しさ風が止んでから  
 夢気球どんだん昇る大ジヨッキ  
 落ちて着いてみれば許せることばかり  
 鳥取県 西原 艶子  
 好きだから横へなかなか座れない  
 何回もけんかしたのに好きと言う  
 唐津市 浜本 ちよ  
 ご近所の挨拶いつもこちらから  
 来る人はないがやっぱり花は生け  
 堺市 小西 小雪  
 身勝手に自分もなっている恐さ  
 花博へ行きましたかとまた聞かれ  
 寝屋川市 江口 度  
 サイコロを振る結論を笑えるか  
 人間の弱さを知っている虫歯  
 町田市 竹内 紫鏑  
 髪白くなくても覗く顕微鏡  
 立ち読みに出かけ翻訳すすみだす  
 松江市 竹内 すみこ  
 言いつぎたこと自分でも判っている  
 両の手で犬抱き上げる淋しい日  
 米子市 白根 ふみ

買いかぶられてしばらくは偽善者に  
 壁画ぬる生徒にいつか連帯感  
 伊丹市 榎谷 寿馬  
 昔の顔と二重写しに見える妻  
 祝日の旗へ疑問をぶつつける  
 静岡市 青柳 金吾  
 かたつむり俺もお前も慎重派  
 中傷を無視する人でたのしい  
 羽曳野市 徳山 みつ子  
 日本が頑張っている地球裏  
 ライトアップ花は過激な疲れよう  
 和歌山市 山川 克子  
 恥ずかしい過去を埋めたい穴を掘る  
 人生はこれでいいのか寝ころんで  
 佐賀県 寺中 三枝子  
 困らせなくてもう人妻になりました  
 ころろ渴く日は手折ろうか赤い薔薇  
 堺市 高橋 千万子  
 スーパーの目玉に群れる主婦となり  
 言いにくいことすらすらとペン走る  
 大阪市 北 勝美  
 年金のくらしの贅に梅漬ける  
 もう拳上へあがらぬ喜寿を生き  
 唐津市 山口 ふさ子  
 高速渋滞しながらクルマ展示場  
 茶化さずに聴いてあげよう艶ばなし  
 唐津市 福島 紀一  
 美味美食もうしばらくは生きられる  
 茄子 トマト 南瓜も植え恙なし

竹原市 信本 博子

好奇心あなたの傷に触れたがり

許せぬを許せと天の声がする

七尾市 松高 秀峰

許したり忘れたりして夫婦独楽

花博にはたらく人と遊ぶ人

兵庫県 遠山 可住

露天風呂 入道雲に覗かれる

奥さまを連れてゆつくりお出でやす

和歌山市 桜井 千秀

どっちでもいいと思つたことがない

企みが見えかくれする薄笑い

和歌山市 山口 三千子

長電話 夫が椅子を持つてくる

肩の力抜けばパズルが解けてくる

仙台市 川村 映輝

狭いニッポンに目障りな休耕田

芭蕉翁に履かせたかったスニーカー

豊中市 辻川 慶子

神様も祭囃子と酒が好き

薪能 狂女は恋をつらぬきぬ

鳥取県 土橋 螢

気休めに三回おなじことを言う

米子市 新 正子

偏食はしない八月十五日

熊本県 立道 善太郎

遠くから見ればみいんな美しい

和歌山市 堀畑 靖子

踏ん切りをつける助走をしています

鳥取県 江原 とみお

旗揚げてから北風がつよくなる

鳥根県 小砂 白汀

えこひいきせぬシーソーの贈曲り

和歌山市 後藤 正子

てっぺんの風に似ている読後感

守口市 結城 君子

皺なんか白髪なんかこわくない

鳥取県 ささき やえ

金ですむ話さみしいことですね

岡山県 矢内 寿恵子

八月の陽はまだ落ちぬ原爆忌

豊中市 田中 正坊

美しきものとしえにモンロー忌

米子市 田中 亜弥

見て見ぬふり出来ぬ私を持て余す

堺市 神原 文

わからない事多すぎてピアノ弾く

唐津市 浜本 治幸

ごつい顔だけど笑顔が素晴らしい

和歌山市 田中 信也

梅雨晴れのみどりにとける島のうた

豊中市 安藤 寿美子

ゴキブリも生存権を主張する

松原市 小池 しげお

怒らない父が一番恐ろしい

堺市 桜沢 あかり

無駄話しながらメモを取っている

京都市 松川 杜的

そこそこに揺れて楽しい丸木橋

西宮市 西口 いわゑ

世辞だとは分かつていても心地いい

米子市 林 荒介

座り胼胝はにはは母の城がある

弘前市 波多野 五楽庵

破廉恥でとてもエツちな街の風

和歌山市 松原 寿子

返信に髪を切るなど添えてある

米子市 青戸 田鶴

遠くから私の影を見ておこう

尼崎市 春城 年代

気になっていることなのにすぐ忘れ

羽曳野市 吉川 寿美

人並の幸せだろう朝のパン

今治市 矢野 佳雲

現実へ少年すこしずつ無口

米子市 小村 てい子

にこやかに笑わなければ桃熟れぬ

和泉市 中川 楓

きもの着た妻を男の目で見てる

芦屋市 根来 敬

仰向けになつても煩惱から抜けぬ

米子市 石垣 花子

ハーモニカ吹ける太郎は王様だ

松山市 谷 真風

くす玉よ入院三年すぎました

大阪市 津守 柳伸

真夜中になると用事を思い出す

兵庫県 酒井 靖子

河内長野市

植村 喜代

心配でかけた電話に叱られる

倉敷市

小野 克枝

一番うしろを歩く呑気な妻を連れ

岡山県

小林 妻子

ロボットが今に覚えるストライキ

岡山県

宮崎 菜月

時どきは母校の歌を口ずさむ

奈良県

丁坪 サワ子

無責任な言葉を遊ぶ他人さま

大阪府

松尾 柳右子

それからの口紅だけは離せない

宝塚市

丸山 よし津

物ばかりふえ六帖を狭く住む

八尾市

榎山 隆

遺言状書く気になれぬ花吹雪

吹田市

栗谷 春子

前向きの世にさかろうてさかろうて

今治市

越智 一水

つきあたりまたつきあたり蟻すすむ

大阪府

山北 三三三

人はみな貰う寿命を生きるのみ

笠岡市

松本 忠三

この年齢になっても母の知恵を借り

名古屋市

越村 枯梢

仁王像ときには目尻下げたかろ

鳥取市

西尾 呼風

いい喉が二日酔いするもとなり

岡山県

土居 ひでの

少しだけ波風立てるのも演技

岡山県

富坂 志重

愚痴るにもコブシきかせて面白く

田辺市

染道 佳明

休肝日夫無口に食べるだけ

相生市

中塚 礎石

体制の中でぬくめている反旗

大阪府

板東 倫子

イナイイナイパーと寛美が出て来そう

鳥根県

榎原 秀子

おきまりの話題がいやな美容院

西条市

片上 明水

歎願書肩に力の入った文字

和歌山市

内芝 登志代

親に似た顔へ挨拶里のみち

大阪府

榎本 路児

逆境を知らぬ女が謀反する

橋本市

岸本 木魚

通園は危なく見える道ばかり

和歌山市

山田 高夫

バイオリズムをちよつと狂わす二日酔い

宇部市

中村 三良

辻褄を合わせて嘘がふくれ出す

萩屋川市

堀江 光子

ドラマなら直ぐにも書ける辞表だが

岸和田市

三輪 通彦

野心などどつくに捨てたループタイ

やせに来て食べる相談ばかりする

羽曳野市

芦田 絢子

モナリザの微笑に曰くありそうな

出雲市

園山 多賀子

初舞台袖がはらはらしています

大阪府

上田 柳影

逃げ腰の男にアカンベしてやろう

高槻市

川島 諷云児

汗ばたばたきつねうどんの好きな人

羽曳野市

福田 満洲

神様の位 出雲で聞いてくる

和歌山市

福本 英子

幸せな女泣きたい時に泣き

鳥取県

近藤 秋里

お向かいの犬と並んで雨宿り

西宮市

奥田 みつ子

アルバムの笑顔の亡妻を抱きしめる

唐津市

入江 喜久亭

ハイレグのもうこれ以上見せません

藤井寺市

中島 志洋

短冊に父がほしいと書く園児

唐津市

山口 高明

あげまんの二号にピンチ救われる

唐津市

久保 正敏

毒ゴミを撒いて膨れる銭の国

大阪府

塩田 新一郎

極楽を見てきたように丹波さん

八尾市

橋本 龍典

福本好花  
うっ憤を犬と話して紛わす  
藤井寺市 菊地繁男

パチンコで儲けてきたのがよく喋り  
羽曳野市 麻野幽玄

官仕え皆芸達者ばかりなり  
岸和田市 島崎富志子

ミニ缶でほんのり口もほぐれます  
貝塚市 行天千代

紫陽花が肩寄せ合つて陽の目待つ  
広島市 名和喜一郎

マンションの最上階に住んでみる  
大阪市 尾崎黄紅

保険金殺されそうな額であり  
唐津市 山下剛司

夜の街を单身赴任謳歌する  
広島県 森川抜智

人出見る博覧会の馬鹿らしさ  
香川県 木村明人

負け話ちよっともしない競馬狂  
十和田市 阿部進

髪型で判断つかぬ新人類  
羽曳野市 田中透太

单身赴任男盛りの独り酒  
和歌山市 寺田裕美

オニは鬼腰曲つても侮れぬ  
岡山県 江口有一朗

軽い嘘 女は見栄を大事がり  
寝屋川市 坂上高栄

浄土まで持つて行く気の野心なり  
出雲市 森山健歩

双方ともわしが上位と思つてる  
和歌山市 西山幸

疑問符を入れた靴を持ち歩く  
箕面市 椎江清芳

のし袋義理と見栄とが絡み合い  
鳥取県 上田俊路

発想の違い平行線のまま  
和歌山市 青枝鉄治

浮気したことは伏せとく立志伝  
米子市 小塩智加恵

鉢巻を結び直してバトン待つ  
倉敷市 田辺灸六

もどかしいなんて名前が出て来ない  
出雲市 吉岡きみえ

恋絶賛娘二十歳になりました  
和歌山市 堀端三男

点滴の速度はやめる回復期  
高知市 北川竹萌

白内の進む日ごとの気が揺れる  
静岡市 渥美弧秀

生垣の芽に励まされ病み上り  
倉吉市 奥谷弘朗

いい線にいと気休め言つてやり  
砂川市 大橋政良

子に残す火種も消えてしまふ  
寝屋川市 平松かすみ

大阪市 今西静子  
性格の違いを見せて名コンビ  
大阪市 亀井円女

まだ来たたらあかんと亡母が言うている  
姫路市 福島姫女

天眼鏡めがねに重ね辞書をひく  
堺市 井上たかし

ミニ缶で覚え女房の大ジヨッキ  
香川県 辻上よしみ

底抜けの明るさだけが取柄の子  
箕面市 岩津ようじ

背を向けた子も期待する遺産分け  
弘前市 村田善保

台本のない人生の旅つづく  
熊本県 立道英子

生きている証にうまい夕御飯  
藤井寺市 高田美代子

大ジヨッキ クククとあけたのは女  
東大阪市 大平太一郎

赤貧で斯く逞しき赤ん坊  
静岡市 大神静枝

弥陀の手に縫れば温い風にあう  
枚方市 森本節子

呼び出して舌の正月させてくれ  
◇

投句は、川柳塔用箋に3句を連記し、毎月15日までに川柳塔社事務所へお送り下さい。川柳塔・水煙抄・課題吟の投句と同封されても結構です。

清  
い

山本玉恵選



再起への矢印清い道に向け 明水  
清らかな愛で終ったおさげ髪 幸子  
清い金ばかりで生きてやせている 緑良  
みどり児の瞳に邪心洗われる 枯梢  
白百合の清さを乙女いとおしむ 博子  
幾層も潜って清い水になる新正子  
清い瞳で流されて行く船の雛 英子  
清く澄む水に湖底の村ねむる 彩子  
ひたむきな清い流れに打てぬ杭 旋風  
手も触れず別れた人が胸に棲む 悠泉  
ふるりの清い流れと見つめ合う 美智子  
清流の山女と交す愛の私語 富恵  
ふたたびと亡母には逢えぬ清め塩 寿美  
固い実の少女の清い両乳房 高夫  
清い仲守って切れた赤い糸 サワ子  
ブラトニク意気地が無かっただけの事 ただし  
水中花水の清らに住むさだめ 高子  
清純な恋盲目にするおそれ 白光子  
清流の滝に打たれる般若経 遊峰  
朝の空気の清さに茄子が背伸びする 志重  
今日だけは清い心の日と決める 正子  
谷川の清さを誇る村に住む 弘朗

貧しくてもいつでも清い母で居る ちかし  
この川も清く流れていた記憶 悦子  
ペーターペンを聴き度い清い夜もある 蜷 広  
少年の絵の具濁らぬ色ばかり 元江  
清い流れの底に沈んでいる本音 敬  
清算した筈の疼きが胃に溜まる 柳  
ポランテアしたたる汗に清い風 柳  
一期一会清い出逢いを温めて のぶ夫  
玉砂利の唯清らかというリズム 杜的  
空腹の子の目が清い途上国 どんたく  
白菊よりきれいな心に負けた鬼 雀踊子  
胃の底の初恋清いままだった 妻子  
清め塩握る力士の瞳が光る 清芳  
清らかな議員バッジを泣かせるな はるお  
汚れまだ知らぬ清楚な舞い扇 寿恵子  
住  
心にはまだ清流のある故郷 大柏  
清らかな一生だった女文字 正坊  
頼り切る友情清い位置にあり 愛論  
四苦八苦しても清らな道を行く 艶子  
手話の娘の清い瞳に嘘は無い 右近  
人  
投げた石ボンと浮きそな清い川 ハル  
地  
清貧へふっくら御飯たける幸雄々  
天  
言い足らず聞き足らず振る清め塩 京子  
軸  
うたかたの清い夢なり絵まんだら

立  
つ

信本博子選



いまここで席を立つたら負けになる 飄云児  
立って見る高さがよろし座石の銘 やすお  
逆立ちをして和ませる三枚目 玉恵  
まっすぐに立っている気の背が曲り 佳雲  
頂点に立って人情切り捨ててる 寿美  
席立たずしばし余韻の中に居る 良江  
塾へ行く子へひっそりと虹が立つ 可住  
見通しが立ったその夜の月がまん丸い 杜的  
百姓という生い立ちへ荷が重い 妻子  
何時の日か子が立つ場所は開けておく ちかし  
立ったついでにと夫が茶をいれる 美代子  
後足で立つライオンに牙がない 正坊  
立ちあがる子に手助けはせずにおく 喜一郎  
大仏さん立ち上がりた日もある 度  
いつからか並んで立てば子が高い 艶子  
頂きに立って冷たい風に会う 有一朗  
一息つきなさいと虹が立つ 芳仙  
思い立つ日から人生向きを変え 高夫  
断崖に立つと私がよく見える 保州  
目立っても無くても困るかすみ草 正敏  
良い噂立つと夜には肩がこる 四郎  
頂点に立てば北風南風 豊

リハビリへ立つ執念の車椅子  
乾盃の音頭立たせてなが話  
八起き目のおとこ裸の仁王立ち  
奮い立つきつかけくれた子の寝顔  
立食はしびれが切れずねばれま  
決勝打いい顔してのお立ち台  
すじみちが立って交渉進み出す  
頂上にてば立ったで増す悩み  
待つていたか一言居士がやおら立つ  
立ち直る支えをさがす豆のつる  
荒れた海風いで浜木綿立ちなおる  
見送りの向うに母は小さく立ち  
波風の立たぬ秘訣は母の智恵  
観世音菩薩みどりに立ちつくす  
立っていることが大事なカカシです

生返事 C M までは妻立たず  
咳ばらい一つ男の位置に立ち  
とまり木で卵を立てている孤独  
日の丸が立って昔の絵にもどる  
立話 抱いた子が泣きけりがつき

僕の絵の中であなたが立ち止まる  
中立が火種をかくし持っている  
斜に立って媚を売ってるピサの塔  
座ったらさまにならない仁王さま

清芳 柳五郎 のぶ夫 鉄治 侑里 新造 武治 志洋 三和 静風 規不風 辰江 理瑛 宵明 文子 白峰 忠雄 高子 兼治郎 俊路 芙美子 枯梢

平和

塩満 敏選



八月が来てまた噛みしめる平和  
原子炉がなければもっと平和です  
どれ見ても平和の欲しい万国旗  
地球儀が平和ムードで回り出す  
鳩の絵を描けば平和らしくなる  
黒い影ひそかに狙っている平和  
錯覚を信じ続けていて平和  
大陸の孤児に平和はまだ来ない  
寝転んで戦争映画観る平和  
ああ平和婦唱夫随のフルムーン  
作業着を洗う平和な日を洗う  
命綱妻に預けている平和  
平和だな唄が聞こえる露天風呂  
平和ですモカの香りが鼻を突く  
一杯が今日の平和を締めくくる  
平和行進追って貧しいカンパする  
ミサイルを向けて平和を模索する  
ミサイルは減らさず平和に程遠い  
炸裂の恐れはないか平和論  
傷ついた鳩が平和の鐘鳴らす  
平和だな徴兵のない鯉のぼり  
軍縮へ平和の女神笑み給う

やすお 次男 佳雲 道胤 艶子 サワ子 美代子 満洲 鉄治 志洋 南奉 諷云児 典子 洛醉 智加恵 富恵 正敏 木魚 小江 元鹿 雀踊子 悠泉

平和だがなかなか家が建てられぬ  
雑炊の列花博の列日本英子  
本当の平和は核が消えてから  
核兵器全廃せねば平和来ず 抜智  
この平和千人針を巻いた過去 兼治郎  
戦友よ平和な日本見えるかい 路路  
折り鶴も日々新たな原爆碑 喜一郎  
新型の兵器増やして平和とや 杜つ子  
みの虫がゆらゆら揺れている平和 右近  
ユーホーは平和の使者である様に  
複雑な思い 日本国憲法 みつこ  
九条が鍵を握っている平和 保州  
平和握手はほんまものだから 寿美  
飽食が平和を少しずつ削る 理瑛  
平成よ平和に溺れない様に 寿恵子

平和だね猫も鼠を殺さない 敬  
かぶと虫少し平和に暮そうよ しげお  
たこやきを食べる平和な顔がある 狸村  
境界線の平和剪定忘れずに 輝子  
戦力はこれを保持せず第九条 正坊

蛇口全開平和は今をかみしめる 美智子  
戦争と背中合わせにある平和 旭恒  
国境を虹が結んでいる平和 可住

# 初歩教室

題一 掬う

辻 白溪子

今月の題「掬う」は、金魚掬いと泥鰌掬いの句が多く、出題が不適切だったと悔やみましたが、着想の広がりを見ることも意義があると思ひ、あえて列挙しました。なお、前回もお願いしましたが、本社経由の句が多くて困っています。整理や日時処理の都合がありますので、必ず直接私宛てお願いします。

金魚掬いの句から

金魚掬い上手になつたとほめてやり 春子

(金魚掬い上手になつて離れない) 房子

金魚追う欲のない児がよく掬う 高栄

(欲のない児へ掬われている金魚) 高栄

掬われた金魚よお前もくず金魚 高栄

(金魚にもどじなのが居て掬われる) 高栄

掬い取り昔の紙は強かつた 高栄

(金魚掬いだんだん弱い紙に替え) 高栄

金魚掬いあの夏の日はもう来ない 義

(過ぎた夏金魚掬いが懐かしい) 義

金魚掬い好きが育てた一年目

掬われてからの金魚が強くなり

(掬つて来た金魚が無事に冬を越す)

掬われた金魚大海の夢を見る

(水槽の広さ掬つた金魚入れ)

あせるほど金魚掬えず意地になり

(網ばかり破れて金魚掬えない)

金魚掬いとど金魚もいて楽し

(何回も掬われ金魚疲れ切り)

よい器量金魚も先に掬われる

(美しい金魚を撰つて掬う網)

孫の手と金魚を掬う村祭り

(村祭り金魚掬いを孫とする)

金魚掬い初恋の日は遠くなり

(初恋の思い出金魚掬つた過去)

金魚掬いゆかた祭りにさあいこう

(金魚掬い浴衣の端が少し濡れ)

夏祭り金魚掬いで子と遊び

(金魚掬いしたい子と来た夏祭り)

夏の夜の金魚掬いの宵祭り

(金魚掬いだけが目当ての宵祭り)

欲出して金魚掬いの網破れ

(一匹も掬えず金魚網破れ)

祭りの夜金魚掬いの恋が漏れ

(金魚掬いへデート立ち寄る祭りの灯)

金魚掬う不器用さまで親に似る

章久

露芳

善太郎

一枝

一 枝

静子

静子

金吾

金吾

太一郎

太一郎

希久子

希久子

姫女

姫女

春風

(親に似て金魚掬いが苦手で)

親と子が金魚掬いで震える手

(掬われる金魚親子の手が絡む)

次は泥鰌の句

掬つても柳の下にいないとどじよう

(掬いたい泥鰌が柳の下にいない)

泥鰌掬いやらせりや夜の立役者

(箆持つと十八番の泥鰌掬いする)

ドジョウ掬う真似て笑わず安米節

(泥鰌掬い夫の十八番の一つ芸)

泥鰌掬い夫の十八番の一つ芸

(泥鰌掬い夫の芸が社でもてる)

慰労会どじよう掬いで盛り上げる

(慰労会泥鰌掬いが出て終り)

あの彼が泥鰌掬いで爆笑させ

(隠し芸の泥鰌掬いで覚えられ)

酔い回り泥鰌掬いで真面目すぎ

(泥鰌掬いだんだん酔いが回り出す)

泥鰌掬い出番待つてる頬かぶり

(頬かむり泥鰌掬いが出番待つ)

取る筈で会社を掬う泥鰌すくい

(接待の泥鰌掬いで社を助け)

見よう見まねで泥鰌掬いの輪に入る

(酔つたのが泥鰌掬いを派手に真似)

空の箆掬つて見せる安米節

(安米節掬う手つきに居る泥鰌)

静江

一応は泥鰌も踊り魚籠の中  
露 芳  
(掬われた泥鰌が跳ねる魚籠を吊り)  
その他の表現句

両の手にあふれるほどの愛掬う  
民子  
(愛掬う両手へ温い砂がある)

病妻みそ汁掬う今朝の幸  
君 江  
(みそ汁を病妻掬うほどに癒え)

非常時に米粒掬うひもじがる  
友 子  
(米粒を掬うた戦時の事にふれ)

計画は足掬われてから進み  
みつ子  
(足元を掬われブラン練り直す)

土地家屋掬うて長屋ビルになり  
昭 子  
(ビル建てる計画長屋ごと掬う)

庶民には手の出ぬ土地をシヨベルカー  
保 夫  
(手の出せぬ土地をシヨベルカー掬い上げ)

捨てる気の男ネオンの女掬う  
芳 水  
(やけ気味の女を掬うネオンの灯)

さわやかに物知り嫁さん足掬う  
しづ子  
(足掬う嫁にくめない知恵を持つ)

故里の目高掬うた川が故里にない  
志 重  
(もう目高掬うた川が故里にない)

掬うてもすくうても鮭登る川  
隆 雄  
(鮭掬う仕掛けかわして川登る)

湯豆腐を掬う夕餉の老夫婦  
志華子  
(湯豆腐を掬い合っている老夫婦)

政治とは足掬い合えばかり見え  
吉太郎

(足掬い合うて政治に裏があり)  
清 柳  
砂掬う啄木の掌も僕の掌も  
(啄木と同名なじ砂を掬うた手)

大網で掬うても雑魚しか掛からない  
侑 里  
くみとってやりたい一途叱れない  
(大網で掬うても雑魚しか掛からない)

真心をくみそれ以上叱らない  
敬  
運悪くもらした言葉掬われる  
(真心をくみそれ以上叱らない)

不用意な発言野党に掬われる  
洋  
袖濡らしめだか掬うた友は近く  
(不用意な発言野党に掬われる)

亡き友の思い出か掬うた仲  
和 枝  
雑言のなかの真実だけ掬う  
(亡き友の思い出か掬うた仲)

雑言のなかの真実だけ掬う  
時 弘  
掬われぬよう魚よ上手に逃げとくれ  
(雑言のなかの真実だけ掬う)

幼児の手にまだまだ掬えない目高  
円 女  
名水の湧いてる生命掬い取る  
(幼児の手にまだまだ掬えない目高)

湧水を両手で掬い息を継ぐ  
豊 子  
愛で掬い告白させた仏さま  
(湧水を両手で掬い息を継ぐ)

み仏の愛に縋って掬われる  
美代子  
学生が教授の足掬う悪ふざけ  
(み仏の愛に縋って掬われる)

先生の足を掬うた悪ふざけ  
隆  
テレビから孤独掬われ夜を刻む  
(先生の足を掬うた悪ふざけ)

テレビから孤独を掬うドラマ見る  
芋美子  
ちよっとした物知りか足掬われて  
(テレビから孤独を掬うドラマ見る)

あやふやな答弁足を掬われる  
すみれ  
味噌汁の上澄み掬った離乳食  
(あやふやな答弁足を掬われる)

(味噌汁を掬うて離乳食に馴れ)  
富 恵  
飢餓の子へ一掬いずつの愛を寄せ  
(ひと掬いの愛を待っている飢餓の子ら)

この小川目高掬うた子が浮かぶ  
秀 香  
逝った子が目高掬うた川へ行つた  
(この小川目高掬うた子が浮かぶ)

溪の水掬う嬉しさ木洩れ陽よ  
武 志  
木洩れ陽の楽しさ両手で掬う水  
(溪の水掬う嬉しさ木洩れ陽よ)

甘露甘露両手で掬った岩清水  
和 子  
岩清水掬う両手に幸を知る  
(甘露甘露両手で掬った岩清水)

おどり食い掬うて春の喉三寸  
幸 枝  
白魚を掬う珍味の箸せわし  
(おどり食い掬うて春の喉三寸)

白魚を掬う珍味の箸せわし  
絢 子  
掬うてはこぼし砂丘に育つ恋  
(白魚を掬う珍味の箸せわし)

砂掬い砂丘の二人恋語る  
絢 子  
着想と表現が巧みな句  
(砂掬い砂丘の二人恋語る)

夕やけに染まった涙で砂掬う  
民 子  
幸せを掬える網なら買いましよう  
(夕やけに染まった涙で砂掬う)

想い出を掬えば乙女の日に還る  
円 女  
灰汁掬うコツも教える母の味  
(想い出を掬えば乙女の日に還る)

灰汁掬うコツも教える母の味  
志華子  
私の句  
(灰汁掬うコツも教える母の味)

七人の敵に足元掬われる  
白浜子  
瘦せたのを撰って掬っている金魚  
(七人の敵に足元掬われる)

題「倦まる」 8月15日締切(10月号発表)  
ハガキに3句以内を書き、左記へ。  
ト 569 高槻市桜ヶ丘北町3-19  
辻 白浜子

# 全日本川柳宮城

## 大会に参加して

西田 柳宏子

大会の前日、六月九日午前七時二十二分発、新幹線ひかり二二二号に薫風氏と同席して出発、指定席には磯野いさむ氏、グリーン車には広瀬反省氏がそれぞれ夫人同伴で乗車、名古屋からはグリーン車二階へ加藤翠谷氏夫妻が乗り込む。

東京から上野へ乗り継いで東北新幹線で仙台へ。早くも午後一時二十分に到着、さらに仙石線に乗り替えて松島海岸駅で降りる。たぐさんの宮城県川柳人の出迎えを受け、ホテル差回しのバスで前夜祭会場（東西合同常任理事会、宿泊も兼ねている）松島センチュリーホテルへ着く。

受付でチェックインのあと、日川協の常任理事会が開かれ、午後六時から大ホールで前夜祭、参加者二百名を越す盛会で、地元民謡、舞踊の大清興あり、各地から集まった柳人交

歓が賑やかに続いた。大阪からメ女さんも駆けつけてくださった。

一夜明けると梅雨空は一変して快晴に恵まれ、日本三景の一つ松島の景もひときわ美しく眺められた。会場松島中央公民館へは早くから続々と集まり、熱気ムンムン、記念品のコケシもうれしく好感を与えている。締切の正午には、五八二名の出席者を数え、大会気分も盛り上げる。紫香氏と美智子さんも姿を見せ、選者をつとめる私を励ましてくださった。うれしいことだ。

セレモニーも型どおり順調に進み、披露に移る。事前投句一、四〇四名、出席五七七名の力作出句に選者も真剣な選句。事前投句は一題一〇〇句、当日宿題は一題八〇句入選、非常な厳選である。図らずも私が渡辺蓮夫氏選「結ぶ」に大会賞を頂き、またメ女さんが藤沢岳豊氏選「重い」で大会賞を獲得されたのは川柳塔社としてうれしい成果であった。

親が断った絆結びに還る孤児 柳宏子  
断ち切れぬ愛に女が重くなる 女  
感激をかみしめつつ散会后、薫風氏とメ女さんは東京へ。私はもう一晩、松島に泊って翌日帰阪することにして別れる。ゆっくり湯に浸り、昏れゆく松島の景を見て大会の余韻を楽しく想い起こしていた。

文部大臣奨励賞

温もりを駅までもらう白い杖

林 亮

川柳 大賞

古時計母の歳時記知り尽くす

森園かな女

川柳 大会賞

「言葉」

ちば 東北千選

直訳の詩は似合わない並木道

若山 大介

日本語で話す母国の旅が好き

佐藤 紫舟

「時計」

加藤翠谷 選

子午線に時計の顔が変えられる

江口 東白

古時計母の歳時記知り尽くす

森園かな女

「結ぶ」

渡辺蓮夫 選

親が断った絆結びに還る孤児

西田柳宏子

北方に橋で結べぬ島がある

村上 正一

「踊る」

古川 一高 選

悲しさを踊る夜明けまで踊る

木村 木念

踊りたい私を許してください

大沼千代子

「重い」

藤沢岳豊 選

断ち切れぬ愛に女が重くなる

藤村 女

千枚の絵馬の重さに人の運

松岡 葉路

「温もり」

西田 柳宏子 選

温もりを駅までもらう白い杖

林 亮

野仏の温もり目鼻欠けている

河原 房子

「約束」

本山 哲朗 選

先約は先約としていい話

和田いさむ

千の手に千の約束ある仏

山田すみ子

# 柳界展望

集録一敏・武庫坊

## 〈天位句〉

妥協くり返すと長い雨に  
なる 西山 幸  
居直つて女ケラケラ笑い  
出す 高橋千万子  
ミルクなど要らぬ母がう  
いういし 黒川 紫香

はなみずき今年も無事な  
日を迎え 高杉 鬼遊  
来年の父の日までの力こ  
ぶ 中井 慧梢

★小樽川柳社は、「こなゆ  
き」500号を記念して誌  
上川柳大会を行う。課題は  
「海」で投句数は2句、選  
者は尾藤三柳・関水華・寺  
尾俊平・齋藤大雄・桑野晶  
子・石井有人、投句料は1  
000円、締切は8月10日  
投句先は小樽市奥沢4-1-  
22 横田守人。

無をつかみ旅へ一遍 山  
頭火 内海 幸生  
〈池 森子賞〉  
通り抜けてできない森を抱  
いている 中井 慧梢  
〈吉岡美房賞〉  
鬼の面はずせば若葉 眼  
に痛い 宮西 弥生

## ▼同人消息▲

■結城君子さん(守口市・  
同人)のずいそう「杖をつ  
いて知った善意」が朝日新  
聞(6月24日付)の「ひと  
とき」欄に掲載された。

■朝日新聞社の万博ニュー  
ス「はなろーぐ」の「川柳  
いちりん」欄に阿萬萬の氏  
の句が紹介された。  
チャンスまた逃がした尾  
瀬の水芭蕉

■中原諷人氏(鳥取県・理  
事)は、県総合情報誌「鳥  
取ナウ」の「鳥取の男」取  
材に協力、川柳20数句を登  
表した。

★川柳塔きやらはくは第26  
回忘年会を12月2日(日)  
米子駅前米吾ビルで開くこ  
とを決めた。宿題は、窓・  
熱い・耳・マスト・畳・猫  
・若しも・梯子・追う・腕  
・芝居(各2句)、会費は  
3500円、各題呈賞。  
25日、告別式が行われた。

## ▼お便り▲

■西村黙光氏(鳥取市・う  
ぶみ川柳会事務局長)から  
「6月17日のうぶみ川柳会  
発足記念大会は百名以上の  
参加者を得、盛会裡に無事  
終了することができました。  
ご支援を賜り、厚くお礼申  
しあげます」。

■堀江芳子さん(鳥根県・  
参事)から金一封、拝受け  
いたしました。  
■家村高雄氏(大阪府)か

ら金一封、拝受けいたしま  
した。  
▼訂正▲  
■7月号・44P(水煙抄)  
下段11行目「耳がじつと」↓  
「耳栓がじつと」、46P下段  
25行目「困襲」↓「困襲」、80  
P(銀河系)中段2行目「盆  
裁」↓「盆裁」、同下段7行目  
「腹臣」↓「腹心」、89P中段  
17行目「一身同体」↓「一  
心同体」、102P上段15行目  
「柳論」↓「柳論」。

## 「同人名簿」について

川柳塔社では昭和62年11月、「同人名簿」を発行  
いたしました。すでに3年を経過し、かなりの  
異動がありますので、今年11月1日付「川柳塔」  
別冊として新版を発行いたします。

名簿の様式は、ほぼ現行どおりですが、正確を  
期したいと存じますので、雅号・住所・住居表示  
・電話番号等に変更・異動がある方は、8月31日  
までに本社事務所または〒569 高槻市桜ヶ丘  
北町3-19 辻白浜子までお知らせください。  
また、読みにくい雅号については、ふりがな(ル  
ビ)を振りますので、よろしく願います。

川柳塔社

# 第4回 NHK 学園川柳全国大会

日時 10月14日(日) 午後1時

会場 銀座ガスホール

宿題(事前投句)と選者(各2句)

- ① 「恵」 橘高 薫風選
- ② 「目」 齋藤 大雄選
- ③ 「宿」 仲川たけし選
- ④ 「上」 山崎 涼史選
- ⑤ 「橋」 渡邊 蓮夫選

席題 当日出句 2題

選者 白井花戦 竹本瓢太郎

記念講演 NHK学園川柳友の会会長

坂本 一胡

事前投句 9月20日締切

投句料 2000円(書留または小為替)

投句先 〒186-01 国立市富士見台2-1-36

NHK学園全国川柳大会事務局

## 兵庫ふれあいの祭典 川柳作品募集

作品 未発表作品(厳守) 3題各1句

題と選者 1題3人選(50音順)

- 「路」 北山 青珠・遠山 可住・保西 岳詩
- 「磨く」 植村客遊子・前川 孤舟・山神 まさ
- 「祭」 泉 梨花女・森田 栄一・安川 一醉

2次選者 去来川巨城・泉 比呂史・黒川 紫香・小松原爽介

平山 繁夫

応募料 1000円(定額小為替を作品に同封)

応募方法 所定の応募用紙(便箋でも可)に作品3句と郵便番号

・住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・職業・電話番号・大会当日の出欠明記

作品集 入賞・入選作品のほか、1人1句は掲載の作品集を

応募者に一冊ずつ配付

賞 文部大臣奨励賞・ふれあいの祭典実行委員会会長賞

・兵庫県知事賞ほか9賞ならびに佳作

締切 8月20日(月) 当日消印有効

応募先 〒670 姫路市安田4丁目1番地

姫路市役所教育委員会文化課内

姫路市ふれあいの祭典実行委員会

Tel 0792・211・2098

第26回 路郎忌

本社 七月句会

七月六日(金)午後五時半  
メンスファアツシヨンセンター

毎年このことから路郎忌の句会とあって、交換選者の片岡つとむ氏はじめ番傘のみなきさんの参加もあり、出席者九十人という盛會。おはなしは宮口笛生氏、国鉄の現役時代の思ひ出、路郎との出逢いからはじまる。川柳自伝史の「一席だった」が、選者にあたっていたため、メモがとれなくて残念。また、栗主幹が数日來の風邪のため欠席、薫風副主幹が代役をつとめた。

初出席は松崎幸子さん(和歌山市)、月間賞は小出智子さん(大阪市)が獲得。(正)(司会―岳人)(受付―みつ子・いわゑ)(記録―射月芳・月子)

出席者―諷云児・鬼遊・萬的・杜的・章久凡九郎・白溪子・小林英子・英千子・いわゑ利武・笛生・敏・太茂津・達子・二南・典子満津子・保州・寿美・武庫坊・年代・みつ子柳影・奏月・理瑛・女・眉水・完次・正坊

悟郎・幸・千秀・雅文・寿美子・東雲・悦郎  
ただし・幸子・利子・柳宏子・しげお・勝美  
小糸昭子・楠昭子・美代子・ゲン吉・シマ子  
憲祐・喜風・金太・洋敏・智子・結実・重人  
紫香・恵美子・弥生・薫風・射月芳・トメ子  
狸村・月子・白洋・翠公・勝晴・幹齊・冬葉  
三男・光代・寿子・楓葉・福本英子・半蔵門  
岳人・たつお・白兔・つとむ・憲太郎・透太  
頂留子・文秋・規不風・庸佑・八斗録・吸江  
比呂志・良子・小路・元紀

席題「だんだん」 牧浦完次選

逆らわぬ妻をだんだんもて余す  
何時からか妻がだんだん重くなる  
だんだんと妻のペースに馴らされる  
だんだんに上手にほける妻となり  
約束がだんだん重くなる小指  
指切りの指だんだんとうずき出す  
独身のままでだんだん忘れはじめ  
大船に乗ってだんだん呆けはじめ  
だんだんに子のファミリーの外に居る  
日記帳余白だんだん増えてくる  
握手してだんだん腹が立つてくる  
のら猫がだんだんあつかましいになる  
だんだんと部品が狂う年となる  
だんだんと重荷のかかる深い椅子  
海は汚れてだんだん刺し身遠くなる  
無駄めしがだんだん君の味になる  
道聞いてだんだん迷い深くなる

諷云児 鬼遊 美代子 萬的 小英子 洋敏 太茂津 杜的 タン吉 寿美子 女 笛生 元紀 太茂津 射月芳

するめ噛むようにだんだん好きになる  
原燃忌だんだん風化する恐れ  
だんだんと齡重ねて消えた虹  
話し言葉だんだん増えた孫と居る  
嫁く娘がだんだん他人めいてくる  
だんだん沈むのはほくの幻か  
井戸端でだんだん口が青ざめる  
だんだんと妻に似て来て小うるさい  
明るさがだんだん戻る百ヶ日  
喪が明けてだんだん女若くなり  
だんだんに慣らされてきた消費税  
肩で息してだんだんと母の顔  
だんだんと酒が飲めなくなる愛い  
遺書に書くことがだんだん増えてくる  
だんだんに馴れてはまった蟻地獄  
ラストダンスだんだん溶けてゆく鼓動  
火葬場でだんだん腹がへつてくる  
だんだんと尾鰭がひとり歩きする  
尽くされておんなだんだん怖くなる  
ひとり生きておんなだんだん怖くなる  
だんだんと地球が鼻について来た  
笑うたびだんだん命伸びて行く

たつお 頂留子 柳影 シマ子 奏月 白兔 良子 千秀 たつお 楓葉 達子 武庫坊 保州 結実 つとむ 岳人 結実 恵美子 規不風 東雲

兼題「植木」 桜井千秀選

植木まで受難の町に生きている  
日曜のパパ植木屋に間違われ  
植木屋は無口で植木よく売れる

完次 正坊

切る馬鹿と切らない馬鹿とある植木  
 追憶の記念樹老兵泣きにくる  
 平成の木を植木屋は危なかり  
 枝一つ切る植木屋が去んでから  
 欲に吊られた観音竹の深い傷  
 植木鉢増えて旅行は諦める  
 毒舌をいつも聴いては諦める  
 一陣の風が攫った植木鉢  
 精気ない植木に酒を注いでやり  
 植木市威勢の良さに負けて買う  
 剪定鋏と植木談義を小片刻  
 笑わないおっちゃんがいる植木市  
 暑い日は植木もほしい通り雨  
 引き際を失い夜店の植木買つ  
 幸福の木も売っている植木市  
 鉢の木を丹精にして詫び住まい  
 根性を曲げて盆栽ほめられる  
 亡父の植木がまだ生きている庭の隅  
 植木鉢合鍵だいて待っている  
 三十年も一緒植木も家族並み  
 水遣って植木の呼吸聞いている  
 お手植えの松に歴史の風わたる  
 風邪三日植木もすこし病んでいる  
 剪定はとなりが全部してくれる  
 植木屋の梯子ひるまで降りてこず  
 水やりの手抜きへ楚々と咲く芙蓉  
 人間に疲れ植木が好きになる  
 ペンションの植木にギヤルの恋がある

恵空 太茂津 木文子 寿美子 美代子 雅文 瑞枝 シマ子 理瑛 寿美 ダン吉 狸村 白兎 正坊 道胤 結実 幸 鬼遊 つとむ 杜的 洋敏 いわゑ 金太 英子 泰月 元紀

盆栽の私語をご隠居聞きわけける  
 盆栽の水へ念押しして来る電話  
 花博の植木はみんな器量よし  
 松の木に一日止まる植木職  
 都市砂漠古果へもどりた植木  
 人  
 南天を魔除けに植えて病んでいる  
 地  
 植木屋の鋏切りたい枝ばかり  
 天  
 水打れば植木にもある息づかい  
 軸  
 五十年先を見ている檜苗

兼題「板」 田中正坊選

楓楽 小路 武庫坊 笛生 白洋 幹齊 月子 雅文 千秀 荒介 新正子 元江 敬 小路 英子 紫香 庸佑 楓楽 透太 東雲 理瑛 失明

どぶ板を踏んで刑事が出る長屋  
 独り者まな板いつも乾いている  
 板の間が光って姑が達者です  
 洗濯板で白足袋洗うおばあちゃん  
 売られたか古い屋敷に板囲い  
 不揃いの節目の板が温かい  
 吊り橋の板の隙間に見る奈落  
 立て板に水保険証書が出来上がる  
 無医村の命を乗せて行く戸板  
 留守宅とはつきり判る回覧板  
 板扉の中に噂の女が住み  
 名刺の由来廊下も黒光り  
 なつかしい記憶にとける生妻板  
 立て板に水徹子の部屋が回り出す  
 出土した板に歴史を変ええる文字  
 板の目に添えは素直になる匏  
 回覧板届けに行つたきりの妻  
 住  
 板チヨコで命つないだ遭難記  
 ベニヤ板で仕切る私のプライバシー  
 甲板に立つと男の血がたぎる  
 職人の釘に素直になれる板  
 良い母と良い妻が居て板ばさみ  
 人  
 磨かれた板に素足が美しい  
 地  
 鉄板の下に働く人がいる  
 天  
 少し大きなまな板にして同居する

トメ子 女 大茂津 紫香 昭子 章久 規不風 保州 狸村 重人 惠美子 八斗蘇 射月芳 ただし 保州 楓云児 柳宏子 千秀 楓楽 典子 昭子 鬼遊 智子

ここもまた地上げか角の板囲い

正坊

兼題「膨れる」

野村太茂津選

万札で膨らむ財布いつも持つ

柳影

膨れた財布持たすとロクな事がない

雀踊子

膨れては気を引かせるもテクニク

繁男

膨れてもどなたもアンタを見てないヨ

凡九郎

膨れても駄目なら次は泣くつもり

美代子

すぐ膨れるおんで脱皮まだ出来ぬ

楓楽

古希なんぞ膨らむ夢を持っている

武庫坊

堪忍袋に小さな穴を開けておく

保州

膨らんだ河豚に似合ったおちよほ口

狸村

地震より妻の膨れが恐ろしい

東雲

スタートで膨らむ夢は覚えとる

重人

二度童子膨れる術は覚えとる

妻介

実南天おもいのたけをふくらます

荒介

均等法父が膨れるのが分かる

妻子

風船がふくらんで星が遠くなる

元紀

ワインクで胸が膨れることもあり

敏

少年の夢膨らまず海の青

英子

知らんふりしてるのがよい膨れ面

智子

胸の膨れるぬくい話を聞いている

たつお

妻のこと話すと膨れ出す女

恵美子

膨らんだ明日への夢が走り出す

光代

もやもやが膨れたらしい妻の旅

英壬子

膨れてる横顔それは演技だな

寿子

膨らんで女らしさが出た少女

橋昭子

少々でふくれはしない妻の勘

典子

フルムーン夢はふくらむ世界地図

正坊

母と子の対話膨らむ雨の午後

いわゑ

女ですもの紙風船を膨らます

白兎

ライバルにやつれば見せぬ着膨れる

結実

泣く喚く膨れるどちらにも苦手

翠公

膨れつ面の女も可愛いものである

笛生

笹に吊るすと夢が膨らんでくる

白兎

うっぶんが膨れ蛙も井戸を出る

良子

膨れると妻はなんでも投げたがる

雅文

膨れるとどこかナマズに似てる妻

恵美子

負けは負け膨れていてもはじまらぬ

白洋

ハモニカへ少年の日を膨らます

幸

カルチャーで余生の夢を膨らます

諷云児

飢餓の子の膨れた腹が訴える

保州

膨れると人間臭い影になる

太茂津

たて割の中のからさに耐えている

妻子

目こぼしをしない師匠に磨かれる

瑞枝

辛口を覚えてからの親放れ

章久

Vサイン芥子明太あれば足る

荒介

甘辛の刊事が攻める調べ室

章久

辛口のエッセイを書く太いペン

正坊

通ぶった手前激辛残されず

満津子

塩分が内輪の話の中に出る

悦郎

甘いからいと男のくせに小うるさい

シマ子

妻の採点が年々からくくなってくる

八斗祿

キムチまだ効いた顔しるのれん出る

吸江

好きやからあなたへつつけるからい点

千秀

辛勝はしたが五割に程遠い

二南

開病の夫に合わず塩加減

諷云児

鬱の日を乗り切るカレーからくする

楓楽

自叙伝をすこし辛目に書き替える

幸

からい目で見える近頃のわかいもん

智子

インサイドの自信がからいので潰れ

小路

鶴橋のキムチ食べたい雨つづき

憲佑

乳離れへ辛子塗るのも慈悲だろう

柳宏子

からい点ばかりが届く編集部

恵美子

食の自由からさを奪いとる病い

雅文

この頃の妻辛口の意見する

完次

まだ少し未練があつて辛い酒

典子

効きすぎた山葵で狂う胃の調子

満津子

激辛のカレーが妥協せぬ気配

翠公

つまみ塩姑に教わることはかり

紫香

塩からいおかずが好きで貧乏性

射月芳

小粒でもびりつと辛い母が居る

紫香

何してもともかく母のからい点

射月芳

見所がある君だから辛くなる

杜的

腹心に一番からい点つける

昭子

天声人語のからい口がときによい

結実

一度だけ螢はからい水をのむ

しげお

辛口の批評がいつそ快い

恵美子

からい点つける妻です支えです

元紀

辛口の批評がいつそ快い

みつ子

からい点つける妻です支えです

完次

私をやる気にさせたからい評  
辛口のコラムが叩く天下り  
辛口のコラムを妻も読んでいる  
愛は乱調からいお酒がほしくなる

軸

この人の偉さ自分にからい点

兼題「船」

橋高薫風選

船出する潮がなかなか満ちて来ぬ  
笹舟は汚れた川に出たがらぬ  
揺り籠の夢は白い帆青い海  
感傷を蹴散らすボンボン船の音  
小さい碑残っています船着場  
向う岸着けば逢えると船をこぐ  
鯨を見たらやっぱり船を出さだろ  
捕鯨船いまさらじゃこをとれますか  
船出の子思つて夫婦語らない  
航路からときどき逸れる父の船  
いつからか父の船尾にいるわたし  
巡航船みんな陽気な缶ビール  
船の旅ばかりも女性化したのかも  
船酔いのキャビンへ月が美しい  
どうせならクインエリザベスに乗ろう  
豪華船庶民はカメラとるだけで  
泥船にわたしも乗ったことがある  
過ぎし日を笑う話の還り船  
横たわる船の形で粘れる山  
もう鯨とることのない捕鯨船  
イギリスのロマンに海賊船がある

奏月  
たつお  
透太  
奏月  
つとむ

みつ子  
柳影  
信義  
勝晴  
ダン吉  
幸子  
奏月  
鬼遊  
どんたく  
諷云児  
いわゑ  
しげお  
白洋  
月子  
いわゑ  
トメ子  
射月芳  
凡九郎  
松本元  
笛生  
元紀

舵のない舟でさすらう夏の海  
若者の船は座礁もあつてよし  
大海の広さに狂う船もある

元江  
楓文子  
松本文子

ヨースローキャブテンの眼は真正面  
いちにちがひたひた暮れる船溜り  
沈む夕陽を船はゆつくり追いかける  
外輪船琵琶湖哀歌を消して行く  
仇敵を出迎へに消す豪華船

柳伸  
洋敏  
杜的  
良子

帰船に開高健はもつけない  
釣船に開高健はもつけない  
黒船でさわぎ原発でさわぎ  
平成九少し揺れてはいませんか  
定年の船は静かな海を選る  
ボトルシップ男に広い海がある  
届かないテープを船に投じている

正坊  
寿美子  
妻子  
吻江  
寿美  
吸江

見送りの女とテープ切れたまま  
墓地を買い男が船を降りてきた  
情熱の冷めないうちに船に乗る

三男  
冬葉  
智子

船唄をつなぎつなげば月の唄  
（清記—みつ子）

薰風

松本今日子さんから  
義母満中陰供養として  
金一封拝受いたしました

川柳塔社

### 川柳塔社常任理事会（7月2日）

▽「川柳塔」碑参拝（10月6日）と同人総会・本社10月旬会（同7日）の開催要領について審議し、同行事の総轄に柳宏子氏、会計に諷云児氏を決定

▽同人名簿は8月末現在で整理し、11月1日付で発行することに決定

▽各地旬会案内のスペース拡大を決定

▽今年度の勉強会は、翠柳吟社創立15周年記念川柳大会への参加で代えることを決定

▽川柳塔社規約改正（第2次）案を検討

### 第8回夜市川柳大会

とき 8月5日（日）午後一時開場

出句締切2時

ところ 堺市総合福祉会館

兼題と選者（各題一句）

- 「隅」 神平 狂虎選
- 「氣持」 玉置 重人選
- 「捨てる」 奥山 晴生選
- 「裸足」 上高みゑ子選
- 「粘る」 岩本 笑子選
- 「泳ぐ」 小島 蘭幸選
- 「比べる」 門脇かずお選
- 「雷」 八木 千代選
- 「食べる」 河内 天笑選
- 「花火」 新家 完司選

会費 1000円



1人1句、1か月分、30句以内厳守。  
毎月23日締切。  
担当・玉置重人

川柳後集

從野 健一報

吉報は老眼鏡も寄せあつめ  
寅さんにひよっこり逢えるひとり旅  
小説のいつも孫には負けている  
限界と決めれば余生が削られる  
深入りをすると夕日に晒される  
満月につまずく老いのひとり言  
聞こえます知らずに済めばよい事が  
妥協する翼が欲しい鬼の面  
ふるさとの匂いを嗅ぎに同窓会  
句読点あるから一服うまいこと  
月やさし余生で勤める足に照る  
こだわりをもてば曇ってくる眼鏡  
割り切った男二の矢は軽くすて  
平凡でいいのと妻の小さい欲  
箸を割るうどんの汁が冷めぬ間に  
砂時計黙って落ちたる涙ふく  
保護色にうまく染まらぬ雨蛙  
夜逃げする道駅までの長い道  
回り道してもやっぱりに鬼に会う  
路地裏に曲ってからは酔っている

柳五郎 草風 吟平 健一 金吾 桃風 佐加恵 文平 博友 哲郎 進 浄美 青銅 拓治 正治 秋月 義親 鯨虎狼

矢印の道へおおきな落し穴  
虹となる父のたたかひまだ続く

川柳たけはら

森井 菁居報

仲良しと同じクラスの中学生  
こいのぼり気もちいよとおよいでる  
先生も良し平凡に生きて欲し  
桜の下でまた逢う握手して笑う  
誌齡四〇〇ここまで「これたが不思議  
またしたくも思いあらたに春の宵  
ゆれ動く心を洗うわらべ唄  
米びつが満ちて安らぐ女の座  
あと何回夫と馬鈴薯植えながら  
花よりもタンゴと母はよもぎ摘む  
二度と無き今日を大事に咲きはこる  
薬包紙ベッドで千羽鶴を折る  
休耕田祖先はビンタくわすだろ  
賞められてつぎの仕事が気にかかり  
食卓にと足早く春を盛る  
チャレンジを続けています赤い靴  
ケセラセラ春風さんは気まぐれで  
苗並ぶ店先でする深呼吸  
訂正が多い私の予定表  
浮き草の気ままを許す風の私語  
罪一つチャペルの鐘に洗われる  
花柳の馬鹿にも鬼に思える一途  
花道を静かに消える日をもる  
針仕事母が居眠りしてなさる  
花のわがまま聞いてあげたい春の冷え  
わだかまり終着駅はまだ遠い

美智子 照路 中一品 美 小三由 佳 菁居 蘭幸 静水 麻代 喜美子 静佳 栄恵 浪子 喜久恵 ヤスエ 一木 清水 愛子 節夫 比呂子 一路 笑子 博子 房子 静風 新造 伸子 貞子

寝室に時計が三つ置いてある  
でる釘は打てと大きな槌が来る  
うたた寝に羽織がそっとかけてある

富柳会

池 森子報

むかしなら女々しい男性化粧品  
女々しさをカバール大きなサングラス  
名優も衣裳ぬいだら只の顔  
名優は心理学者かも知れぬ  
名優の墓が泣いてる座頭巾  
女々しいと言われたくない鉄かぶと  
一枚の名刺がせまる胸さわき  
肩書がついた名刺を母の日に  
悪用をされる心配ない名刺  
名優としての火玉を抱いている  
いただいた名刺の中を知れる役所  
女々しゅうて男の背中風が撫で  
女神にも自由にならぬ愛がある

川柳クラブわたの花

片上 英一報

再びの化粧葉桜みどり萌ゆ  
連休の蟻はみどりへ旅に出る  
お茶どころ土産に新茶少し買う  
遠足のみやげ遊園地の写真  
みやげもの旅行代より高くつき  
お土産はあの子にあの子うちの子も  
子に持たす土産に少し見えももあり  
母の日に孫の電話で教ええられ  
ピーポーと又お客さんどんな人  
花博へ雨を気にせぬ傘の花  
花博へ雨をおそれぬ傘の花  
寝室に時計が三つ置いてある  
でる釘は打てと大きな槌が来る  
うたた寝に羽織がそっとかけてある  
千代美 笹舟 蝸牛 池 森子報 花子 智久 莊次 維久子 昭水 文次 花梢 柳太 岳人 森子 片上 英一報 シマ子 美津留 初子 春子 千鶴子 みき子 ますみ 隆 暁 道子

地球から消えてなくなれ核の傘  
 葉桜に見え隠れする母の傘  
 さりげなく歩幅を合わす一つ傘  
 相合傘 好きな同士と限らない  
 雨女 返した傘を借りて来る  
 からだ半分ぬれたふたりの喫茶店  
 買ったての傘を忘れるほどに酔い  
 愛犬に傘さしかけて散歩道  
 雨予報信じた傘の間の悪さ  
 傘持つてきてよかったと一人言  
 忘れ傘 雨に降られて思い出し  
 傘さして出かける程の雨でなし  
 濡れるのを承知の上か二人傘  
 新婚に傘の迎えの薄化粧  
 捨て犬へ傘が動かぬランドセル  
 寄り添えば白いつじに白い雨

川柳大阪

中原比呂志報

英一 幸枝 君江 信江 トシエ 朝子 市子 芙美子 一雄 一風 龍翼 弘直 泰成 友甫 章 鬼遊

一病を騙しだまして趣味に生き  
 階級が歴史に残した善と悪  
 ベテランは客みて演題変えてゆく  
 演技でも真剣使って殺人者  
 正直を演じる口のうまいこと  
 久世川柳クラブ 二宗 吟平報  
 一人居の音におびえる夜の風  
 過疎でよし無限無償の深呼吸  
 婦人部に妻をとられて一人酒  
 鶯との出会い嬉しい春の窓  
 男下駄置いて頑張る寡婦の意地  
 浄土への旅へ悲しい藁草履  
 劇軽な孫が家中笑わせる  
 師の愛に明るさもどす落ちこぼれ  
 生れついた明るさ苦労くぐりぬけ  
 入試パス家族明るい顔に変え  
 明るさは親子の対話はすむ膳  
 受話器から明るい顔が跳ねて出る  
 底辺に生き悪友のあたたかみ  
 職やめて地球が速く回り出し  
 倉吉川柳会 渡辺 善句報  
 ちよつと待てその橋渡りや鬼に逢う  
 あの時の涙はきつとバネになる  
 列島がほんに沈没するかいなあ  
 過去形となった涙は美しい  
 あまりにも優しい言葉に涙する  
 六月のパラソル町を花にする  
 列島の一隅にいま種をまく  
 人情の入った涙壺貰う

希久志 鉄心 三吉 権八 比呂志 志重 秀香 山正 山南 保恒 邦人 江山 美恵子 半仙 伊久栄 恒心 贊平 吟平 和枝 よしえ 芳忠 柳風 千代子 幸苑 美由紀 久子

列島の畦に一本気で生きる  
 列島の汗に世界の目が光る  
 次の世は百姓やめて海渡る  
 列島の真ん中花の博覧会  
 涙腺がゆるんで丸い絵が描けぬ  
 綱渡りしているような家計簿だ  
 六月は弁天様もみどり色  
 億の金積んだら若さ呉れますか  
 窓をあければ私を呼んでいる若葉  
 喪が明けて女なみだを捨てました  
 おもいで六月が来るしげき節  
 列島に地響き立てて友が死ぬ  
 若いもんから起爆剤もらってくる  
 日本列島傘のマークで埋ってる

肩書が多く出勤して困る  
 善人の帽子に止まる赤とんぼ  
 企みへぼたんの白がまぶしすぎ  
 怒らない妻が一番恐ろしい  
 恋心うかつに握手いたしません  
 再会の余韻に溶ける角砂糖  
 みじかい詩に人間さんを踊らせる  
 パレットに春の絵具があふれだす  
 チャップリンの歩幅で父が消えて行く  
 ここからは明日のドラマにとつておこ

白漢子 正坊 いわゑ 柳伸 日枝子 諷云児 諷人 朱夏 作二郎 一 路

佳句地十選 (前月号から)

小林妻子選

水鉄砲撃つ時は若返っている

柳川東大阪

森下

愛論報

苦句

たご焼きを食へて世界を論じてる  
贅沢は無縁の世界山頭火  
世界から平和のバズルまた落けず  
生と死の狭間に迷う銀世界  
うぬぼれのポーズ背中を狙われる  
道化師のポーズの影にある涙  
老婆と並ぶポーズの照れくささ  
お茶漬けの味が心をあたためる  
温い風袋小路に吹き溜まる  
み仏に心も通う落いお茶  
落ちこんだ奈落でふれる手が温い  
だまし舟母は笑顔で乗って来る  
告白をすする笑うなど念押しして  
笑われていると気付かぬ目の笑い  
笑われて一つ大人に成れました  
赤ちゃんが笑う楽しい夫婦の絵  
多情仏心見すかされてる薄笑い  
踏んで見る父の歩幅は広かった  
じだんだを踏んで自分を叱れるか

南大阪川柳会

中川

滋雀報

奏月 憲太郎 文秋 唐佑 喜風 寿美 柳宏子

水掛不動果報を願う細い指  
此の上は寝てまつ他はおまへんナ  
果報者と言われて仕方なく笑う  
それではなかった火の音水の音  
よく切れるナイフを持つている才女  
才女から見れば男がもの足らず  
つまりいた石に才女が支配する  
表には出ない才女が支配する  
鼻柱折ってやりたい才女面  
雨の日は雨を古くへ返り咲き  
体面を捨てて書くへ返り咲き  
体面を気にするうちは酔ってない  
体面が踏みこませない崖つぶち  
体面にかかわりませんとたしなめられ  
体面を飾って見せて門構え  
体面の肩書が取れ不精髭  
体面を先ず考えるのし袋  
体面を捨てておかねにお辞儀する  
善人だから長い貧乏耐えてる  
つらだからローンの鎖やうと切れ  
一生は長いじっくり生きてゆく  
付き合いの長い富山の置き棄

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

鶴千羽道連れにする原爆忌  
綿帽子父へハンカチそつと貸す  
エプロンをおいも濡らして  
滝しぶきお不動さんの無表情  
濡れそぼつ身がわり地蔵までの径  
紫陽花の女哀しみだけに濡れ

正一 石舟 梨枝 芳子 年代 天樹

萬九郎 文江 天梢 雀踊子 智子 勝美 シメ子 シマ子 新造 作二郎 柳伸 頂留子 覚然坊 しんじ 悟郎 トミ子 真柳 恒明 久子 章久

言いわけを聞かずに女濡れて去に  
下積みがすめば今日から濡れ落葉  
ずぶ濡れになっても帰る家がある  
小さい恋濡らして去つたりラの雨  
母の心を濡らしてばかり鳥訛り  
種を時き芽が出て変わる日記帳  
決心が変わり断崖降りてくる  
風無明生れ変わるものならば  
目を少しみどりへ向けて休ませる  
自転公転地球は今日も廻ります  
さすが東京ついで雑踏に酔わされる  
まだ来ないつばめ案じている古果  
紀子さんと同じ挙式へ招かれる  
お婆ちゃん何不足ない朝のお茶  
ポックリさんの帰りのバスで死にはった  
妻の名は忘れはせぬが又「おーい」  
追伸に少しあまえている女  
自分史を思い出すまま書いている

尼崎尾浜川柳会

春城武庫坊報

晩めしにメロンがついて誕生日  
ここですよつばめ忘れずきておくれ  
待合所愚痴と叱言を聞いている  
人の目も慣れてきました車椅子  
言い慣れて領くことが多くなる  
知らぬ間に慣れてしまった悪い癖  
凡人に慣れて警戒心を欠く  
慣れた頃一番悪い車事故  
板前の慣れた手付きに味がささえ  
慣れている方の鉄は貸さぬ父  
止り木で波乱に満ちた過去を飲む

寅之助 保蔵 六浦 昌子 美智子 向西 歌子 いわお 敏之 弘治

紫香 園歩 諷云児 武庫坊 作二郎 正子 佳秋 敬 凡人 保蔵 英子 歌子 伊三郎 静夢 美智子

汚職した過去に肩書ついていた  
貧しかった過去を忘れさす老いの余裕  
野仏に一輪足して過去を聞く  
親だけが満足してゐる雛祭り  
花道を飾ってくれた妻の皺  
首飾り妻には少し派手すぎる  
飾り気が無い男だが魅力的  
終章を飾る言葉が見つからぬ  
飾る気があって女は生きてゐる

堺川柳會

宮本かりん報

飯の世の浮き草同土手をつなぎ  
水筒に菓立ちし吾子の名がのこり  
ひまわりの移り氣太陽傾かす  
手をかして深みにはまるだまし舟  
かりそめの筈が深みに滑り落ち  
傾いた支店へ鬼を派遣する  
日時計の傾く音をきいてゐる  
ロボットが勝手に動いたら怖い  
飯の世で一途に咲かす薔薇の花  
一本の徳利を分ける飯の宿  
人生の幕を貸衣袋で開ける  
真相を飯の話のように言う  
飯住居飯住居として二十年  
末席へ謙虚に耳を傾ける  
貸し借りは別竹馬の友という温み  
飯にでもくらししてみたいいいお人  
老いに手を貸して坂道登り切る  
独身と勝負に決めて目刺し焼く  
放浪の飯住いにも陽の温み  
悪友は黙ってお金貸してくれ

紫 香 夢之助 十四郎 石舟 佳秋 義嗣 澄子 すみ 武庫坊

傾いた地球でいつも綱渡り  
ピンと来て立てた飯説が凶に当り  
時間を少し貸して下さい子がいます  
身勝手さびりしい此は側に来る  
飯住居のつもりこの街好きになり  
同居なら嫁に傾くことにする  
駅前の人々の土地を値踏みする  
最後の水戦友は水筒伏し拝み  
飯縫いのままで一生終りそう  
勝手にしと言つても影がついてくる

岸和田川柳會

植山 武助報

馴れ染めは友の紹介だった妻  
紹介を嫌う息子の心意氣  
月末になるとあはれる不整脈  
月末の郵便受けにバーのつけ  
月末を留守番電話にする憎さ  
月末のオフィス影絵よく動き  
愛憎の境で女揺れている  
今日を境にすっぱりと切る未練  
境界のブロック猫の恋の道  
境界にある利き酒に知る旨味  
生と死の境を分けた胸の傷  
定年を境に生き方変えてみる  
堀出来てからお隣と口きかず  
ししおどし音が私の邪氣払う  
嬉しさがかくし切れない靴の音  
サイフォンの音軽やかに夫婦の絵  
日曜大工音ほど仕事はかどらず  
サイフォンの音がゴヒーうまくする  
歴史転換地球の軋む音がする

東 雲 頂留子 森子 泰子 紀美女 満洲 楓 信博 素灯 亮 通彦 希久志 文 勝晴 二南 月子 ひで こう 浪速子 富志子 惠空 武助 柳宏子 喜久子 さよ子 一弥 みよ子 狸村 甘平

性別の境薄れてゆく怖さ  
音たてて崩れるマイホームのブラン  
音もなく過疎の漁港に雨が降る

岩美川柳會

羽津川公乃報

家裁から凶星射られた負け戦  
カラフルないろに私の色を足す  
ユーモアの欠けたシナリオ父が書く  
躰いた石がシナリオ変えさせる  
八起き目のファイト雑草よりもらう  
死神もファイトでいつか逃げて行く  
シヨックにはならぬ病名告げておく  
養女だと知ったシヨックの非行歴  
笑わな顔がバランス崩して  
しあわせと金のバランス狂いだす  
バランスの崩れた顔を愛される

三幸川柳教室

桜井 千秀報

見栄捨てたおかげで治る肩の凝り  
連れ出して並とは言えぬ鰻めし  
見栄張らず実直な父だから好き  
見栄張らず老顔を守る古のれん  
理解したような顔して出る画廊  
一石を投じて味方の有無を見る  
味方から崩れた傷が深すぎる  
門を出る迄の味方と見抜いてる  
こもりが味方につくとと言う不安  
本当の勇氣弱者へ味方する  
味方ではないかも知れぬ影法師  
手柄立てすぎて味方に狙われる  
写経する心に仏味方する

白光子 天笑 萬的 忠良 照女 單車 美恵子 美代子 芳江 公乃 大漁 千秀報 嘉寿子 正雄 かなめ 千枝子 幸子 孝子 和子 道子 靖子 幸子 結実 保州 美英子

横顔に未練が見えた月明かり  
 疑問符で終わる言葉にある未練  
 未練断ち切れず抱いている花の種  
 今頃にバズルが解けて来た未練  
 去る人へ未練な傘をさしかける  
 花言葉添えた未練がふがない  
 消しゴムの粉に溜まっている未練  
 何やかや言うて印鑑まだ押さず  
 ゴツゴツの手にも温みのあつた父  
 刻み煙草の父の教えが生きている  
 無位無冠の父の残着は作業服  
 年季積む父は手加減してくれぬ  
 ネットタイはずすと父は三枚目  
 厳格な亡父を憎んだ日の若氣  
 二の舞を踏ませぬ手の平手打ち

おっぱい川柳会

松村迷観子報

由梨 和子 三千子 精子 玉枝 茜 千秀 桂香 美子 利子 朱夏 高夫 好笑 みね 鉄治

新緑の皇居に平和かみしめる  
 新緑をほめて写真の中にいる  
 氣まぐれの道で緑の風に合い  
 花博に緑の風が吹いてくる  
 開発の波に緑地が吸い込まれ  
 土を割り小さな緑が顔を出し  
 庭の木の緑が冴える五月晴  
 新緑の道一ぱいの春温路  
 新緑が日々濃くなる梅雨便り  
 霧晴れて山の緑が春を呼ぶ  
 コシヒカリ緑が濃くなる五月風  
 開発の緑だんだん消してゆく  
 連山の緑天まで続きそう  
 新緑を見届けてから散る落葉

スミエ かおり 迷香 白柳子 放任 ひかり よしみ 明人 マサエ いさむ チカエ 迷貫 吟笑 迷観子

川柳はびきの 塩満 敏報  
 明日の夢いっばいつめた子の袋  
 地下道に政道糺す壁新聞  
 ストレスをためる袋は大き目に  
 ウメ地下の柱怒っているのです  
 ライバルの中味気になる熨斗袋  
 寝袋で一人味わう大自然  
 洗濯筋に詰めてババ帰る  
 御堂筋もぐらのように通いなれ  
 毎日カネーションの日と思  
 藤色を着ればやさしい顔になる  
 スタミナが効いて横道それかける  
 占いに溺れて寒い耳である  
 花の芽の呼吸がわかる歳を知り  
 句読点打たぬ喋りに流される  
 順風に馴れて漫画しのばせる  
 塾へ行く袋に透画し出す  
 春ですぬ隣の猫が通い出す  
 たまに履く下駄の鼻緒にかみつかれ  
 やけ食いに胃袋白い旗をふり  
 旅の空血圧などは忘れてる  
 男には持たせたくないゴミ袋  
 花作り花と心が通い合い  
 袋から世間のぞいたカンガル  
 野仏も居辛くなった土地騰貴  
 正論が袋叩きで千鳥足  
 鯛焼きが袋の中でくもっている  
 嫁が来て堪忍袋を締め直す  
 その先は靴が知ってる梯子酒  
 寝袋の男が山の夢を見る

重人 かつみ みつこ ガン吉 志洋 利武 蛙声 一枝 絢子 葉子 寿美 与呂志 繁男 美代子 白水 敦子 キミ子 悦子 ケイ子 比沙胡 さいち 伴子 昇 隆 胡村 泰子 吐来 敏

川柳塔あおもり 波多野五楽庵報  
 平凡な愚妻がそばにいて平和  
 平凡な様だが一本芯があり  
 平凡に生きた証か旨いお茶  
 草をとる汗がめがねのつるを這い  
 ふと恋の雫しのばす追伸文  
 虎の子が枕の下で睡れない  
 独身の俺に高嶺の膝枕  
 旅枕今夜の夢は子等のこと  
 みちのくのまくらに香るひがん花  
 わが子にも虚栄で弾かすピアノあり  
 プロなみにピアノを叩く友ありき  
 喜怒哀楽ピアノにいつも見抜かれる  
 チューリップ歌をピアノで唄えない  
 ピアノ弾く椅子から尻尾はみだして  
 鍵盤を激しく叩く一つの詩  
 いまに見ろ見ろと奈落にいる枕  
 凡にいてプライドなどは考えず

川柳岩出

小倉アサ報

喜衛 昭治 トキ 凡凡子 風衛 善花 一光 一修 容子 仟雄 花実 葉人 五楽庵 甲吉 綾子 瑞穂 愛子 和子 永年 喜市 義美 千代子 正直 英子

友達に化粧落として逢いにゆく  
病友を和ます花の彩を選る  
さしのべる手と手に温い血がかよつ  
親子ほど違ふ友から借りる知恵  
舌が酔い目が酔い友が散つて行く  
終電の時間とゆとりを歩を合わせ

西宮北口川柳会 林 はつ絵報

多忙さに紛れ不遇は気にしない  
気紛れに吐いた言葉に裁かれる  
ゼツケンをほごに紛らしてはならぬ  
才気今日もあなごの器からあふれ  
程々の器で夫婦仲がよい  
大器にはなるつもりないつくしんぼ  
水無月の部屋はあじさい彩にする  
鍵かけぬ部屋で素直な子の育ち  
飾らない部屋に憩いの場所がある  
イラストの裸婦は男の部屋が好き  
地平線の果てでわたして待つわたくし  
地平線をはるかに越えていった兵  
何時も目指したけれど遠い地平線  
蝸牛が見たいと思う地平線  
鶴遊ぶ速写連写の地平線  
地平線かすみ老眼鏡変える  
地平線シューッ少し酔つてるな  
太陽を切るサバンナの地平線  
爪はじきのなかで男の貌をする  
母老いて昔の写真にひとり言  
握手したけれど指切りまではせず  
甘栗が干からびていている一人だ  
関西の水にも馴れた暮を買つ

アサ 春子 精子 昌子 忠雄 与呂志  
よし津 園歩 光代 杜的 正坊 喜代治 諷云児 正一 佳秋 年代 富喜子 潔 柳伸 国公 武庫坊 英子 香子 江美 富久恵 たす子

漢方が効いてオナラの音を出し  
新築に印捺すだけでチャイムなる  
書架におき場に困る古道具  
讃岐航路母と最後の旅となり  
地下鉄を出ると生きている風に出  
地下街で迷いトイレも見つからず  
ポルポトが抜けて半端な手打式  
企みへ紙人形の目が怖い  
いい方に解釈をして花を買う  
初恋の人の訃を聞く青嵐  
妻病んで全自動さえ使いかね

川柳塔唐津支部 久保 正敏報

腹が立つ陽のある方へ家が建つ  
紫陽花の花に女の顔をみる  
清い手もいつか生活の灰汁が沁み  
今日ひと日如何に過すか思案する  
ゆとりだろ三度の食事も本も読む  
横綱へ挑む力士の稽古量  
ホランテイア人の苦しみ分ち合い  
奇麗だが何処か抜けてる目鼻立ち  
平和主義日本列島時化模様  
貧乏に負けぬ貯金を朝の九時  
道行けば横切る虫の過ぐを待つ  
新婚の窓の明りは先に消え  
ざらついた声気に入らぬ倦怠期  
石けんの香りを妻が突いてくる

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

社党なら完全試合出来ますか  
どさくさですらり渡れた丸木橋

しげお 春蘭 保蔵 宣子 柳影 白漢子 圭坊 いわゑ 静子 みつ子 萬的 喜久亭 紀一 治幸 ちよ 義美 剛司 旭恒 虹郎 四郎 高ル 高明 遊女 正敏 歳栄 民子

逃げ腰を母の言葉が引き戻し  
気の小さい花粉で人の手を借りる  
逃げ腰でセールスマンと差向い  
何んとなく逃げ腰になる初対面  
蜜蜂は花粉に酔つて飛びぬけと  
どさくさの中で一円根を下ろし  
どさくさに忘れ名草と名付けられ  
飽食の世にふるふきの懐かしさ  
ふり向けば逃げ腰かるい春の風  
争点をぼかし汚職がぬけぬけと  
釣堀の鯉が近よる逃げ腰で  
逃げ腰の支えとなった妻も古い  
天山の花粉もまじる黄砂吸う

打吹川柳会 奥谷 弘朗報

金力はないが情けは持っている  
尾骶骨力の限界知っている  
毎日を力いっぱい生きようね  
裏口でお金の力見て帰り  
力では勝てぬが口だけは負けぬ  
馬鹿に成る力をもつて川渡る  
黙秘権妻の力に負けられない  
力尽き明日の夢が見られせん  
力すく愛の扉は明きません  
風せんを力まかせに投げつけた  
オイコラの権力時代セピア色  
精一ぱい力を出して綱引きだ  
風雪に耐えた木にああ力こぶ  
無い智慧が力んで一人相撲とる  
執念と力はあるがなのお金  
力いっぱい走つても追いつけぬ

鈴江 かつ子 ひデ子 好栄 聖子 智重子 北斗 博利 悦良 世似 清泉 白汀 静歩 雄々 寿美子 仙岳 早苗 小鹿 典子 孝恵 節子 野草 信子 幸枝 幸子 勝見 螢

力んでも妻が一番知っている  
いつも僕は他力本願風ぐるま  
どう見ても力の上に馬鹿がつく

鹿野みか月

土橋

色いろと変る紫陽花雨に恋う  
三原色あれば立派な虹を描く  
素つ裸で誓った事に悔いはなし  
人恋いや悔いにつながらる計を恨む  
青空に申しわけない唾を吐く  
癌告知悔い残さずに生きてやる  
ママゴトの葉っぱさきで黄昏る  
悔いても悔いても血が止まらない台所  
戦争が染みてる手紙だから読む  
行間に心をはせてラブレター  
照れながら書いた手紙が其処にある  
寶石より手紙くださいいねと言われ  
停年で五十の手習い孫と行き  
小さい夢抱いてきたのに五十肩  
水色のそら愛の夢覚えてます  
まだ五十行く道迷うかたつむり  
世が世なら五十過ぎても返り咲く  
ふと地球を案じる箸を割っている  
ラブレター舌にとろける味でくる  
手紙では埒があかぬと汽車に乗る  
あなたは自然な色の服を着る  
風待月に後悔しない旅に出る

今もお明るい人を恋うてゆく  
残り火を愛の菓箱で燃やしている  
一抹の悔いが他人を遠ざける  
ぼんと出た言葉を悔いて胸重い

妻 子  
とみ お  
弘 朗  
螢 報  
明 美  
大 漁  
はる お  
風 人  
富 恵  
早 苗  
み さ 子  
孔 美 子  
保 子  
香 葉  
敦 子  
夕 峰  
小 生  
静 生  
き み 子  
美 代 子  
智 恵 子  
喜 与 志  
く に 子  
忠 良  
正 道  
幸 代  
し げる  
き み 子  
三 千 代  
八 重 子

今日の悔い明日へとつなぐバネにする  
息子からまた金くれの手紙だな  
冥土には悔いすっぽりと脱いでゆく  
なつかしい手紙に友が死んだこと  
家柄を包んだ地図が剥がせない  
緑の中に浸ってみどり選んでいる  
この雨に悔いを流して明日を待つ  
六月の汗を流してヒール抜く

川柳ささやま社

遠山 可住報

かもしれぬ噂を雲が撒いてゆく  
翔びすぎる女雲から出てこない  
絵のような雲が心の棘を抜く  
働き蜂悔いを残さぬ時惜しむ  
逃げ道の一つに羅漢の森がある  
浮雲を亡夫とも想う愛哀し  
逃げ道が里の資産にある甘え  
一刷毛の雲十五夜を詩にする  
悔いのない一日花は咲きつづけ  
雲行きが変わつてうまい茶をすす  
悔い一つ捨てる遍路杖をさし  
惜しまれる足跡白く悔いはなく  
逃げ道を少し開けて子に意見  
一刷毛の雲に絵があり詩もあり  
笑われていてもピエロは悔いてない  
偶然の出合いで変る女道  
雲一つ浮いて童話に還る富士

城北川柳会

神夏磯典子報

講演会高齢者の話題が多くなり  
生かされて上手に話すは素晴らしい

かつ乃  
はるお  
隆 風  
小 鹿  
公 弘  
汲 香  
和 子  
蝮  
貞 子  
とみ子  
靖 子  
ヒサ子  
和 子  
つや子  
百合子  
千代子  
きし江  
富 美  
エキオ  
ゆうや  
金之助  
テ ル  
越 山  
文 平  
可 住

古寺の野仏われに笑みかける  
古い形の服だごとくも暖かい  
連休も雨にたたられごろ寝する  
年金の話はっかりとは淋し  
春の香り芹摘みしあせ懐かしい  
わが女房古くなつたが味が有り  
此処だけの話が翅が生えて翔ぶ  
ペランダのみどりの鉢が一つ増え  
嵯峨の雨のみどりの彩を深くする  
捨てきれぬ母が残した古き本  
あいにくお線り返したる老いの辞書  
古たみ妻が手まめに拭き掃除  
何年振り心が通う同窓会  
オムスビがみどりの谷へ落ちて行く  
誰か一人ピエロになれば和が生れ  
幸せは話の解る姑と居る  
太陽の炎え尽きる日は思うまい  
大掃除アルBUMなど見て渉らす  
やじ馬のゼッケン付けて無位無冠  
悠然と祖父の顔して大時計  
逢いにゆくみどりの帯をボンと打ち  
一粒が大事な母の田植唄  
風かるく五月はみどりの服で来る  
ふれあいの輪にかいまみる好き嫌い  
真珠抱く貝の痛さに気付かない  
梅の香に気持もほぐれ打ち解ける

川柳泉尾

吉川 寿美報

面替で何時のまにやら羽根が生え  
何気なく割箸捨てている恐さ  
無事祈り御札かち合う旅靴

きみ子  
ふみ  
午 郎  
春 雄  
寿美礼  
敏 子  
白 峰  
温 子  
静 子  
八重子  
文 子  
秀 夫  
登美子  
静 歩  
昭 子  
典 子  
新 一 郎  
た だ し  
達 子  
史 風  
公 一  
満 津 子  
きくゑ  
倫 子  
右 近

宝クジ当たった夢見て希望持ち  
大雑ば後でおつりがけを聞わってき  
勝手つんば雑音だけを聞いている  
モザイクの人生がある雑居ビル  
地球儀の北半球が燃えすぎる  
北風に向う勇氣は持っている  
北へ向く男の口は一文字  
北風に耐えた大樹の老い静か  
北風の情け聞かないことにする  
通りぬけ遠くの花がよく見える  
支那そばと言うて夫は浪漫派  
老夫婦無性にラーメン食べとなり  
ラーメンに命託した冬の山  
ラーメンがうまいと思つバスポ  
ラーメンでお開きにする三次会  
ラーメン鉢二つ重ねて旅に出る  
ラーメンをすすりながらのプロポーズ  
じゃが芋のような女で脇役で  
幸せは小さくてよい粉吹きいも  
肉じゃがの好きな男で円満で  
じゃが芋のようないなたの力こぶ  
ジャガイモ一隅に転がて人嫌い  
平凡なじじゃが芋ですのわが息子  
ジャガイモの種をうずめし日の凍てし  
じゃがいもころもつくり愛を語ろうか

たとう紙に私の夢がまだ眠る  
ポケットに昨日が残るメモ用紙  
紙はコブ弱い男の愚痴を聞く  
天は二物与えぬ料理下手  
戦時中どんな料理もうまかつた  
僕の手で君の時間を料理する  
伝統の味で老舗の七珍味  
赤ベンが料理の腕を泣かして  
娘の料理はめて一夜の灯に泊る  
料理のレパートリー一週間で繰返し  
草に寝て一人大空占めている  
ニューモード淡い緑がマッチして  
新緑に私の心吸い込まれ  
緑の森へストレス捨てて行く  
緑追いた丘へと翔んだ夏帽子  
傷ついた木馬みどりに癒される  
それから変人扱いして困る  
変人も愛する乳房二つ持つ  
懸命に歪んだまるを描く私  
自我ひとつ持ち変人にされている  
さざ波がきらきら湖は鼓動する  
矢車がきらきらまわる五月晴  
きらきらと身を飾つる赤い爪  
きらきらと少女の瞳恋を知る  
金齒きらきら女は強くなりました

真剣な汗白無垢に吸いとられ  
脇役が掻いている汗はほんものだ  
子育ての汗は成り振ら構わずに  
掌の汗を気づかせる思いやり  
可愛い夢に汗をかかせる思いやり  
砕かれた夢のなかに汗が棲む  
空き缶の灰皿ゆかし過疎の駅  
灰皿をわざと出さない長話  
灰皿へためらい捨てる正念場  
灰皿に命あずけて吐く紫煙  
凶られてはとも知わらず咲いたバラ  
完璧へ妻にも言わぬ出すこと  
凶りごと九官鳥が喋り出す  
盛り上げを凶る拍手を頼まれる  
凶られたとも知らぬ一途な愛に負け  
凶られた父さんとするフルムーン  
幸せを凶つてくれた湯につかる  
親を見て子らは自立を凶つてる  
小細工を凶るが森に迷いこむ  
先方の出方を凶り策をねる  
柄になく白紙へ筆がすすくみます  
一文句書けば白紙も色を見せ  
男の目撃して白紙委任する  
可能性いっぱい秘めた白い紙  
実印を添えた白紙は裏切れぬ  
この話無かったことにして訣れ  
美しく染めて下さいませ白紙

裕美 保州 アサ 精太 凡子 寿子 瑞穂 二南 吞天 綾子 英子 鉄治 春夫 高代 光代 豊太 好笑 公守 武治 信子 結実 白光子 克子

日焼けした紙に抱かれた甘い桃  
失恋をもやす小さい灰になる  
社会部でジョークのわかる紙さがす  
紙一重程の負けなら認めよう

煩惱を消す汗だからひたすらに  
灰皿も掛軸もかえ夏座敷  
善人を図ると罪が重くなる

大きな樹何人卒業生見送った  
ヨチヨチ歩き大きい靴を履きたがる

川柳塔まつえ 恒松 町紅報

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

川柳塔きやらばく 政岡日枝子報

(中)文 子  
和 子  
悦 子  
一 枝  
(南)文 子  
はつ子  
昭 子  
シメ子  
洋 子  
恵 美  
寿 美  
白 水  
シマ子  
敏  
美津子  
弘 子  
マリ子  
美南子  
可 愛  
淑 子  
トミ子  
美代子  
あさこ  
義 一  
美 子

秀子 荒介 鶴丸 雪子 小鹿 邦代 房子 重昭 みえ 房子 幾子 満江 早苗 雄々 多賀子 青湖 寿美子 文子 代仕男 静恵 長三 静江 与根一 叮紅

緑良 稚秋 信秋

八重子 保子

大いなる御心のまま生かされる  
大風呂敷じろげストレス逃がそうか  
大きな相談いつも仏さまにする  
言葉に飢えて失語症になるオウム  
あの人は言葉たくみで大嫌い  
言葉じりつかまえないで尾がぬける  
樹も鳥も風の言葉にさからわぬ  
ふと洩れる言葉お前に罪はない  
都合よく言葉の綾と言うけれど  
いつからか言葉のかわりする眼鏡  
未い実たべて赤い言葉が転げ出る  
水たまり越えて言葉の裏が読め  
神仏に解る言葉をひとつ持つ  
裏町で神の言葉を解く神父  
極まりの牡丹に言葉少なめに  
苦しんで吐く美しい言葉たち

寿々子 玲子 子より子  
恵子 亜弥 ゆき  
田鶴 瑞枝 千春  
日枝子 花子 荒介  
登栄 千代 千代

わが道を行ったり来たり振り返る  
嘘ばれてもうひとつ嘘を重ねたり  
うそ言うなど教え自分を振り返る  
嘘はいや本当の愛をみつめたい  
歳月が嘘の呵責を消してゆく  
宿題を忘れ苦しい嘘をつく  
ひまわりの花振り向いた子の笑顔  
海にきて海の蒼さを身に纏う  
おにぎりや卵で塩のありがたさ  
雑魚なりに生きて懸命海の底  
能書きはいらぬ素敵な海だから  
振る鈴にあれもこれも願いかけ  
海の幸宅急便で食卓に  
海よりも広い心で許してる  
機上からけがれない海安堵する  
衰えをおいでおいでと足を呼ぶ  
衰えをもう胡麻化せぬ針の穴  
衰えを見せた途端の四面楚歌

英楽 光梅 惠峰 千松 昌子 武枝 逸枝 泰子 千代女  
智恵子 今日子 雅子 登美子 美緒 美子 三四子 澄子 剛也

心配は要らん要らんと笑う医者  
心配で心配でとお菓子食べている  
野次馬の輪が解け小火ですまました  
旅立ちに猫無表情で顔をなめ  
おがむ手も木喰仏も深い皺  
海からの風が男を支えている  
しわ寄せがいつまで続く消費税  
梅雨晴間蜘蛛早速の店開き  
ひとり住い古い廊下を光らせる  
水入らずの情けが残る低い屋根  
どん底で笑える酒がある長屋  
あのミスが後添えになる噂  
父の日にお茶とお菓子を送るくる  
昇進がまた通過する父の駅  
寝たきりの姑の簞司へ入れる風

眉水 きく子 寿美子 明吉 博史 武庫坊 富子 圭坊 つえ子 佳秋 明光 福一 登志美 諷云児 とく子

新風 伯里 由多香 友夫

川柳高知

川竹 松風報

一番茶五臓にしみてくる香り  
肩の荷があるから生きて行ける道  
自然食人畜無害虫喰い葉  
青虫がこつせんと消え春終わる  
世は電化炭鉱節がもう聞けず  
全自動いよいよよけ者にする  
原発を嫌う電化の推進者  
末世まで照らす電化か仏間の灯  
おふくろの味は電化をよせつけぬ  
電化にも死角があった老いの過疎  
人の良い男が背負う重い肩  
連休へ天気は味方してくれず

竹萌 有佳 春童 幸泉 和広 佳風 一求 菊野 朱坊 千恵子 松風

トンボ羽化かすかに露の玉揺れる  
ラムネ玉鳴らし海まで炎天する  
水玉のネクタイ世界に翔んでいる  
球拾い明日を期してる泥まみれ  
山の湯を月が覗いて困ります  
登つたら何もなかった神の山  
心配はするなと警察から電話  
心配はしても手助けしやれぬ  
心配をして捨て猫を見に戻り

萬的 作二郎 小英子 悟郎 露児 正坊 正坊 正坊 白溪子

川柳会

田中 正坊報

外交の力不足に国揺れる  
やつと出た芽に大輪の夢を抱く  
逆境も神が組まれた宿題か  
七転びまでは神様手を貸さぬ  
共稼ぎ料理も手抜き愛で埋め  
世渡りは手抜き要領はつたりも  
人生の手抜きが老いてから重い  
手抜きせず育てた鉢が答えくれ

孝人 三代治 八重子 由多香 伊都子 武士 豊子 智恵子

いさり火川柳会

尾崎三代治報

岩原 番水報

窓際であとの準備の線を引く  
 ゆずれない意地が辞表の準備する  
 準備万端それでも尻尾出でしまっ  
 人生諸活字に残す古稀になり  
 残つて余生に合わす影ぼうし  
 アイデアへ残り木命あたえられ  
 小指に残る固い約束信じきる  
 残り火を憎いあなたがませにくる  
 会者定離愛の残像燃え盛り  
 水ぬるみ鮎の潮のぼり見て帰る  
 病床で今日も汗んだ陽がのぼる  
 太陽がのぼるとじつとしておれぬ  
 きざはしを登つて神に近づこう  
 あの坂をのぼるとバラの花がある  
 頂上があるからのぼる気にもなる  
 勲章が欲しくて男樹にのぼる

翠洋会

中西兼治郎報

貧乏に慣れて貧乏苦にならず  
 追いかけて追いかけ切れぬ夢の中  
 盆まつり追つてくるよう秋彼岸  
 追いつくは自由妹先に嫁き  
 追いつける余裕をもって二番手に  
 五十年さすがに馴れた仕上げぶり  
 歲月はおまえとおれを慣れさせる  
 追い風に任せてヨット昼とする  
 深追いをしすぎて剣ヶ峰に立つ  
 薄味に慣れて無口なあはら骨  
 ゴキブリが馴れてフトンに寝ています  
 飽食に慣れた親子で情がない  
 おんな窮地へ追いつめるのは女

林太郎 俊路 艶子 喬水 呼風 登美枝 あづま 圭一郎 黙光 秀和 砂山花 旋風 粗粒 一歩 一枝 山人 兼治郎 みよ子 絹子 宣司 真 すすむ 英一 正雄 恭昌 千歩 東雲 佳秋 さと美

ためらっている間に逃げた青い鳥  
 追われなくなつてかがるも淋しがり  
 決断をしかねています見合の夜  
 今日もまた何を追うのか日が昇る  
 ためらわず競りおとす絵の二億円  
 値がはるとためらう妻をもち上げる  
 そとすもばつばつ言えて住みなれる  
 年金を追つてきたのは銀行屋  
 手の届くとこにお金が置いてある

川柳藤井寺

高田美代子報

紫の恋がスタート藤の棚  
 藤色の好きな女で裏切れぬ  
 藤の花ゆれて胡蝶と結ぶ夢  
 たくましい男が好き藤の蔓  
 どの石ころもみなそれの旅のもの  
 人間の愚を戒める原爆碑  
 記念写真もそり返つてのがあなた  
 ジャンプ傘お前このころ気がきつい  
 古傘を秘めて女の遍路笠  
 男傷を泣かせたりはしない  
 水平線の高さを傘を持っている  
 傘一つ男の肩が濡れている  
 嫁 姑傘を斜めにさしかける  
 逢つて来た余韻が残る傘を干す  
 もつ逢わぬ思いを傘に言いきかす  
 賞罰もなく定年の赤いバラ  
 三代目女系家族に鯉のぼり  
 祝辞よむつともらしく聞いている  
 お祝いの裏に隠れる七転び  
 行く先は二人でできる祝い舟

楓 榎 綾子 みつ子 光子 登志実 正坊 鬼遊 美房 柳太 文子 一屯 かつみ 昭好 史洋 志美 淑子 隆 森子 透太 治子 政代 敦子 修六 金太

祝い酒昔はなしがしたくなる  
 祝電を打つてひとりになつて  
 祝い膳これから炎える気の傘寿  
 美男とも美女とも見える石仏  
 美しい別れに毒矢のぞかせる  
 人を刺すには美し過ぎるナイフ  
 母の背はまるく耐えてる美しさ  
 美しい小函に蛇を棲まわせる  
 美しさ求めて悩む絵具皿  
 美しい木だ百年を生きてなお

川柳ねがわ

高田

博泉報

天の邪鬼だとして半端は許せない  
 季の節目節目に疼く傷  
 反応はピタリ投書となつて来る  
 ベテランの眼が一瞬を鷹になる  
 嫁の娘へ積み荷が増える親心  
 その時は節目も知らず無我夢中  
 半端では済まない話詰めて来る  
 順調に前歯一本生えしめた  
 腹すえた歯え語調に狂いなし  
 ベテランに会えば無口な人である  
 満月の河原で河童きゅうり積む  
 衣替えして心にも持つ節目  
 人生をすねて半端に生きた悔い  
 順調をすりと風にさらわれる  
 忠実に応える靴がちびている  
 一善を積んで冷や奴が美味い  
 スタートはびりでもベテラン慌てない  
 半端布集めて母のお針箱  
 スイスと事が運んでいる怖さ

岳 花梢 吐来 美子 吸江 与呂志 弘子 比呂志 和子 童児 章 覚然坊 あやめ 庸佑 時弘 一途 かすみ 一鬼 度 光子 三郎 奏月 悟郎 藍子 権太 正坊

息子には無理をしても応えませす  
 ベテランが防風林になつてくれ  
 血と汗で積んで崩れぬ金字塔  
 竹の節にいのちをもらう竹人形  
 半端者同士が午前二時の酒  
 いい星のもと順調にゴールイン  
 愚かにも核に應える核を持ち  
 ベテランの時計は正確すぎないか  
 阿呆になり切れたら徳は積めそうだ  
 夫婦にも竹の節目の長短か  
 その先をもつベテランは考える

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

やさしさの笑顔に晴れた朝の空  
 空なみだ胸にいちもつあるらしい  
 病床の空に飛ばそう千羽鶴  
 青春の空は真白し陽に映える  
 アメリカにどない聞こえる田植歌  
 マドンナが田植している撮影所  
 出稼ぎの父ちゃん帰る田植唄  
 絵に画けば田植の苦勞見当たらず  
 早乙女の笠覗きこむ若葉風  
 都会から逃げて田植も板につき  
 正しい姿鏡に問えば恥ずかしい  
 弱虫か知らぬがまっすぐ立っている  
 時効だから正しい事が言えるなら  
 正論に涙のませた多数学  
 外人の方が正しい日本語  
 正しかった歴史時代に変えられる  
 法話聞く正座も出来ない老いの膝  
 丸腰で正しい道を説きに行く

月子 菜月 楓楽 英比古 三千子 鬼遊 天笑 薫風 紫香 美幸 頂留子 隆 真柳 凡九郎 夕花 柳伸 和子 弘直 一風 かつみ 覚然坊 三男 とみを 晋吾 正好 勝美 美津留

使命をは果して風のそよと吹く  
 使命かも知れず胸を刺す言葉  
 むずかしい使命をしばし花の中  
 冬を越す使命をもった蟻の汗  
 使命感分校の灯に老教師  
 使命感男の顔を作り上げ  
 山川草木守る使命を負うヒト科  
 トウシユーズその迫力に耐えている  
 定年で妻の迫力離縁状  
 七光り迫力のない三代目  
 それこそ頑張れカマキリ ホクシンゲ  
 迫力を禪寺雪の修行僧  
 本気で叱る母の迫力には勝てず

しんじ 悦郎 朝子 欣之 冬葉 度 泰 一志 雅士 春子 喜風 シマ子

生々庵句碑除幕式

上田翠光氏(本社参事・奈良県宇陀郡  
 室生村向洲四一四〇)の邸内に麻生路郎  
 句碑「名も知らぬ山の起伏をうれしがり」  
 が建てられてから今年で四十年になるが、  
 さらに同邸内に七月十日、川柳塔社初代  
 主幹、日本川柳協会の二代目会長の中島  
 生々庵の句碑

生甲斐は男同士が信じ合い

が建立されたので、路郎句碑建立四十周年記念式典を兼ね、鈴蘭の咲く九月中旬に除幕式が開かれる。詳細は後日発表。

水府忌

番傘本社8月句会

とき 8月5日(日)午後6時

ところ 大阪市立労働会館小ホール

宿題(各2句)

「憎い」 山本 翠公選

「幽霊」 保木 寿選

「三味線」 片岡つとむ選

「先達」 西田柳宏子選

「流れ」 磯野いさむ選

席題 一題(午後7時締切り)  
 会費 500円

番傘川柳本社

暑中お見舞い申し上げます

森中恵美子

〒566 摂津市別府二〇一〇一五三  
 電話(〇六)三四〇一七三九五

## 8 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 および 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	3日(金)午後1時から 一度・寄り道・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 土用・雷・姿勢・話す	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	11日(土)午後1時半から 傑作・夜景・温泉	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	12日(日)午後1時から 風船・ファイト・吹く・防ぐ	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から 魚・さりげない・沸く・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いゝゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
富 柳 会	16日(木)午後1時から 遺言・夕立・夕焼け	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
南 海 川 柳 会	17日(金)午後6時から 投資・耳打ち・弱者・時代	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	19日(日) 正午から 直線・特技・波・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
南 大 阪 川 柳 会	19日(日)午後6時から 美点・水増し・今・理詰め	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 和・建てる・踊り・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	23日(木) 正午から 足踏み・立て札・意外・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1-7-7-905 福盛京童 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 <b>各題2句</b>
岸 和 田 川 柳 会	23日(木)午後6時から 留守・写真・準備	岸和田市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助
川 柳 東 大 阪	25日(土)午後6時から 風鈴・エリート・台本・先祖	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
※堺川柳会は5日(日)第8回夜市川柳大会(91頁参照)		

★10月号からスペースを広げますので、新規掲載を希望される句会は、  
8月20日までに日時・題・会場・投句先を下記へお知らせください。

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

# 編集後記

☆先日発刊された直原玉青「画伯著の『画句禪に生きる』」の中にこんなことが書かれていた。「美術家は線と言うものを本当に知らなくてはならない。線の美に対して無感覚な美術家は味なき塩である」。私たち川柳作家は、この線の代りに「ころ」と置きかえてみると、いろいろと教えられるところがあるのではなからうか。☆また、「花は黙って咲き、黙って散ってゆく。そして再び枝にはかえらないけれども、そのひととき、その一か所にこの世のすべてを託している。それが花の声であり、一枝の花の真である。永遠に滅びぬ生命の喜びが悔いなくそこに輝いている」と、画伯の師であった柴山全慶師に教えられたとある。川柳は人間であり、自分である限り、押しつけの理論や多弁は、川柳の本当

のころではないような気がしてならない。

☆先生、先生と呼ばれることについて、詩人のサトウハチローがこんなことを言っていたと何か書かれていた。「一杯飲みに行つた時など、女将は金を持つていそうな人は誰でも社長と呼び、その他の人は先生と呼んでおけば無難だとのことで、僕の所に先生と言つて寄つて来る奴は、何か頼みごとがある時に決つてゐるね。」

「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」(萬)

▼「一歳の恋人不二田一三夫を狂わせる」以前、本誌の編集をしていた故不二田一三夫氏の一句である。今まで孫の句を嫌っていたのに、孫が生まれて、この句の素晴らしさに感心している。同じ年頃の幼児を見るにつけ、あれこれ幼児の中で比較対照する自分が愚かにもおかし。人間で勝手なもの、ことは孫に限らず

自己中心的である。

▼近く的美容院へ子供を連れて来るお客さんがいる。

「世間話によくするが、三つにもなつてオシッコが何故言えないのだろうか」と母親が嘆けば、まだおしめのとれない三歳児が、「世間ばなしはよくするのになんやオシッコが言えないんやろ」と、人ごとのように話していた。紙おしめは便利であるが、不快感がないためか、何時まで経つてもオシッコの言えない子になるらしい。勿論、メーカーもこの点、気がついて快適すぎるにない紙おしめが作られてゐるらしい。頃を見て、もめんのおむつに換えなければと考へている。

▼おしめに限らず、あらゆる分野で優秀なものができだした。余りにも専門化されて近より難い機器まで市販されてきている。〈安楽死で使える機械〉ができて、その使い方を習つてゐるうちに死んでしまふのではないかと心配している。新幹線が速くなつても空港が増えても、われわれの幸せに余り関係のないことだ。(き)

★六月号のこの欄に校正者の方からご注意をいただいた。私の文章の中で引用した「後世畏るべし」が違つているという指摘である。「後世」という言葉はあるが、この場合は「後から生れてくる者は、これからどれほどの力量を示すかはかり知れないから、おそれなければならぬ」(国語大辞典)という意味だから、「後生(こうせい)」が正しい。この語句があまりにもポピュラーなので、原典や辞典で確かめなかったためのミス・ステークである。

★それからもう一か所、同号の「川柳塔」(10P)の安藤寿美子さんの句「前世の悪縁ですと仲が良し」は三世の一で、前の世という意味で使っているから先の場合とは反対に「前世(ぜんせ)」が正しく、原句をチェックできなかった点では校正者のミスである。前と後、生と世、何とも日本語はむずかしい。Mさん、ありがとうございました。

★今年から七月号に暑中見舞広告をお願いしたところ予定のページ数では掲載しきれないほど申込みがあり今月号にも掲載させていた。あらためて各地句会(柳社)と同人・誌友のみなさんのご協力に厚くお礼申し上げます。川柳塔社は、発行所を中心とする近畿関係の句会や同人だけで成り立っているのではなく各地のみなさんの強力な支えがあつてはじめて維持されてゐる。社告にあるように、十月には「川柳塔」碑の参拝を兼ねて同人総会と本社句会を開くので、この機会にぜひ、お出かけたとき、総会での審議にも参加し、本社句会のふんい気にもふれてくださるよう、切にお願いしたい。(正)

## 作品募集

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選  
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選  
 銀河系 (3句) 河内 天笑 選  
 茴香の花 (3句) 八木 千代 選  
 吟詠課題 (3句) 「法律」 阿萬 萬的 選  
 「降る」 松本 元江 選  
 「鉄道」 蘭田 猿杓 選  
 初歩教室「倦きる」 (3句) 辻 白溪子 担当

10月号発表 (8月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

11月号課題吟 「天」「文化」「親しい」

同人費・誌代などのご送金は、川柳塔社会計室 (高杉鬼遊方) へお願いします。

〒581 八尾市中田2-302  
 振替口座 大阪 8-33368  
 誌代 半年分 3,800円 (送料共)  
 1年分 7,500円 (送料共)

〒545 大阪府阿倍野区三木町二一〇一六  
 ウエムラ第2ビル202号室  
 発行所 川柳塔社  
 電話 (06) 691-1456  
 振替口座大阪 8-33368番

定価 六百元 (送料51円)

平成二年七月二十五日印刷  
 平成二年八月一日発行

編集兼 西尾 栞  
 発行人 藤原 童心  
 印刷所 藤原 童心 社

## 本社 8 月 句 会

日 時 8月7日 (火) 午後5時半  
 会 場 メンズファッションセンター3階  
 中央区内本町1-1 (電話06・941・1918)  
 地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角  
 おはなし  
 兼 題 「情け」「逆」「倉庫」「旨い」「弾む」  
 西尾 栞 選  
 河内 天笑 選  
 神谷 凡九郎 選  
 福本 英子 選  
 西口 いわゑ 選  
 春 城 武庫坊 選  
 席 題 1 題 当日発表 各題 2 句以内厳守  
 投 句 費 500円  
 柳箋 (4cm×19cm) 1葉に1句を書き、  
 投句料310円 (62円切手5枚) 同封のこと

## 本社 9 月 句 会 7 日 (金)

兼 題 「息」「天狗」「困る」「つらい」「乗る」

## NHK川柳作品募集

課 題 「魅力」 森中恵美子 選

ハガキに3句 8月10日締切

投句先 大阪市中央区馬場町3-43

NHK大阪放送局

「ラジオセンター」川柳係

発 表 8月26日(日)ラジオ第1放送

午前11時5分から

## 西日本文字放送作品募集

課 題 「手紙」 森中恵美子 選

ハガキに3句 8月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

## NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……  
 夜を通り過ぎたら  
 また陽がのぼっていた。  
 男のロマンと  
 フォーマルと。

**OSK JEFF**  
 ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7  
 ☎ 06 (941) 8015

## 第42回 西日本川柳大会

とき 9月2日(日) 午前8時半開場  
 ところ 久米南町中央公民館

(JR弓削駅下車、徒歩5分)  
 兼題と選者(各題2句)

「問う」 去来川 巨城選

「笛」 岡田 千茶選

「コピー」 河島 いち子選

「続く」 恒弘 衛山選

「たいへん」 西田 柳宏子選

「気まぐれ」 林 荒介選

席題 1題・特別題 1題

会費 2000円(記念品・昼食・発表誌呈)

呈賞 総合成績で知事賞ほか

投句 各題2句以内

20×4センチの句箋一枚に1句、裏面に雅号を書き、8月31日までに投句料1000円を添え、左記へ

〒709-36 岡山県久米郡久米南町下弓削

弓削川柳社

主催 弓削川柳社